

令和2年度指定

あいちグローバルハイスクール
研究開発実施報告書

《第2年次》

A I C H I

G L O B A L

H I G H S C H O O L

令和4年3月

愛知県立時習館高等学校

「時習館 A G H」の学び

愛知県立時習館高等学校長 森島日出夫

昨年度より、愛知県教育委員会からあいちグローバルハイスクール（A G H）の指定を受け研究開発に取り組んでいます。「時習館 A G H」は平成 27 年度に文部科学省から指定を受け、令和元年度までの 5 年間にわたるスーパーグローバルハイスクール（S G H）の取組を継承しています。S G H では「日英独高校生の国際シンポジウム等によるグローバル・リーダーの育成」を研究開発構想として掲げ、「問題（課題）発見・解決力」「論理的思考力・批判的思考力」「英語によるプレゼンテーション能力」「異文化理解力」「プレゼンテーション能力」「コミュニケーション能力」「グローバル課題への関心」「自国の伝統や文化に対する理解力」の 8 つの国際的素養を身につけた「日本の将来を創造的に描くことのできるグローバル・リーダーを育てる」ことを目標に取り組みました。「時習館 A G H」における海外学習については、本校生徒だけでなく東三地区のコアスクール生徒の参加を求め実施しています。

この研究開発を行うにあたり、第 1 学年で「アジアの中の日本を知る」、第 2 学年で「世界の中の日本及びアジアを知る」、第 3 学年で「日本の未来を創造的に描く」ことをそれぞれ目標にし、3 年間を見通した活動を実施することで着実に成果を上げていくことを考えています。「時習館 A G H」で学んだ生徒たちにとって、ここで体得したことは将来必ず生きてくると確信しています。あわせて関わる教員の資質向上に繋がるのが期待できます。

今年度の「時習館 A G H」の取組は、大きく次の 3 つにまとめることができます。

(1) 日本及び日本を取り巻くアジアについての探究活動・カリキュラム開発

『アジア探究』（第 1 学年）、『国際探究』（第 2 学年）、『グローバル社会探究』（第 3 学年）を学校設定科目として開設し、問題解決型の探究活動に取り組みました。『グローバル社会探究』（第 3 学年）では、グローバル・リーダーとして果たすべき役割や責任を考えるという視点に立ち、日本の未来を創造的に描くことを盛り込んだ個人研究を自分の将来の目標や進路目標に関連づけて取り組みました。1 学期に日本語での中間発表を、2 学期に英語での最終発表を行い、3 年間の探究活動のまとめとして英語で論文を作成しました。

また第 1、第 2 学年の国語では日本の伝統・文化の理解力と発信力等の向上にそれぞれ取り組みました。

(2) A G H 発展学習

グローバル課題への興味・関心を喚起し、探究活動テーマに対する理解を深めるため、大学と W e b 会議システムを利用し、講義やワークショップを通して視野を広げる取組を行いました。企業との連携では、放送局の職員による講義を対面にて行うことができました。

(3) A G H 海外学習

海外研修は新型コロナウイルス感染症対策のためすべて中止としました。海外研修は中止としましたが、国内研修は、内容の濃いプログラムを展開することができました。国内研修に参加した生徒は、豊橋技術科学大学で学ぶ外国人留学生に対し W e b 会議システムを利用して各自の研究内容を発表し、英語によるプレゼンテーション能力育成の機会となりました。また W e b 会議システムを利用して、姉妹校の生徒に対する研究発表や交流を行うことができました。

（各取組の詳細につきましては、この報告書の記載をご覧ください。）

本校の海外姉妹校は、英国・ロンドンのセント・ポールズ校とセント・ポールズ女子校、ドイツ・ミュンヘンのオットー・フォン・タウベ・ギムナジウム、マレーシア・ペナン州にあるジッ・シン・ハイスクールの 3 カ国に 4 校あり、姉妹校と多角的かつ継続的・安定的に国際交流を進められる教育環境が整っています。今年度は新型コロナウイルス感染症対策のため、姉妹校への訪問、本校への来校はかないませんでした。この友好関係を活かし、本校の教育目標にある「国際人としての資質をもった人間」の育成に今後も力を入れていきたいと考えています。

次年度以降も S G H で培ってきたものを活かし、「時習館 A G H」をより質の高いものにするべく、これまでと同様に学校全体が一丸となって深化・充実していくよう努めてまいります。

目 次

巻頭言

研究開発完了報告書	1
I 研究開発の概要	9
1 学校の概要	
2 研究開発構想名	
3 研究開発の目的・目標	
4 研究開発の内容・方法	
5 研究開発組織	
II 研究開発の経緯	13
III 研究開発の実施の効果とその成果	13
IV 今後の課題と研究開発の内容及び成果の普及	15
V 研究開発の実施内容	
1 カリキュラム開発	
(1) アジア探究	18
(2) 国際探究	24
(3) グローバル社会探究	30
2 AGH海外学習	33
3 AGH発展学習	
(1) 国内大学との連携	39
(2) 企業との連携	40
(3) 姉妹校との連携	42
4 その他の取組	
(1) 1・2年国語科の取組	43
(2) グローバル・リーダーに求められる道徳心の涵養	45

【関係資料】

資料1	令和3年度入学生教育課程表	46
資料2	アジア探究 探究活動発表資料	47
資料3	国際探究 探究活動発表資料	51
資料4	グローバル社会探究 探究活動発表資料	55
資料5	AGH海外学習 探究活動発表資料	57
資料6	AGH意識調査 結果	61

令和4年3月31日

研究開発完了報告書

愛知県教育委員会高等学校教育課長 殿

住 所 愛知県豊橋市富本町
学校名 愛知県立時習館高等学校
校長名 森島 日出夫

令和3年度あいちグローバルハイスクール（AGH）事業に係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和3年4月1日～令和4年3月31日

2 研究開発名

「日英独高校生の国際シンポジウム等によるグローバル・リーダーの育成」

3 研究開発概要

本校の「自ら考え自ら成す」の精神を実践し、教育目標の一つである「国際人としての資質をもった人間の育成」を図る。具体的には「問題発見・解決力」「論理的思考力・批判的思考力」「英語によるプレゼンテーション能力」「異文化理解力」「プレゼンテーション能力」「コミュニケーション能力」「グローバル課題への関心」「自国の伝統や文化に対する理解力」の8つの国際的素養を身に付けた、日本の未来を創造的に描くことのできるグローバル・リーダーの育成を以下の内容で取り組む。また海外学習では、コアスクールとも連携を行う。

- (1) 学校設定科目を開設して探究学習等に取り組む「カリキュラム開発」
- (2) 国内の大学等と連携したグローバル課題の探究活動やワークショップ、講演会を実施する「発展学習」
- (3) 英国・ドイツの姉妹校との『日英独高校生による国際シンポジウム』の開催や、マレーシアの姉妹校との連携、海外研修（英国・ドイツ・マレーシア）、海外の大学、国際関連機関、企業等との連携による講義やワークショップ、探究学習の成果発表会を実施する「海外学習」

4 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
アジア探究	←						指導	指導			発表 指導	→
国際探究	←						指導				発表 指導	→

グローバル社会探究	←		発表 指導					発表 指導				
海外学習		←					発表			代替 事業 渡英 中止	代替 事業	代替 事業 渡欧 中止
国際シンポジウム							中止					
発展学習			姉妹校 中止			大学	姉妹校 中止		企業		大学	姉妹校

(2) 実績の説明

A カリキュラム開発（学校設定科目）

①『アジア探究』〔第1学年321名全員〕2単位、公民科

- ・公民科教員3名による指導、「アジアの中の日本を知る」ことを目的とした、日本及びアジア地域の歴史と現状の理解、諸課題に関する考察と提言。
- ・「アジアにおける日本」の立場を理解するための基礎知識の習得。

[5月下旬～10月中旬]

- ・探究活動で取り上げる地域と課題に関する調べ学習〔夏季休業中〕。
- ・探究活動の実施〔10月中旬～2月上旬〕

5地域（東アジア、南アジア、西アジア、東南アジア、日本）及び5分野（難民・外国人労働者・貧困・豊かさ、経済・貿易、民族・宗教、環境問題、その国特有の課題）から、関心に即して設定したテーマに関する4人編成のグループでの研究。

大学の教員及び留学生による指導・助言（教員：延べ36時間、留学生：中止）。

- ・クラス発表会、探究活動発表会の実施（パワーポイントスライドによる発表、質疑応答、ルーブリック評価の実施）〔1月中旬～2月上旬〕。
- ・探究活動を進める上での県内外の大学・企業との連携。

（連携先：東京大学、関西学院大学、日本放送協会）

○SDGsとの関連（G：SDGsにおけるゴールを示す。以下同様）：

探究活動のテーマ（G1、G4、G5、G6、G7、G8、G10、G13、G14、G15、G16、G17）

②『国際探究』〔第2学年グローバルコース（文型）107名〕1単位、総合的な探究の時間

- ・第2学年グローバルコース（文型）の正副担任団6名による指導、SDGsに示された課題を解決するためにどのような取組や支援が考えられるかを具体的に提言。
- ・SDGs導入講義の実施〔4月中旬〕後、探究活動の実施。

日本版SDGsが扱う優先課題別の個人研究と発表〔4月下旬～5月下旬〕

グループ研究のテーマ設定と個人研究・グループ協議〔6月上旬～10月上旬〕

大学の教員による指導・助言（延べ4時間）〔10月中旬〕

研究の深化・考察・検証〔10月下旬～11月上旬〕

研究報告書作成・英語でのポスター作成・発表練習〔11月中旬～1月下旬〕

探究活動発表会の実施（英語によるポスター発表、質疑応答、ルーブリック評価実施、大学の教員による助言（延べ4時間））〔2月上旬〕

- ・「日英独高校生による国際シンポジウム」は10月実施予定であったが、中止。

○SDGsとの関連：

探究活動の趣旨（G17）

探究活動のテーマ（G1、G2、G3、G4、G5、G6、G7、G8、G9、G10、G11、G12、G13、G14、G15、G16）

- ③『グローバル社会探究』[第3学年グローバルコース(文型) 116名] 1単位、総合的な探究の時間
- ・第3学年グローバルコース(文型)の正副担任団6名による指導、グローバル社会における自らの役割を考えるための、各自の進路目標に関する日本の課題についての個人研究と、未来志向の提言。
 - ・探究活動の実施。
 複数の文献を利用した基礎研究[2年次春季休業中]
 追加文献調査による研究、アンケート作成、中間発表会[4月中旬～6月中旬]
 アンケート調査等による研究の深化と最終発表の準備[6月下旬～11月上旬]
 オンラインでの最終発表会の実施(研究成果と自らの行動計画を発表、3年間の取組の総括、大学の教員による指導・助言(延べ24時間)) [11月中旬]
 - ・研究成果として英語論文の作成(英語科の授業にて)。
- SDGsとの関連：
- 探究活動の趣旨(G17)
- 探究活動のテーマ(G1、G2、G3、G4、G5、G7、G9、G10、G11、G12、G13、G14、G15、G16)

B 海外学習

- ①国内研修[第1学年、第2学年グローバルコース(文型)の希望者及びコアスクールの希望者]
- ・「日本を取り巻く諸課題」についての探究活動を実施。
 - ・7回の研修を実施。コアスクールの1名を含む、計26名の生徒が参加、うち24名が修了。ALT延べ8名、大学の留学生4名によるプレゼンテーションの指導・助言。英国・ドイツ姉妹校の生徒及び教員も参加予定であったが、当該回の研修は中止。
 - ・最終回の研修(10月31日(土))は「English Assembly II」として実施。
 ALT2名による世界の諸課題に関する講演及びワークショップの実施(英語)
 大学の留学生4名による指導・助言
- SDGsとの関連：
- 探究活動のテーマ(G2、G4、G8、G9、G10、G12、G14、G15、G16、G17)
- 「English Assembly II」での講演のテーマ(G10、G16)
- ②渡航直前研修[第1学年、第2学年グローバルコース(文型)の希望者及びコアスクールの希望者(マレーシア研修のみ)]
- ・数回の研修を予定し、ALTによるプレゼンテーション指導を行う予定であったが、実施前に海外研修の中止が決定していたため、当該の研修も中止。
- ③海外研修[第1学年、第2学年グローバルコース(文型)の希望者及びコアスクールの希望者(マレーシア研修のみ)]
- ・姉妹校での研究発表、現地の国際機関・企業等での講義やワークショップ、姉妹校生徒宅でのホームステイ等、マレーシア[1月]、英国・ドイツ[3月]の3か国での一週間の研修を予定していたが、中止。
 - ・参加予定人数及び予定連携先は、以下のとおり。
 マレーシア 人数：6名(コアスクール1名含む)、連携先：ジッ・シン校など
 英国 人数：8名、連携先：セント・ポールズ校、セント・ポールズ女子校など
 ドイツ 人数：4名、連携先：オットー・フォン・タウベ・ギムナジウムなど
 - ・なお代替事業として、国内研修で取り組んだ探究活動の内容に基づき、英国及びドイツの姉妹校3校とのオンラインディスカッションを実施。事前研修にて、ALTによる英語によるディスカッション及び発表能力の向上と大学教員による研究の深化。コアスクールの1名を含む、計10名の生徒が参加。
- SDGsとの関連：探究活動のテーマ(G2、G8、G10、G12、G15、G16、G17)

④『日英独高校生による国際シンポジウム』

- ・英国及びドイツの姉妹校3校の生徒とともに、グローバルな共通課題についての英語でのディスカッションを予定していたが、中止。

C 発展学習

①国内大学との連携

- ・大学教員によるオンライン講義と質疑応答、現地フィールドワークを通じた、探究活動テーマへの興味関心の喚起や理解の深化、論理的思考力・批判的思考力の育成。
- ・第1回（連携先：東京大学） 令和3年9月30日（木）
東京大学生産技術研究所教授 芳村圭 氏による講義「気候と水循環研究の最前線～水の同位体から古文書まで～」と質疑応答。
- ・第2回（連携先：東京大学） 令和4年2月9日（水）
関西学院大学高等教育推進センター准教授 時任隼平 氏による講義「探究活動を充実させるためのポイントを知る～これでいいのか？私の探究～」と質疑応答、参加生徒自身の探究活動を見直すことを目的としたワークショップ。

○SDG s との関連：

講義テーマ（東京大学：G13） 講演の趣旨（関西学院大学：G17）

②企業との連携

- ・社員による講演とディスカッションを通じた、探究活動テーマへの興味関心の喚起や理解の深化。
- ・連携先：日本放送協会 令和3年12月13日（月）
2部構成で実施。第1部は第2学年文型（グローバルコース）生徒を対象に、アナウンサーが取材に関わった大学教員による「スポーツとSDG s、ジェンダー」に関するオンライン講義。第2部は第1学年及び第2学年グローバルコース（文系）の希望者を対象に、アナウンサーによるパラリンピック選手の取材及び職員による日本放送協会の脱炭素に対する取組に関する講義。

○SDG s との関連：講演テーマ（G5、G7、G10、G12、G13、G16、G17）

③海外の高校との連携

- ・姉妹校の教員による講演を通じた、探究活動テーマへの興味関心の喚起と理解の深化及びグローバル社会で果たすべき役割と責任についての探究。
- ・姉妹校（マレーシア ジッ・シン校、英国 セント・ポールズ校及びセント・ポールズ女子校、ドイツ オットー・フォン・タウベ・ギムナジウム）の教員及び生徒の来日時に、希望者参加型の特別講座の実施を予定していたが、中止。それを受け、令和4年3月4日（金）に英国 セント・ポールズ校及びセント・ポールズ女子校の教員による特別講座を企画、実施。英国及び南アフリカの文化、英国における日本文化の受容、英国の（コロナ禍における）教育事情に関するリレー講義。
- ・令和2年12月に来日したスイスからの留学生1名が、令和3年7月まで、第2学年文型（グローバルコース）クラスに所属し、授業に参加。
- ・令和3年8月に、一昨年度『SGH海外学習（マレーシア研修）』に参加した生徒を対象に、マレーシア ジッ・シン校とのオンライン交流を実施。

○SDG s との関連：講演・交流テーマ（G3、G4、G11、G17）

D 成果の普及

- ・「AGH海外学習（国内研修）」にコアスクールの生徒1名が参加、修了。また同生徒は海外研修代替事業にも参加。
- ・令和3年6月11日（金）の成果発表会（SSHと共催）にて、高等学校教員を対象に『グローバル社会探究』の中間発表及び「総合的な探究の時間」に関する情報交換を実施。な

お『グローバル社会探究』の成果の公開は、SGH指定期以降で初めて実施。

- ・令和3年12月19日（日）開催の文部科学省・筑波大学主催「2021年度全国高校生フォーラム」にて、「AGH海外学習（国内研修）」参加者1名が、同事業での研究を発表。
- ・令和4年2月4日（金）の探究活動発表会にて、中学校・高等学校教員を対象に『アジア探究』『国際探究』の研究発表及び「総合的な探究の時間」に関する情報交換を行い、成果の普及を図る予定であったが、中学校・高等学校教員の参加については中止。
- ・令和4年3月末、成果報告書を愛知県内の高等学校と中学校（いずれも一部）に送付。

5 目標の進捗状況、成果、評価

（1）目標の進捗状況及び成果

①目標「アジアの中の日本を知る」

以下の取組（ア～ウ）及び「AGH意識調査」【成果報告書巻末「AGH意識調査」参照】の結果やアンケートの生徒意見や感想【『研究開発実施報告書』の各項目参照】から、概ね目標を達成できている。

ア アジアを専門とする大学教員による「アジアの国々からみた日本」という視点での探究活動の指導・助言の実施（学校設定科目『アジア探究』。なお留学生による指導も計画していたが、中止）。

イ 外部講師による講話、ワークショップ、ディスカッションの実施。アジアに関する課題を考え、日本を見つめ直した（「AGH発展学習（国内大学との連携、企業との連携。なおマレーシア姉妹校との連携も計画していたが、中止）」）。

ウ 日本の近現代の短歌や、古代中国の思想に関する探究活動の実施（第1学年国語科『国語総合』、第2学年国語科『古典B』）。

○生徒「AGH意識調査」の結果（数値は8段階評価で、8が最も評価が高い。数値は第2回調査の3学年平均であり、[]内の数値は第1回調査のものである。）

「グローバル課題への関心」（本校が生徒に身に付けさせたいと考える、8つの国際的要素のうちの一つ。以下「 」内のものは、断りのない限り同様）は6.2 [6.0] であり、「異文化理解力」（6.3 [6.1] ）とともに高い。

②目標「世界の中のアジア及び日本を知る」

以下の取組（ア～ウ）及び「AGH意識調査」「学校評価アンケート」【成果報告書巻末「AGH意識調査」参照】の結果やアンケートの生徒意見や感想【『研究開発実施報告書』の各項目参照】から、概ね目標を達成できている。

ア 「世界の中のアジア及び日本を知る」という観点からSDGsに関する個人研究を実施した後、班単位の研究に発展させ、SDGsに示された課題解決の方法について提言（学校設定科目『国際探究』。なお「日英独高校生による国際シンポジウム」は中止）。

イ グローバルな視点からアジアや世界に対する理解の深化をめざした外部講師による講話、グループ討論、ワークショップ、ディスカッションの実施（「AGH発展学習（国内大学との連携、企業との連携、3か国の姉妹校との連携）」、「AGH海外学習（国内研修、海外研修代替事業。海外研修は中止）」）。

ウ スイスからの留学生の授業への参加と交流。なお英国・ドイツ・マレーシアの姉妹校生徒についても同様の計画を立てていたが、中止。

○生徒「AGH意識調査」の結果

「グローバル課題への関心」は6.2 [6.0] であり、「異文化理解力」（6.3 [6.1] ）について高い。また「将来留学したり、仕事で国際的に活躍したりしたいと思うか」という質問に対して、第2学年グローバルコース（文型）の生徒の67.0% [62.3%]、第3学年同コースの生徒の81.0% [78.6%] が肯定的に（8段階評価の5以上）回答。

○教員「学校評価アンケート」の結果

「本校は、国際理解を深める教育を推進している」という質問に対して、5段階評価の平均が4.3（昨年度4.5）であった。

③目標「グローバル社会における日本の未来を描く」

以下の取組及び「AGH意識調査」【成果報告書巻末「AGH意識調査」参照】やアンケートの生徒意見や感想【『研究開発実施報告書』の各項目参照】から、概ね目標を達成できている。

- ・生徒各自の進路に照らし、日本の課題を挙げてグローバル社会における自分の役割を考える探究活動に取り組み、英語で発表（学校設定科目『グローバル社会探究』）。昨年度の反省を踏まえ、中間発表は1・2年生及び高等学校教員を交えて実施し、最終発表も英語母語話者を含む大学教員が講師を務め、オンラインにて効果的に実施。

○第3学年「AGH意識調査」の結果

「グローバル課題への関心」は6.5 [6.3] であり、8つの国際的要素のうちで異文化理解力（6.7 [6.3]）について高い。また「将来留学したり、仕事で国際的に活躍したりしたいと思うか」という質問に対して、同学年グローバルコース（文型）の生徒の81.0% [78.6%] が肯定的に回答（8段階評価の5以上）。

④目標「本校の教育目標『自ら考え 自ら成す』の精神の実践」

以下の取組及び「AGH意識調査」【成果報告書巻末「AGH意識調査」参照】の結果から判断して、概ね目標を達成できている。

ア 探究活動において、指導や助言を受けつつも、テーマ設定や調査方法の考案・実践において主体的に活動（学校設定科目『アジア探究』、『国際探究』、『グローバル社会探究』、第1学年国語科『国語総合』、第2学年国語科『古典B』、「AGH海外学習（国内研修、海外研修代替事業）」、「AGH発展学習（国内大学との連携）」）。

イ 「AGH海外学習（国内研修）」参加者1名が、文部科学省・筑波大学主催「2021年度全国高校生フォーラム」に参加。学識経験者及びWWL校（拠点校及び連携校〔海外の高校含む〕）、SGHネットワーク参加校の生徒を交えた研究発表とディスカッション。

○生徒「AGH意識調査」の結果

主体性を問う設問から構成される「問題発見・解決力」は5.7 [5.4] であり、「コミュニケーション能力」（5.4 [5.2]）、「英語によるコミュニケーション能力」（4.7 [4.4]）とともに、全学年とも年度内での大きな伸長がみられる。

⑤目標「教員の指導力向上及び成果（SGH指定期のものを含む）の普及」

以下の取組及び「学校評価アンケート」【成果報告書巻末「AGH意識調査」参照】の結果から判断して、概ね目標を達成できている。

ア 各学年の探究活動の指導において、SG部（AGH担当分掌）所属教員を中心として担当教員間の連携に努め、必要に応じて指導内容の確認・擦り合わせを実施。

イ 外部指導者からの高評及び「AGH意識調査」の結果を、全教職員で共有。

ウ 「AGH海外学習（国内研修、海外研修代替事業）」にコアスクールの生徒1名が参加し、探究活動や英語ポスター作成の方法の指導等を通して、研究開発の成果を伝達。

エ 成果発表会にて、高等学校教員を対象に『グローバル社会探究』の中間発表と「総合的な探究の時間」に関する情報交換を実施。なお探究活動発表会でも同様に、中学校・高等学校教員を対象に『アジア探究』『国際探究』の研究発表及び「総合的な探究の時間」に関する情報交換を行う予定であったが、中止。

○教員「学校評価アンケート」の結果

「本校のSSH・AGH事業（探究活動の指導を含む）は、教員の能力向上に有益である。」という質問に対して、5段階評価の平均が3.7であった。

(2) 評価

本校が設定した、未来を創造的に描くことのできるグローバル・リーダー育成のために必要な8つの国際的素養についての調査（「AGH意識調査」8段階評価）を、第1学年及び2・3学年文型（グローバルコース）の生徒に実施した（6月の事業開始前と11月（第3学年）・2月（第1・2学年）の探究活動発表会後）。また「学校評価アンケート」を生徒、保護者、近隣の中学校教員に実施した（12月）。

①生徒の変容

[第1学年]

- ・「AGH意識調査（6月と2月に実施）」の結果

8つすべての要素で、生徒の能力が同等か高まった。とりわけ「論理的・批判的思考力」「プレゼンテーション能力（表現力）」「英語によるコミュニケーション能力」は大きく数値を伸ばした【成果報告書巻末「AGH意識調査」参照】。

要因としては『アジア探究』でアジア地域に着目した研究を行うよう、カリキュラムに改善を加えたことが考えられるほか、「AGH海外学習（国内研修）」に参加した生徒が『国語総合』やSSH学校設定科目『探究基礎』等で発表する姿に他の生徒が感化されたとも考えられる【上記4（2）・5（1）、『研究開発実施報告』Ⅲ1（1）参照】。

[第2学年]

- ・「AGH意識調査（6月と2月に実施）」の結果

8つすべての要素で、生徒の能力が高まった。とりわけ「論理的・批判的思考力」「プレゼンテーション能力（表現力）」は2回の調査で0.4ポイント以上数値を伸ばし、「異文化理解力」「グローバル課題への関心」は、2月実施の調査にて評価6.0以上を示した【成果報告書巻末「AGH意識調査」参照】。

課題解決策の提言に主軸を置いた『国際探究』のカリキュラム開発や、「AGH海外学習（国内研修、海外研修代替事業）」「AGH発展学習（国内大学との連携、企業との連携）」等に生徒が積極的に参加したことによる成果と考えられる【上記4（2）・5（1）、『研究開発実施報告書』Ⅲ1（1）参照】。

[第3学年]

- ・「AGH意識調査（6月と11月に実施）」の結果

8つすべての要素で生徒の能力が高まった。とりわけ「論理的・批判的思考力」「問題発見・解決力」「異文化理解力」「自国の伝統や文化に対する理解力」における数値の増大が際立つ【成果報告書巻末「AGH意識調査」参照】。

『グローバル社会探究』で中間発表を行ったことで、生徒がより基礎的な研究を重視した結果と考えられる【上記4（2）・5（1）、『研究開発実施報告書』Ⅲ1（1）参照】。

②教員の変容

- ・「学校評価アンケート」の結果

「本校がSSHであり、AGHであることは、生徒にとって有益である」という質問に対して、5段階評価の平均が3.9であった。また「本校のSSH・AGH事業（探究活動の指導を含む）は、教員の能力向上に有益である」という質問に対しては、同じく平均が3.7であった【成果報告書巻末「AGH意識調査」参照】。

③保護者・近隣の中学校教員の評価

- ・「学校評価アンケート」の結果

保護者対象の「本校がAGHであることは、生徒にとって有益である」という質問に対して、5段階評価の平均が4.2となり、昨年度と同程度であった。また中学校教員対象の「本校がAGHであることは、周辺の中学校にとって有益である」という質問に対しては、昨年度と比較して0.1ポイント減であった【成果報告書巻末「AGH意識調査」参照】。

6 次年度以降の課題及び改善点

(1) 取組からみえた課題と改善点

- ・学校設定科目『アジア探究』では、研究の最重要点であるテーマ設定において、生徒が先行研究論文にあたり、研究レベルを向上させることの必要性が課題として残った。情報を得る上でもインターネットだけに頼らないように留意しながらも、図書館にある文献資料の利用は少なかった。『アジア探究』としての研究開発は本年度で終了するが、今後「探究」と付く科目が多く設定されることから、この反省を資料収集に関する指導の充実に生かすほか、班同士の意見交換から成長を図ることができるような体制づくりに努めたい。
- ・学校設定科目『国際探究』では、生徒たちが自ら課題を発見し、その解決方法の提言をするという一定の目標は達成できたが、提言内容の具体性や実現性について検証するところまで踏み込むことはできなかった。また、壮大で解決困難なテーマを設定したり、偏った視点のまま研究を進めたりする班がみられたことや、班により研究の深化度に差がみられたことから、問いを立て、研究を深化させる段階の指導方法に改善の余地が残る。
- ・学校設定科目『グローバル社会探究』では、従前の反省を踏まえ、中間発表会と最終発表会の方法を見直した。昨年度導入した初期文献調査やアンケート調査と同様、効果は大きかったと判断されるが、2学期に授業外での活動に多くの時間を割くこととなった点や、最終発表会の形態（クラスメイトの聴講の有無）が生徒によって分かれてしまった点は今後の課題である。研究の質を保ちつつも、生徒が効率よく研究に臨める体制を整えたい。
- ・「AGH海外学習」では、2年生の参加が少なかったことが課題である。探究活動未経験の1年生が2年生を見本とすることで、生徒が切磋琢磨できる環境の整備に努めたい。また、生徒が取り組む研究は人文科学系のものが多く、論理性に欠ける点は否めない。本年度実施した「海外研修代替事業」で大学教員から助言をいただいたことは問題解決の一助となるものであり、初期の段階でこの助言を生かし、研究を深める時間を確保したい。
- ・「AGH発展学習（大学との連携）」は来年度、夏と秋の2回の実施を予定している。主たる参加者となる2年生は『国際探究』で先行研究の分析や仮説に対する考察を行う段階であり、連動を図るなどして効果を高めたい。また「同（企業との連携）」においても生徒の研究テーマを鑑み、地域や業種を問わず多種多様な企業との連携を視野に入れたい。

(2) 評価からみえた課題と改善点

- ・各学年につき2回実施した「AGH意識調査」の結果から、「日本の未来を創造的に描くことができるグローバル・リーダー」に必要と考える「8つの要素」について、ほとんどの項目で評価が高くなった。2回の調査間での値の伸び率と平均値の推移をみると、昨年度と同様、1年生の「異文化理解力」「グローバル課題への関心」「自国の伝統や文化に対する理解力」の伸びが小さい。これらを伸ばす上で「AGH海外学習」「AGH発展学習」が果たす役割が大きいことは、SGH指定期の成果から明らかである。しかし、本年度の参加者数は例年と比べると少なかったため、積極的な参加を促す方策を考えたい。

(3) 今後の計画

- ・カリキュラムの変更により、授業で1年生が実践的な文科系探究活動を行う機会がなくなる。これを補完するのは「AGH海外学習」であると捉え、本年度実施した大学教員による探究活動指導や、姉妹校とのオンライン交流を軸に国内研修のプログラムを再編し、授業では得られない学びと経験ができる機会として位置付けたい。2年生向けには『国際探究』と「AGH発展学習」との連動を図り、相乗効果による能力の向上をめざしたい。

【担当者】

氏 名	齋藤 隆弘、清水 翼	TEL	0 5 3 2 - 4 5 - 3 1 7 1
e-mail	jishukan-ko@pref.aichi.lg.jp	FAX	0 5 3 2 - 4 7 - 7 5 4 4

I 研究開発の概要

1 学校の概要

(1) 学校名、校長名

①学校名 愛知県立時習館高等学校

②校長名 森島 日出夫

(2) 所在地、電話番号、FAX番号

①所在地 愛知県豊橋市富本町

②電話番号 0532-45-3171(代)

③FAX番号 0532-47-7544

(3) 課程・学年・学級数及び教職員数

①課程・学年・学級数(令和3年4月6日現在)

課程	学科		第 1 学年		第 2 学年		第 3 学年		計	
			生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
全 日 制	普 通 科	グローバルコース サイエンスコース	3 2 1	8					3 2 1	8
					1 0 7	3	1 1 6	3	2 2 3	6
					2 1 2	5	1 9 9	5	4 1 1	1 0
計			3 2 1	8	3 1 9	8	3 1 5	8	9 5 5	2 4

②教職員数(令和3年4月6日現在)

校長	教頭	教諭	養護 教諭	期付 教諭	実習 教員	非常勤 講師	事務 職員	現業 嘱託員	計
1	2	51	2	4	1	18	5	3	87

2 研究開発構想名

日英独高校生の国際シンポジウム等によるグローバル・リーダーの育成

3 研究開発の目的・目標

本校の「自ら考え自ら成す」の精神を実践し、教育目標の一つである「国際人としての資質をもった人間の育成」を図る。具体的には「問題発見・解決力」「論理的思考力・批判的思考力」「英語によるプレゼンテーション能力」「異文化理解力」「プレゼンテーション能力」「コミュニケーション能力」「グローバル課題への関心」「自国の伝統や文化に対する理解力」の8つの国際的素養を身につけた、**日本の未来を創造的に描くことのできるグローバル・リーダーの育成**を以下の内容で取り組む。また海外学習では、コアスクールとも連携を行う。

- (1) 学校設定科目を開設して探究学習等に取り組む「カリキュラム開発」
- (2) 国内の大学等と連携したグローバル課題の探究活動やワークショップ、講演会を実施する「発展学習」
- (3) 英国・ドイツの姉妹校との『日英独高校生による国際シンポジウム』の開催や、マレーシアの姉妹校との連携、海外研修(英国・ドイツ・マレーシア)、海外の大学、国際関連機関、企業等との連携による講義やワークショップ、探究学習の成果発表会を実施する「海外学習」

これらを踏まえて、研究開発目標として以下の5点を設定する。

- ① アジアの中の日本を知る
- ② 世界の中のアジア及び日本を知る
- ③ グローバル社会における日本の未来を描く
- ④ 本校の教育目標「自ら考え 自ら成す」の精神の実践
- ⑤ 教員の指導力向上及び成果(SGH指定期のものを含む)の普及

4 研究開発の内容・方法

(1) 現状の分析と研究開発の仮説

平成 27 年度から令和元年度の 5 年間にわたる文部科学省指定の S G H 事業では、カリキュラム開発及び国内外の教育機関・企業・国際関係機関等との連携を通して、日本の伝統文化を正しく理解し、それを外国の人々に的確に発信することや、グローバル課題に関心を抱き、国際的な舞台で活躍することを将来の目標と考える人材（「グローバル・リーダー」と呼ぶ）の育成に取り組んできた。具体的にはそのような人材が有する能力を「8つの要素」として位置づけ、それらの能力の育成を諸事業の中で如何にして図るかを考え、実践に移してきた。

その過程ではいわゆる「P D C A サイクル」の下、実施した事業の反省を他の事業や翌年度の同一事業に生かすことに継続して取り組んだことで、生徒の意識の変容は勿論のこと、その事業に携わる教員の意識、そして日々の授業にも変容がみられた。更には保護者や近隣中学校からも評価を受け、「時習館高校＝S G H」というイメージが次第に東三河地域に浸透した。

昨年度、愛知県教育委員会から A G H の指定を受けるにあたり、本校が S G H の指定を受けた 5 年間の研究開発の成果を、東三河地区を中心とする県下に広く普及させるとともに、少子高齢化が著しい東三河地区の活性化や将来の担い手の育成に資することを前提とした研究開発を、以下の 3 つの仮説に基づき、計画した。この仮説は S G H 指定時と同様のものであるが、実践にあたっては S G H 指定期の反省を踏まえ、新たな取組を適宜加えることを前提としている。

【仮説 1】カリキュラム開発等による日本の伝統や文化、諸課題に対する理解力、論理的・批判的思考力やプレゼンテーション能力の育成

カリキュラム開発や海外学習を通して、探究的な学習活動やその発表の機会を充実させることにより「日本の伝統や文化、諸課題に対する理解力」「アジアの中の日本の立場の理解力」「論理的・批判的思考力」「問題発見・解決力」「プレゼンテーション能力」等を向上させることができる。海外学習については、東三河地域のコアスクールの生徒も参加することで、地域の高校生の能力を向上させ、地域の発展に資することができる。

【仮説 2】国内の大学や企業等との連携によるグローバル課題の探究

学校設定科目で学習する内容を更に深化・発展させるために、国内の大学・企業等と連携した発展的な学習を実施したり、大学で学ぶ留学生とグローバル課題についてのディスカッションを行ったりする。これらの取組により「世界の中の日本の姿」や「グローバル社会における日本の役割」を深く理解し、自身が将来、東三河地域や日本、世界のために果たすことができる役割を考えるとともに、英語によるコミュニケーション能力を向上させることができる。

【仮説 3】英国・ドイツ・マレーシアの姉妹校や大学、国際関係機関、国際企業との連携によるグローバル・リーダーの育成

本校の姉妹校であるセント・ポールズ校、セント・ポールズ女子校、オットー・フォン・タウベ・ギムナジウム、ジッ・シン校や海外の大学、国際関係機関、国際企業等と連携し、日英独高校生による国際シンポジウム（以下、国際シンポジウム）やワークショップ、フィールドワークを実施することで、日本及び東三河地域を国際的な視点から見つめ、長期的な視野をもって自身が将来できることを考える契機とすることができる。また、英語によるコミュニケーション能力や国際的な舞台で活躍しようとする意欲等を育成することができる。

(2) 研究開発の内容

①カリキュラム開発

3 年間の取組によって「日本の未来を創造的に描くことができる」能力を身につけるため、以下のように学年間の接続を意識しながら、課題発見・解決型の探究活動を展開する。また、その成果は報告書、ホームページ、成果発表会等で発表し、地域への普及を図る。

(ア)『アジア探究』（公民科、令和 3 年度入学生まで）【仮説 1, 2】

- ・第 1 学年の全生徒を対象とする
- ・『現代社会』の内容を再編成する。
- ・「アジアにおける日本」の立場を理解するための基礎知識を習得し、日本及び日本を取り巻くアジア地域を主な対象とした探究活動カテゴリに基づき、グループ研究に取り組む。なお、研究テーマは各グループで設定する。（下線部は令和 3 年度に変更）
- ・大学から外部講師を招へいし、探究活動に関する指導・助言を受ける。
- ・スライドによる日本語プレゼンテーションを通して、探究活動の成果を発表する。
- ・探究活動を進める上で、県内外の大学・企業等と連携し、講義やワークショップを行う。

(イ) 『国際探究』（総合的な探究の時間）【仮説 1, 2, 3】

- ・第 2 学年グローバルコース（文型）の生徒を対象とする。
- ・「世界の中のアジア及び日本を知る」という観点から、1 年次の活動を踏まえて、グループごとに SDG s（持続可能な開発目標）に即したテーマを設定し、探究活動に取り組む。SDG s に示された課題を解決するための取組や支援について、年度当初は個人研究を行い、それをグループ研究に昇華させた上で、最終的に提言として述べる。
- ・大学から外部講師を招へいし、探究活動に関する指導・助言を受ける。
- ・英国・ドイツ姉妹校の生徒とディスカッションを行い（『日英独高校生による国際シンポジウム』）、その成果を研究の深化に生かす。
- ・ポスターによる英語プレゼンテーションを通して、探究活動の成果を発表する。
- ・探究活動を進める上で、県内外の大学・企業等と連携し、講義やワークショップを行う。

(ウ) 『グローバル社会探究』（総合的な探究の時間）【仮説 1, 2, 3】

- ・第 3 学年グローバルコース（文型）の生徒を対象とする。
- ・「グローバル社会における日本の未来を描く」という視点で、1・2 年次の活動内容を踏まえて、生徒個人の進路目標に沿った課題を設定し、解決する探究活動に取り組み、グローバル社会の中で自らが果たすべき役割について考える。
- ・大学から外部講師を招へいし、探究活動に関する指導・助言を受ける。
- ・英語プレゼンテーションを通して、探究活動の成果と行動計画を発表する。
- ・研究の成果を英語論文にまとめる。

②海外学習

(ア) 海外研修

- ・第 1 学年、第 2 学年グローバルコース（文型）の希望生徒を対象とする。またマレーシア研修については、コアスクールの生徒も対象とする。
- ・交流実績のある英国・ドイツを訪れ、探究活動テーマに関する講義やフィールドワーク及びワークショップ、探究活動の成果発表を通して、次年度の探究活動に結びつけるとともに、『日英独高校生による国際シンポジウム』の充実を図る。
- ・マレーシアのパナン島を訪れ、グローバル企業や国際関係機関でのフィールドワーク・ワークショップ、探究活動の成果発表を通して、アジアの中の日本を知り、探究活動テーマの理解を深める。これらの成果を、次年度の探究活動につなげる。

(イ) 国内研修

- ・第 1 学年、第 2 学年グローバルコース（文型）の希望生徒、またコアスクールの生徒を対象とする。
- ・海外研修や「English Assembly II」での発表並びに『日英独高校生による国際シンポジウム』でのディスカッションに向けて、日本の諸課題に関する探究活動に段階的かつ集中的に取り組む、グローバル・リーダーとして必要な「問題発見・解決力」「異文化を理解する態度や能力」「英語での説得力のある発信力」を育成する。

(ウ) 『日英独高校生による国際シンポジウム』

- ・英国及びドイツの姉妹校 3 校の生徒とともに、探究活動テーマに基づくグローバルな共通課題を英語でディスカッションすることで、探究活動テーマへの理解を深める。また、国際舞台で活躍しようとする意欲や能力の育成を図る。

③発展学習

国内外の高校・大学・企業・国際関係機関との連携により、探究活動テーマへの興味や関心を喚起し、理解を深めることを目的に、講義及びワークショップを課外学習として実施する。また、留学生との意見交換を行うことで、グローバル課題に対する理解を深める。

(ア) 国内外の高校・大学・企業・国際関係機関との連携【仮説 2, 3】

- ・第 1 学年の全生徒及び第 2 学年グローバルコース（文型）の生徒を対象とする。
- ・大学や企業と連携し、グローバル課題に対する理解を深め、国際舞台で活躍する人材としての心構えや「論理的思考力」等を育成する。また、国際関係機関との連携を通して、日本がグローバル社会で果たすべき役割・責任を探究する。いずれも実施にあたっては、講義テーマに関連した探究活動を事前に行う。
- ・海外の高校との連携では、「海外学習」における 3 か国の姉妹校との連携のほか、ロシアの高校とグローバル問題について、オンラインで定期的にディスカッションを行う。

- ・国内外の大学との連携では、大学教員によるオンライン講義やワークショップ等を実施する（下線部は令和3年度に変更）。
 - ・国内外の企業との連携では、グローバル企業の関係者による講義やワークショップを実施する（下線部は令和3年度に変更）。
 - ・国内外の国際関係機関との連携では、国際協力の最前線で活躍する講師による講義やワークショップを行う（下線部は令和3年度に変更）。
- (イ) 留学生との連携【仮説1, 2】
- ・探究活動の実施過程におけるディスカッション等を通して、意見交換を継続的に行い、グローバルな課題に対する理解を深める。また、大学に通学する留学生からは、探究活動に対する指導・助言を受ける。
- ④その他の取組
- (ア) 国語科の取組【仮説1, 2】
- ・第1学年の全生徒及び第2学年グローバルコース（文系）の生徒を対象とする。
 - ・SGH指定期の学校設定科目『SG日本文化探究Ⅰ』『SG日本文化探究Ⅱ』での取組を発展的に継承し、評論や小説、韻文（詩・短歌・俳句）、更には古典作品の読解を通して日本の伝統や文化を理解し、それらを的確に発信・受信できるようにする。そのための機会として、ディベートやプレゼンテーションを取り入れる。
- (イ) 本校ボランティア組織「ゆりのき会」の活動の充実
- ・活動に積極的に参加し、グローバル・リーダーに求められる道德心を涵養する。
- (3) 研究開発の実施計画（第2年次）
- SGH指定の5年間の研究成果を基にして、探究活動や海外学習の発展をめざし、地域への成果の普及を図る。また、新学習指導要領下での指導に向けた新たな取組について検討する。
- (4) 研究開発の評価
- 時習館AGH意識調査・学校評価アンケート
- 本校独自の意識調査（「AGH意識調査」）、学校評価アンケート（生徒・保護者及び地域の中学校職員）を実施し、AGH事業の成果を検証する。
- (5) 教育課程上の特例等特記すべき事項
- 『総合的な探究の時間』2単位→学校設定科目『国際探究』 1単位
学校設定科目『グローバル社会探究』 1単位
 - 『現代社会』2単位 →学校設定科目『アジア探究』 2単位（令和3年度まで）
- (6) カリキュラム開発による学校設定科目とその開設理由
- ①「公民科」 学校設定科目『アジア探究』
- ＜開設理由＞ 『現代社会』の内容を再編し、国際分野の学習内容を重点的に学ばせ、「アジアにおける日本」の立場を理解するための基礎知識を習得させるとともに、大学・企業・国際関係機関等の外部機関との連携や多くの探究活動の実施により、生徒の興味関心を高め、グローバル・リーダーとして必要な「論理的・批判的思考力」「問題発見・解決力」等の国際的素養を身につけさせるため。
- ②「総合的な探究の時間」
- (ア) 『国際探究』
- ＜開設理由＞ 探究活動を通して国際問題への興味関心を高めつつ、積極的な大学・企業・国際関係機関等との連携により、「世界の中のアジア及び日本」についての理解を深化・発展させる機会を経験させ、自らも問題発信する能力を身につけさせるため。
- (イ) 『グローバル社会探究』
- ＜開設理由＞ これまでの探究活動及びそれに伴う事業で培ってきた資質や能力を生かしながら、「日本の未来を創造的に描くことができるグローバル・リーダー」たる人物の育成に資するため。

5 研究開発組織

(1) SG専門委員会（AGH専門委員会）

本校のAGH事業の運営について、その全体計画立案、各事業の進捗管理、事業全体の評価等を審議し、全校体制で行う本事業推進の要としての役割及び経理事務処理等を行う。

教頭、SG部員、国語科・地歴公民科・数学科・理科・英語科・保健体育科の各教科代表1名、事

務員からなり、SG部長が委員長を務める。専門委員会は毎週開催され、より円滑な事業運営がなされるよう協議する。

(2) SG部

本校におけるAGH事業の運営に関し、全体計画案、各事業の実施案と評価案を作成して、SG専門委員会に提案する。また、SG専門委員会で決定した内容の実施・運営を中心となっていく。

II 研究開発の経緯

5年間のSGH事業で英国・ドイツ・マレーシアの姉妹校及び国内外の大学・企業・国際関係機関等との連携を軸に、グローバル課題に対する関心を高め、探究活動を実践していく中で、「問題発見・解決力」「論理的・批判的思考力」「英語による説得力のあるプレゼンテーション能力」「日本の伝統や文化を正しく理解した上で海外に的確に発信する力」等を身につけたグローバル・リーダーの育成を図ってきた。その取組を発展的に継承し、先述のような人材の育成に引き続き取り組むとともに、その成果を地域に普及することが、本研究開発の最大の課題である。今回の研究開発は、「研究開発の仮説」（9ページ「I 研究開発の概要」）を設定し、(1)カリキュラム開発、(2)海外学習、(3)発展学習、(4)その他グローバル・リーダー育成に関する取組、の4つの内容で進める。

III 研究開発の実施の効果とその成果

1 カリキュラム開発等による日本の伝統や文化、諸課題に対する理解力、論理的・批判的思考力やプレゼンテーション能力の育成【仮説1】

「日本の伝統や文化、諸課題に対する理解力」「アジアの中の日本の立場の理解力」「論理的・批判的思考力」「問題発見・解決力」「プレゼンテーション能力」の向上をめざして、系統的に研究開発に取り組み、カリキュラム開発や海外学習を実施した。

(1) カリキュラム開発

①公民科『アジア探究』

本年度は「アジアの中の日本」という視点を探究活動により反映させるため、研究対象となる地域をアジアの5地域（日本を含む）とし、同じく課題を「経済・貿易」「民族・宗教」など5つのカテゴリとした。この25通りの組合せから各自の関心に従って選択し、まずそれに関する文献研究を個人で行った。その上で、同様の関心をもつ生徒からなる4人一組のグループを編成し、個人研究の成果を基に、グループ研究のテーマを設定した。テーマ設定に際しては、小さな問いを複数立て、その答えを考えさせることで、単なる調べ学習にとどまらないように留意した。本格的な研究の開始後、2度にわたって外部指導者（大学教員）の指導をいただいた。そこでいただいた指導をテーマの再設定や考察に反映させた後、パワーポイントのスライドを用いたクラス内発表と質疑応答を実施し、本校が生徒に身に付けさせたいと考える8つの国際的要素の育成をめざした。探究活動開始前後の6月と2月の「AGH意識調査」の結果を比較すると「プレゼンテーション能力」や「論理的・批判的思考力」、「問題発見・解決力」の各項目で顕著な高まりがみられた。

②総合的な探究の時間『国際探究』

昨年度までの研究開発の成果を生かし、SDGs（持続可能な開発目標）に着目した探究活動を行った。但し本年度は「自ら課題を発見する」ことに重点を置き、SDGsに示された課題を解決するためにどのような取組や支援が考えられるかを具体的に提言する形をとった。導入として「持続可能」という言葉がもつ意味や意義を考えさせたり、個人研究の成果を持ち寄ってグループ研究のテーマを検討する際に、単に共通項を探るのではなく、課題解決のための仮説を設定させたりするなど、探究活動の基本プロセスを踏まえた活動となるように留意した。最終発表においても、原稿に頼ることなく堂々と発表する姿がみられたほか、聴衆に伝えるため、写真やイラストなどの追加資料、指示棒などの小道具を用いるなどの工夫を凝らす者も多くみられた。探究活動開始前後の6月と2月の「AGH意識調査」の結果を比較すると、グローバル・リーダーに必要な8つの要素のすべてで伸長がみられる。とりわけ本年度重点とした「論理的・批判的思考力」「問題発見・解決力」の伸びが著しく、この他「異文化理解力」や「グローバル課題への関心」の数値も高い。

③総合的な探究の時間『グローバル社会探究』

昨年度効果のあった初期文献調査やアンケート調査等を継続しつつ、中間・最終発表会の実施方法を変更した。中間発表会では、3年生だけでなく1・2年生や他校教員に向けても発表を行うこ

とで、個人で行う研究に責任をもたせ、内容面での充実を図った。また、最終発表会はオンライン発表を導入することにより、英語母語話者を含む多様な講師からの指導を受けることができ、英語で発表することの意義をもたせることもできた。探究活動開始前後の6月と11月の「AGH意識調査」の結果の比較では、「論理的・批判的思考力」や「問題発見・解決力」のほか、「異文化理解力」や「自国の伝統や文化に対する理解力」の伸長がみられた。発表会後のアンケートにも、テーマ設定の段階で多角的な視点から事象を捉えることの必要性や、そのように多角的な視点をもちつつも首尾一貫性に欠けていない研究を行うことの難しさに気づいたという意見がみられた。

④国語科の取組

第1学年『国語総合』では、近現代の詩及び短歌についてのプレゼンテーションを行うことにより、また第2学年『古典B』では、孟子の「性善説」と荀子の「性悪説」を取り上げ、人間の「本性」についての意見交換を行うことにより、論理的思考力や表現力を育むことができた。これらの活動の成果は、各学年の探究科目と同様に「AGH意識調査」における高い数値に表れている。

(2) 成果発表会、探究活動発表会

前者は『グローバル社会探究』の中間発表を伴う形で6月に、後者は『アジア探究』及び『国際探究』の最終発表として2月に実施した。前者では高等学校の教員の参加が実現し、本校の最上級生が探究活動に取り組む姿を見ていただくとともに、これまでの本校の取組に基づき『総合的な探究の時間』に関する意見交換を行うことができた。後者も同様の形を計画していたが、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、外部講師（連携大学の教員）による評価のみを行った。外部講師には2学年の発表を見ていただき、大学進学後を見据えた、今後の探究活動に関する建設的な助言をいただいた。

2 国内の大学や企業等との連携によるグローバル課題の探究【仮説2】

(1) 国内の大学との連携

- ・「AGH発展学習」の企画として、東京大学及び関西学院大学とのオンラインでの連携を実施した。それぞれ「学際的な研究」「自らの探究活動の点検」という、昨年度とは異なる視点からの講義やワークショップを実施し、探究活動及びそのテーマに対する生徒の興味や関心を高めることができた。その成果はアンケートの記述に表れており、探究活動における「目的」設定の重要性の理解や、文系・理系の枠にとらわれない分野融合的な研究への関心の所在がみてとれる。
- ・各学年の探究科目の指導では、従前に引き続き、愛知大学の教員との連携を実施した。「AGH意識調査」の結果から、生徒は「アジアの中の日本」「世界の中のアジア及び日本」「日本の未来を創造的に描く」という視点に基づく、多面的な考え方や見方を学んだことがうかがえる。
- ・「AGH海外学習」では、国内研修の最終回である「English Assembly II」において豊橋技術科学大学と、また海外研修代替事業において関西学院大学と、それぞれ連携した。アンケートの記述から、本校及びコアスクールの参加生徒は、留学生（豊橋技術科学大学）や教員（関西学院大学）に活動の成果を発表することで、それまでには気づかなかった視点から自己の研究を見つめることができたといえる。この学びは今後大きく生かすことができるものだといえる。

(2) 国内の企業との連携

- ・番組制作やワーキンググループの組織等を通して、SDGsの普及と遂行に努めている日本放送協会（NHK）との連携を実施した。取材経験豊富なアナウンサーの企画による大学教授のオンライン講義や、新規に立ち上げられたワーキンググループに主体的に参加する社員によるプレゼンテーションを通して、小さな行動であっても、課題意識を伴うことで大きなムーブメントを生むことを学び、探究活動に対する意欲を高めたことがアンケートの記述から明らかとなった。

3 英国・ドイツ・マレーシアの姉妹校や大学、国際関係機関、国際企業との連携によるグローバル・リーダーの育成【仮説3】

(1) マレーシア・英国・ドイツの姉妹校との連携

- ・一昨年度「SGH海外学習（マレーシア研修）」に参加した生徒を対象に、同国姉妹校の生徒とのオンライン交流を行った。また「AGH海外学習（海外研修代替事業）」として、参加生徒が英国及びドイツ姉妹校の生徒とのオンライン交流を行った。アンケートの記述から、国による事象の捉え方の相違を知り、今後より深く探究しようとする姿勢を読み取ることができる。
- ・「AGH発展学習（姉妹校との連携）」として、英国姉妹校2校の教員によるオンライン講義を実施した。在住者ならではの語り口により、現地文化や教育の特徴、更に日本文化の受容について学び、日本を客観的に見ることへの意欲を高めたこと等がアンケートから明らかとなった。

(2) その他の海外の機関との連携

- ・昨年度来日したスイスからの留学生1名が、7月まで第2学年の授業に参加した。授業や日常でのやり取りを通して、留学や国際的な活躍への意欲を抱いた生徒が多くいたと推察される。

4 学校評価アンケートの評価から

本校では毎年、学校評価アンケートを生徒、保護者、教職員、近隣の中学校教員を対象に実施している。令和3年12月に行ったアンケート（昨年度も同時期に実施）の結果は以下のとおりであった。なお数値はいずれも5段階評価によるものであり、5が最も高い。詳しい数値は62ページを参照。

(1) 生徒

SSHと共通の質問ではあるが、「本校がSSHであり、AGHであることは、生徒にとって有益である」という質問に対する評価は、2年生で昨年度の同一母集団の数値から0.2ポイント減、3年生は変化なしであった。また同様の質問をSSH・AGHの事業について問うたものについては、2年生が昨年度から0.1ポイント減、3年生は変化なしであった。昨年度と比べて数値の低下が小さくなったのは、コロナ禍にありながらも、できるだけ多くの事業を企画・実施したことが一つの要因であると考えられる。なお1年生は、いずれの質問についても2・3年生より高い数値を示している。

(2) 保護者

「本校がAGHであることは、生徒にとって有益である」「本校は、AGH事業について積極的に広報している」の2つの質問とも、昨年度から大きな数値の変化はみられなかった。これも昨年度と比べて数値の低下が小さくなったが、生徒の結果と同様、事業を実施できたことに起因するものと推察され、更にこの場合においては、PTA新聞等で事業の実施報告を行ったことや、生徒から保護者へのいわゆる「ロコミ」により、事業に関する情報や参加した感想等が伝わった可能性がある。

(3) 教職員

SSH・AGHであることの有益性について問うた質問では、昨年度から0.2ポイント減となり、一昨年度とほぼ同水準となった。また教員の能力向上における、探究活動の指導を含む事業の有益性についての質問では、昨年度から0.3ポイントの減少となった。この理由は、次節にて検証する。

(4) 中学校教員

AGHであることの有益性についての質問では、昨年度から0.1ポイント減となり、一昨年度と同水準であった。また、広報についての評価も昨年度より0.3ポイント減と、低く推移した。

IV 今後の課題と研究開発の内容及び成果の普及

時習館AGH第2年次の研究開発は、SGH指定期を含む昨年度までの総括に基づき、改善を加えながら取り組んだため、そのねらいが概ね達成されたと考える。今後も事業の点検を逐次行い、更なる成果をめざして「問題発見・解決力」「論理的思考力・批判的思考力」「異文化理解力」等の国際的素養を身につけた**日本の未来を創造的に描くことのできるグローバル・リーダーの育成**に取り組みたい。

1 カリキュラム開発等による日本の伝統や文化、諸課題に対する理解力、論理的・批判的思考力やプレゼンテーション能力の育成【仮説1】

(1) カリキュラム開発

①公民科『アジア探究』

先述のように研究対象をアジア地域にしたこともあり、どの班もテーマ設定に手間取った。その一因として、先行研究論文に当たることができていなかったことが考えられる。論文を読み、国や地域が抱える課題や既存の改善策を学び、その上で研究に入ることの大切さについては、外部講師からも指摘をいただいた。情報源としてインターネットに頼る生徒が多くいたことも反省点に挙げられる。また成果発表会では、ある国の課題に対して、他国ではどのような報道がなされているかなど、多面的にアプローチすることの重要性を外部講師から指摘していただいた。今後の「探究」と付く科目や『総合的な探究の時間』の活動においてもこれらの反省を生かし、「論理的・批判的思考力」の向上を図り、生徒が成長した実感をもつことができるようにしたい。現1年生においては「コミュニケーション能力」「自国の伝統や文化に対する理解力」の向上も課題である。

②総合的な探究の時間『国際探究』

『アジア探究』での学びを踏まえ、『グローバル社会探究』に接続する研究として、課題の発見から文献調査、考察、発表に至るまでの一連のプロセスを経験させることができた。SDGsに着

目して生徒が自ら課題を発見し、その解決方法の提言をするという一定の目標は達成できたが、提言内容の具体性や実現性について検証するところまで踏み込めなかった点には課題が残る。また、壮大で解決困難なテーマを設定したり、偏った視点のまま研究を進めたりする班もみられたことから、問いの立て方や研究の深化プロセスには改善の余地があるといえる。班によって研究の深まりに差があった点からは、研究の到達目標を段階的に示す必要性もあると感じられる。これらを改善することにより「論理的・批判的思考力」「問題発見・解決力」のいっそうの高まりを期待したい。現2年生においては「異文化理解力」の高さを生かした指導の在り方を考えることも課題である。

③総合的な探究の時間『グローバル社会探究』

従前の反省を生かし、最終発表会でオンライン指導を導入し、研究にかける時間を増やすことができたが、同時展開の指導者数を増やしたことで教室の制約により、他の生徒に発表を聞いてもらえない生徒がいたことは課題である。今後、生徒が個々に持ち込む端末からWeb会議システムに接続することが実現できれば、少なくとも聴講に関しては、空間的な制約を受けることがなくなると思われる。また現状実施している講座別展開を生かし、その分野に精通した講師に発表を聞いてもらい、指導を受けることも可能となる。これにより、「論理的・批判的思考力」「グローバル課題への関心」の向上、ひいてはより多くのグローバル・リーダーの輩出への貢献が期待できよう。

④国語科の取組

1年生は近現代の短歌に関する探究活動を通して、2年生は孟子と荀子の思想を読んだ上で人間の「本性」について考え、発表する活動を通して「論理的・批判的思考力」「プレゼンテーション能力」「自国の伝統や文化に対する理解力」を高めることができた。今後は他教科との連携も視野に入れつつ、相手の心に響く発表をめざす指導方法を模索し、生徒の意欲向上につなげたい。

(2) 成果発表会、探究活動発表会

探究活動発表会は昨年度に引き続き、地域の中学校・高等学校の教員への公開を中止せざるを得なかった。来年度の社会情勢に見通しが立たないのは事実であるため、全国のSSH・WWL指定校が行っているような、リアルタイムでのオンライン配信の方法を早期に確立し、様々な方に本校の取組を知っていただくとともに、本校生徒が培った能力を評価していただく場としたい。本年度実施できた成果発表会についても、他校教員に評価をつけていただくなど、改善を図りたい。

2 国内の大学や企業等との連携によるグローバル課題の探究【仮説2】

(1) 国内の大学との連携

この連携事業を行う「AGH発展学習」は、生徒の探究活動への興味・関心を喚起するとともにそのテーマへの理解を深め、更にグローバル課題に対する探究への意欲の向上を図る目的で実施しているため、生徒の実態に寄り添うことが可能な事業である。来年度は1年生で実践的な文科系探究活動を行う機会がなくなることから、探究活動のプロセスを十分に理解しないままに2年生で探究活動を行うことにならないよう、この機会を慎重に設定する必要がある。構想に挙げていながらも、本年度は行うことができなかった事前の探究活動にも取り組ませ、事前に講師に送付することで全体的な指導をいただくほか、教職員間で共有し、生徒の成長を確認する方法としても活用したい。

(2) 国内の企業・国際関係機関との連携

本年度は先方からの申し出もあり、放送局との連携を行うに至った。SDGsというキーワードが共通していることから、第2学年『国際探究』との連携を図り、同科目を受講する生徒を対象とした講演会を企画・実施した。また授業後の講演会にも多くの生徒が参加し、SDGsに対する企業の取組を知るよい機会となった。放送業界は生徒が高い関心を示す分野であり、概念としての理解にとどまりやすいSDGsについて具体的に学ぶ契機となったといえる。「AGH意識調査」における「グローバル課題への関心」「問題発見・解決力」の高まりは、これに起因する部分もあったと考えられる。今後もカリキュラム開発で生徒の関心の所在を探りながら、有意義な機会の設定に努めたい。

国際関係機関との連携についても、探究テーマとの関連を鑑みながら検討したい。

3 英国・ドイツ・マレーシアの姉妹校や大学、国際関係機関、国際企業との連携によるグローバル・リーダーの育成【仮説3】

(1) マレーシア・英国・ドイツの姉妹校との連携

昨年度は希望者参加型の事業を実施できず、2年生にとっては交流の機会を一度ももつことなく進路を決定する時期に進むことへの危惧から、相手国の状況を鑑みながら何とか「AGH発展学習」での英国姉妹校教員によるオンライン講義を実施することができた。来年度はドイツ及びマレーシアの

姉妹校教員による講演の機会を設け、英国とは異なる文化や思考様式に、また客観的な視点から日本に触れることで「異文化理解力」「自国の伝統や文化に対する理解力」の更なる向上を図りたい。

(2) その他の海外の機関との連携

昨年度、外国語部の生徒とロシアの高校「ギムナージヤ92」の生徒が交流を行ったが、社会情勢を鑑みると、令和4年3月時点では今後の交流は難しいと考えられる。状況を注視して判断したい。

4 地域への成果の普及

(1) 「AGH海外学習」へのコアスクールの生徒の参加

マレーシア研修への参加を最終到達点として、コアスクールである愛知県立御津高等学校の1年生1名が前掲の事業に参加した。これまで探究活動に取り組んだ経験はなかったが、毎回の研修に意欲的に参加し、ALTや本校教員による指導をその都度吸収したことで、最終回の「English Assembly II」では堂々と研究発表を行うことができた。同生徒は海外研修代替事業にも引き続き参加し、大学教員の指導によって研究をブラッシュアップさせ、英語運用能力を高めた。姉妹校生徒とのディスカッションでは研究テーマについての発問をするなど、成長の跡がみられた。生徒がこの事業を通して得たものを自校の学校生活で生かし、その姿に周囲の生徒が感化されることで、成果の普及につながるものと考えられる。また同生徒が本校生徒と学び合うことが、本校生徒をも成長させることは明らかである。今後は参加生徒同士が、テーマに関する意見や進捗状況における相談事を交換する機会を設けるなどして、双方が「異文化理解力」「コミュニケーション能力」を高めることを期待したい。

(2) 成果発表会、探究活動発表会等を通じた中・高等学校への普及

昨年度の本稿に記した成果発表会を、本年度実行することができたのは、AGH事業における大きな変化であったと考える。大学教員を除き、これまで公開したことのなかった『グローバル社会探究』の発表をその中核に位置付けることで、発表者である3年生、オーディエンスである1・2年生、そして高等学校教員の三者それぞれにとってよい学びを得られる機会を設けることができた。来年度より『総合的な探究の時間』が本格的に開始となるが、本校の取組が各校の実践の上でのヒントとなれば幸いである。また本年度は研究テーマのデータベース化に着手できなかったが、『グローバル社会探究』で生徒が作成した成果物を電子データとして集約したことを生かし、まずは本年度の受講生徒116名分のデータベースを整備したい。

(3) AGH通信

広報活動の一環として、AGH諸事業の取組を広報紙「AGH通信」にまとめ、本校ホームページ上で公開するとともに校内にも掲示した。保護者や地域、また事業に参加していない生徒に向けた広報体制を、引き続き充実させたい。参考として、5月号の紙面を右に掲載する。



5 第3年次（指定最終年次）に向けた総括

来年度に向けた課題として検討しなければならないのは、前節（Ⅲ 4 (3)）で取り上げた教職員のアンケート結果である。記述欄が設けられていないアンケートであるため、相対的に評価が低くなった理由は定かではないが、探究活動に携わる教員の声を聞くと、探究活動をはじめとしたAGH事業を通して育てたい人物像や、いわゆる「よい研究」の定義、また各活動・行事に込められた意図や到達地点に関する共通理解ができていないことが少なからず影響しているのではないかと感じた。

振り返ってみると、昨年度AGHに指定された際には全教職員に向けて説明を行い、探究科目の指導においても担当者間で共通のビジョンをもち、毎回の授業に臨んだことを記憶している。生徒が活動に臨むにあたっては、そこに込められた意図を理解することが重要であるのはいうまでもない。それを生徒に伝えるのは担当教員であり、その担当教員が事業全体の目的や個別の活動の意図を理解していなければ、生徒の積極的な取組を期待することはできない。第3年次の研究開発においては、本事業の主管分掌として、まず分掌構成員内での事業内容とその趣旨の理解を徹底し、その上で指導内容に込めた意図を、担当教員間での擦り合わせを通して共通理解へと高め、実行に移したい。

V 研究開発の実施内容

1 カリキュラム開発（学校設定科目の開設） 【地歴公民科】『アジア探究』（1年）

1 学習指導要領上の科目との関連

『現代社会』（2単位）を代替する。

2 令和3年度進行予定

(1) 1年間の授業計画案

2学期中間考査までは、通常授業で主に『現代社会』の「経済分野・国際分野」についての講義と考査を実施し、基本知識の習得を行う。それ以後は探究活動に取り組み、主張・伝達するスキルの向上をめざす。

※PPT：パワーポイントによるスライド（以下、同じ）

	月	授 業	探究活動
		単元・学習内容	学習内容
1 学 期	4	国際政治の動向 現代の経済活動と政府の役割 経済活動の在り方と国民福祉	
	5		
	6		
	7		
夏休み			夏季休業中課題 アジアの諸課題 調べ学習
2 学 期	8	労働問題と雇用 現代の経済社会と政府の役割 国民主権と民主政治の発展	班編成（カテゴリ設定） 研究グループワーク
	9		グループ研究 テーマ設定及び調査 大学教員による指導・助言
	10		
	11		PPT作成
	12		
冬休み			PPT作成
3 学 期	1	地球環境を考える 日本国憲法と国民生活 国際経済の動向	クラス大会
	2		研究発表会（新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、1クラス抽出による発表）
	3		

(2) 達成目標

1年生『アジア探究』では、2年生の『国際探究』、3年生『グローバル社会探究』への接続の観点を考慮に入れ、次の点を確認する。

- ① 1年生では、日本及び日本を取り巻くアジアの現状と諸課題について理解を深めることを目標とする。
- ② 異文化を理解するために、日本人としてのアイデンティティを築く（己を知る、理解する）。
- ③ 疑問点や問題点を自分で見つけ出し、客観的なデータに基づいて自分の考えを主張する。
そのため、単なる調べ学習ではなく、既存の事柄に対して疑問に思ふ点を検証する。
- ④ 研究テーマは、生徒が興味関心のある地域を選択し、独自にテーマを設定し、研究を通して発展及び深化ができるものとする。
- ⑤ 探究活動の深化のために研究データを収集する。愛知大学図書館の蔵書・論文検索（CiNiiなど）、グループ体験活動や共同作業、外部講師の講義などを通して刺激を受けることでモチベーションを向上させ、様々な情報収集に努めることを重視する。

(3) 探究活動実施要項

- ①【班員構成】1クラス40人、1班は4人編成とする。
- ②【協力機関】愛知大学の教員の協力のもと、継続的に御指導いただく。探究活動において、生徒のテーマ理解や情報伝達能力の形成を図る。
- ③【授業方法】10月以降の『アジア探究』の授業で、図書室や情報室を利用して情報収集を行う。
また、SSH学校設定科目『探究基礎（情報分野）』では、探究活動発表用のPPT・探究要項作成に取り組む。
- ④【研究方針】調べ学習に終始するのではなく、客観的なデータをもとにしつつ、自分自身の考

察やアイデアなどで新たな知見を創造・探究し、アジアが抱える課題に対する考察を行う。その際、他者との意見交換の中で新たな見方や考え方に気づき、研究を深化できることを理解する。インターネット検索による情報の利用だけでなく、文献資料にあたらせる。インターネット検索を利用する場合には、メリットだけでなくデメリットを調べるなど、幅広い情報にあたる必要性を認識させる。また「AGH発展学習（国内大学・企業との連携）」を通して、探究活動テーマへの理解を深める。

- ⑤【発表と評価】発表はクラス単位で実施し、発表者以外の生徒と担当教員によるルーブリック評価で順位を決定する。

2 探究活動カテゴリ、探究活動テーマの設定について

(1) 探究活動カテゴリ

地域	課題
1 東アジア	A 難民・外国人労働者・貧困・豊かさ
2 南アジア	B 経済・貿易
3 西アジア	C 民族・宗教
4 東南アジア	D 環境問題
5 日本	E その国特有の課題

(2) 夏季休業中の探究活動への取組

本年度は、地域・諸課題をそれぞれ上記の5つに振り分け、その中から自分の興味のある地域と課題を選択し、個人で研究することを夏季休業中の課題として実施した。

【課題内容】

自分の選んだ地域と課題に関する文献資料を最低1冊読む。紙媒体の新聞やWeb上の記事も可とし、記事内容の要約及び記事に対する考えをまとめさせた。また出典を明記させ、情報収集の基本的なスキル育成をめざした。

(3) 探究活動テーマの設定

生徒が希望するカテゴリに沿って班編成を行い、夏季休業中課題についてグループで共有した。付箋紙と模造紙を用いてグループごとにキーワードマッピングを行い、グループ内の知識や課題意識を共有し、班全員で考察することで、仮テーマ設定の一助とした。

(4) テーマ設定の構造

探究活動においてはテーマ設定が重要となるので、次の段階に留意してテーマ設定を行った。

・【動機の段階】 『私たちは～について調べる』

抽象的で具体性に欠ける。自己の興味関心に基づき、取り組みたい領域が記述されている。

・【課題をつかむこと自体が課題】 『～の～について調べる』

内容が絞り込まれ、具体的に記述されている。世間に広く知られている結論。

・【情報を集めること自体が課題】 『なぜ～』、『～は、どのようにして～』

テーマに対する問いは以下のものを提示した。

ぶつける問い（ツッコミ）	取り出される問いの例
① 本当に？〈信憑性〉	・学力低下と呼ばれる現状は本当に生じているのか
② どういう意味？〈定義〉	・そもそも「学力」とは何か ・「学力」はどう定義されているか
③ いつから？／いつまで？〈時間〉	・いつから学力が低下し始めたか ・かつては、学力低下現象はなかったのか
④ どこで？〈空間〉	・他の国では学力低下現象は見られないのか
⑤ だれ？〈主体〉	・だれが学力低下を主張しているのか ・だれ(どの層の学生)の学力が低下している(といわれている)のか
⑥ いかにして？〈経緯〉	・どのような過程で学力が低下していったのか (急になのか、徐々になのか)
⑦ どんな？〈様態〉	・学力低下の現状はどうなっているのか
⑧ どうやって？〈方法〉	・どうやって学力低下の存在を確かめたのか
⑨ なぜ？〈因果〉	・学力低下の原因は何か

⑩ 他ではどうか？〈比較〉	・教科によって学力低下に違いはあるのか ・地域によって学力低下に違いはあるのか
⑪ これについては？〈特殊性〉	・〇〇のようなケースは学力低下現象なのか
⑫ これだけか？〈一般化〉	・学力以外の能力も低下しているのではないか ・学力低下は、他のより広い能力の低下の表れではないか
⑬ すべてそうなのか？〈限定〉	・すべての科目で学力の低下があるのか
⑭ どうすべきか？〈当為〉	・学力低下にどう対応すべきか

京都府立鳥羽高等学校（2020）「SGH 第5年次『イノベーション探究』実践報告書」より一部改変の上引用

（原典：戸田山和久（2012）『新版 論文の教室 レポートから卒論まで』NHKブックス）

探究活動テーマの設定にあたっては、単なる調べ学習にとどまらないよう、先行研究調査を徹底し、班独自の視点を踏まえて考察がなされるよう、上記のような問いを立てることでテーマ設定の深化を図った。

3 探究活動テーマの考察

(1) 序論・本論・結論による論理構成

探究活動の構成は、序論・本論・結論による論理形成を基本とした。

序論：テーマ設定に至る経緯、課題の概略を示す。

本論：課題に関する具体的な事例、取組を示す。

結論：前段の3段階をまとめ、班の考察・展望を示す。

書籍、インターネット調査、アンケート調査を通じ、客観的なデータと豊富な幅広い情報を収集するよう努めさせた。

〔アンケート調査への協力をいただいた外部機関〕

学校法人利幸学園 中部コンピュータパティシエ専門学校

(2) 外部指導者（愛知大学教員）との意見交換

外部指導者には、10・11月の2度にわたりご来校いただいた。講師2名で1クラス10班を担当し、各班につき7分程度で交代しながら、以下の観点から生徒の探究活動を指導していただいた。

① 合理性：定義が明確か。論旨が一貫しているか。

② 研究手法：先行研究の調査は十分か。

③ スキル：聞き手の興味や理解を高めるような発言ができていないか。明確に、自信をもって発言ができていないか。

(3) 外部指導者（愛知大学教員）による指導後のテーマ修正

テーマ設定が不十分であったり、主張の根拠が不十分であった班は、指導を踏まえ主張の修正や再検討を行った。出発点となる課題の見直しを迫られ、テーマ設定自体を変更した班もあった。また、漠然と用いていたキーワード（「経済成長・格差」、「貧困」など）について、定義を明確にする必要性に気づいた班が多くあった。生徒たちは「～について」を調べ、様々な事例を集めることはできるが、研究を深化させていくための「問い」を立てることに苦労していた。



愛知大学教員による指導

4 クラス発表会

(1) クラス発表会の実施

12月にPPT及び探究要項の作成を行い、1月からはクラス内発表会を行った。原稿を覚えて聴衆とアイコンタクトを取りながら発表する、指示棒を作成する、研究対象地域のオリジナル問題集を作成し、聴衆の興味と関心を惹きつけるなど、工夫の凝らされたプレゼンテーションが行われた。

評価はループリック評価表を用いて相互に行うことで、生徒たちの目標が明確になり、発表スキルを大いに向上させることができた。また、他の班の発表を見ることによって、モチベーションが向上したようであった。

質疑応答も活発に行われ、使用したデータや統計資料について、論理構成の不十分な部分、また結論の早計さを指摘するような指摘も飛び交った。

(2) 発表会規則

1 競技方法

- ①各班が1回ずつ発表し、審判がルーブリックに則り採点する（4段階、24点満点）。審判は、発表する班・進行班を除く生徒全員と担当教員が行う。
- ②審判全員の平均得点の高低によって順位付けする。
- ③1回の授業で2つの班が発表する。
- ④競技運営は進行班が行う。

2 ルール

- ①1班につき発表時間は15分間、16分経過で強制終了とする。
10分・12分・14分経過ごとに司会の合図がありベルが鳴る。
- ②質疑応答は5分程度とする。

3 進行班の役割

- ①司会 1名：発表及び質疑応答の司会進行を行う。
- ②計時 1名：時間を計る、司会の言葉に合わせてベルを鳴らす。
- ③記録 2名：記録用紙に発表内容・質疑応答内容を記録する。



成果発表会の様子

【探究活動ルーブリック（研究発表評価）】

	4 期待以上の+αがある	3 十分満足できる	2 おおむね満足できる	1 期待する状態にない
(1) テーマ設定	研究地域・対象を <u>深く</u> 理解した上で、 <u>明確で独創的な</u> テーマ設定ができています。	研究地域・対象を理解した上で、適切なテーマ設定ができています。	研究地域・対象をおおむね理解した上で、テーマ設定をしている。	研究地域・対象に対する <u>理解が不十分</u> なまま、テーマを設定している。
(2) 情報収集	正確で <u>最新の</u> 資料・データを <u>豊富に</u> 収集している。	正確な資料・データを適切に収集している。	資料・データの収集が最低限できています。	資料・データの収集が <u>不十分</u> である。
(3) 論理構成	研究の構成が論理的であり、 <u>客観的資料によりその根拠が明確になっている</u> 。	研究の構成が論理的である。	研究の構成がおおむね論理的であるが、一部に論理の飛躍や、主観的な表現がみられる。	研究の構成に <u>論理の飛躍や、過度に主観的な表現</u> がみられる。
(4) スライド	文字や図が見やすく、 <u>見る者の関心を引く工夫</u> がなされ、発表の内容を効果的に引き立たせている。	文字や図が見やすく、適切に選択され、発表の内容を理解する十分な手助けになっている。	文字や図がやや見づらく、発表の内容を理解する十分な手助けにならない。	文字（大きさ・色・字体など）や図（表・グラフなど）が見づらく、発表の <u>内容の理解を妨げる</u> 。
(5) 発表態度	ほとんど原稿に頼らず話す。 視線・声量・話す速度が適切で <u>自信に満ちた印象</u> を与える。	原稿に頼らず話す時間が多い。 視線・声量・話す速度は適切である。	原稿を読んで話す時間が多い。 視線・声量・話す速度は一部に改善する必要がある。	<u>終始</u> 原稿を読んで話す。 視線・声量・話す速度は <u>改善する必要がある</u> 。
(6) 質疑応答	質問の意図をくみとり、事前に想定質問を用意した上で <u>簡潔・的確な</u> 応答ができています。	質問の意図をくみとり、質問に対して適切な応答ができています。	質問の意図をくみとり、質問に対しておおむね応答できている。	質問に対する応答ができていない。

5 成果発表会

令和4年2月4日（金）の探究活動成果発表会にて、1年5組の2つの班が発表した。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため学年大会は行わず、1クラス抽出による発表会となった。

【各班の研究カテゴリとテーマ一覧】 ※カ：カテゴリ

組	カ	班	研究テーマ
1	1B	1	中国から蒋介石を追い出してみた！！
	1C	2	中国の闇～少数派の人権～
	4B	3	A S E A Nの輸出志向型工業化の影響
	2B	4	I Tから探るインドの強み
	2A	5	南アジアの経済成長と隠れた貧困
	3B	6	U A Eという国
	3A	7	西アジア 紛争と難民
	5D	8	自業自得の水質汚濁
	5B	9	企業と労働者の問題
	5A	10	日本の貧困の現状と対策
2	1D	1	P M 2.5 は本当に危ないのか
	2B	2	なぜインドは経済成長を遂げたのか
	3C	3	イスラム国は本当に悪者か？
	3C	4	I S みたいなテロ組織が今後発生しないためには
	4E	5	シンガポールの今
	5A	6	外国人労働者問題とは何か
	4A	7	ベトナムの教育格差
	5D	8	脱炭素社会に向かう日本の発電対策
	1B	9	K p o p での韓国の経済成長から日本が学ぶこと
	4A	10	S A V E ～ロヒンギャ問題の先に～
3	1A	1	中国の経済格差
	1C	2	新疆ウイグル自治区は弾圧を受けているのか
	1E	3	韓国における反日の実態と原因はどのようなものか
	2A	4	人口爆発の原因は何か
	3C	5	イスラム過激派組織 成立の背景
	4C	6	東南アジアの現代の民間信仰の成り立ちとは？
	5E	7	お金持ちならば幸せ？？
	4A	8	A S E A Nは成功したのか
	5A	9	なぜ日本に大企業が多いのか
	5E	10	日本はなぜ原子力発電を続けるのか
4	1E	1	最近の中国はなぜ異様な規制があるのか？
	1E	2	韓国の学歴社会について
	2A	3	インドの貧困と教育について
	3C	4	パレスチナ問題はなぜ起こったのか
	4B	5	マレーシアの光と闇
	4A	6	バナナのシュガースポット
	5D	7	東三河の発電と環境の関係について
	5B	8	なぜ日本人の年収は上がらないのか
	5A	9	技能実習生を守ろう！
	5A	10	難民に対する日本の未来志向的関わり方とは？
5	1C	1	ウイグルの人権問題について
	1D	2	中国の大気汚染の危険性をうけ、中国はどうすべきなのか
	1E	3	一帯一路に日本はどう対応すべきか
	2A	4	女性の地位向上と社会進出をめざして
	3A	5	なぜシリア難民は解決しないのか
	4B	6	なぜインドネシアは経済発展するにつれて格差が広がったのか
	4B	7	ベトナムの経済成長の要因と今後の展望について
	5A	8	なぜ外国人労働者は日本に来るのか

	5D	9	昨今のプラスチック問題について
	5E	10	なぜ日韓は対立するのか
6	1E	1	台湾をめぐるあれこれ
	1C	2	ビジネスと人権～ウイグル問題を通して～
	5E	3	竹島問題
	2B	4	なぜインドの格差問題は生じるのか
	3C	5	シリア内戦
	4A	6	大丈夫か？ミャンマー
	4B	7	A S E A Nの経済統合と地域協力の精察
	5A	8	外国人労働者について
	5D	9	日本社会における経済と環境の関係について
	5A	10	日本の貧困の問題点について
7	1A	1	中国の経済格差
	1A	2	中国の少数民族と経済格差の関係
	2A	3	インドのカースト制度～それによって生じた問題とは～
	3A	4	西アジアの経済格差
	3C	5	アフガニスタンが国家として発展していくために
	3A	6	カンボジアと近隣国の比較から貧困格差を知る
	4A	7	ロヒンギャ難民について
	4D	8	インドネシアの森林破壊について
	5A	9	日本の技能実習制度の問題点は何か？
	5A	10	近年の日本の政策は、雇用状況にどのような影響を及ぼしたのか
8	1E	1	中国関連国の人権～中国政府による自由権の侵害～
	2B	2	表面上のインドの経済発展と好転しない現状
	3C	3	パレスチナ問題はなぜ発生したのか
	4C	4	ロヒンギャ難民の生活と今後の取り組み
	5B	5	消費税の課題
	1B	6	韓国の就職難の原因と現状
	4B	7	タイの経済に隠れた問題！？
	4A	8	東南アジアの教育
	5A	9	技能実習制度は国際貢献なのだろうか？
	4D	10	森林破壊と焼畑

太字のテーマは、成果発表会での発表班を示す。

意見交換及び成果発表会に協力をいただいた愛知大学の教員は、以下のとおりである。

塩山 正純 氏（国際コミュニケーション学部 教授）
 岩崎 正弥 氏（地域政策学部 教授）
 檜村 愛子 氏（文学部 教授）
 加治 宏基 氏（現代中国学部 准教授）
 植田 剛史 氏（文学部 准教授）
 石田 周 氏（地域政策学部 助教）

6 成果及び今後の課題

生徒はアジア諸地域の興味関心のある地域の個人研究から出発し、班で協力しながらテーマ設定を行い、書籍、インターネット、論文検索、アンケートなどを通して情報収集を行うことで研究を深化させ、協力して探究活動を実施することができた。

カテゴリの地域を「アジア」にすることで、『アジア探究』という学校設定科目の下、「アジアの中の日本」という視点を踏まえながら探究活動を行うこととしたが、どの班もテーマ設定に手間取った。外部講師の先生方からは、先行研究論文にあたることの大切さについての御指摘をいただいた。先行研究を調査し、現在抱えている課題や既に行われている改善策を学ぶことで、生徒の研究レベルを向上させることが求められるだろう。また、研究が行き詰まった場合には、テーマ設定

を再度検討し、研究の方向性を柔軟に変更することの大切さを指摘していただいた。テーマ設定が研究の最重要点であることを考えると、①課題意識をもち、②現状の対策を理解し、③独自の新たな考察を立てるというステップを確実に踏めるよう指導したい。

最初は個人で興味関心のある地域を選択し、諸地域の課題について調べ学習を行った。文献資料を1冊以上参照するよう指導し、インターネットだけに頼らないよう留意した。同じ地域を選択したメンバーで班を構成し、テーマを設定していったが、それぞれの内容を擦り合わせることに苦心した班が多かった。愛知大学図書館や自治体の図書館を利用し、文献資料を集めた班もあったが、結果的にインターネットの活用が多くなった。研究に必要なデータを得るためのアンケート項目の精査の必要性や改善の余地もみられた。

成果発表会での外部講師による質疑応答では、対象地域の諸課題に対して、一面的なアプローチではなく、他国ではその課題がどのような報道のされ方がされているかなど、課題に対して多面的にアプローチすると、別の視点が見えてくるという御指摘をいただいた。

発表会後の生徒へのアンケート調査では、「探究活動を通して、一番身に付いたと感じる力はどれですか」という質問に対し、異文化理解力、グローバル課題への関心、プレゼンテーション能力の3つが多かった。また、様々な地域の研究発表を聴講できたことで、「アジア諸地域への関心は高まりましたか」という質問には、85%の生徒が「はい」と答えた。

『アジア探究』としての研究開発は本年度で最後となるが、今後の学習指導要領では「探究」と付く科目が多く設定される。それら「探究」科目や『総合的な探究の時間』の活動においては、本年度の開発の反省を生かし、クラス発表の前に発表の予行練習や中間発表会の機会を設けることで、他の班との意見交換の機会を設け、プレゼンテーション能力や論理的・批判的思考力を向上させるとともに、生徒が成長した実感を自らもつことができるような指導に尽力したい。

【総合的な探究の時間】『国際探究』（2年）

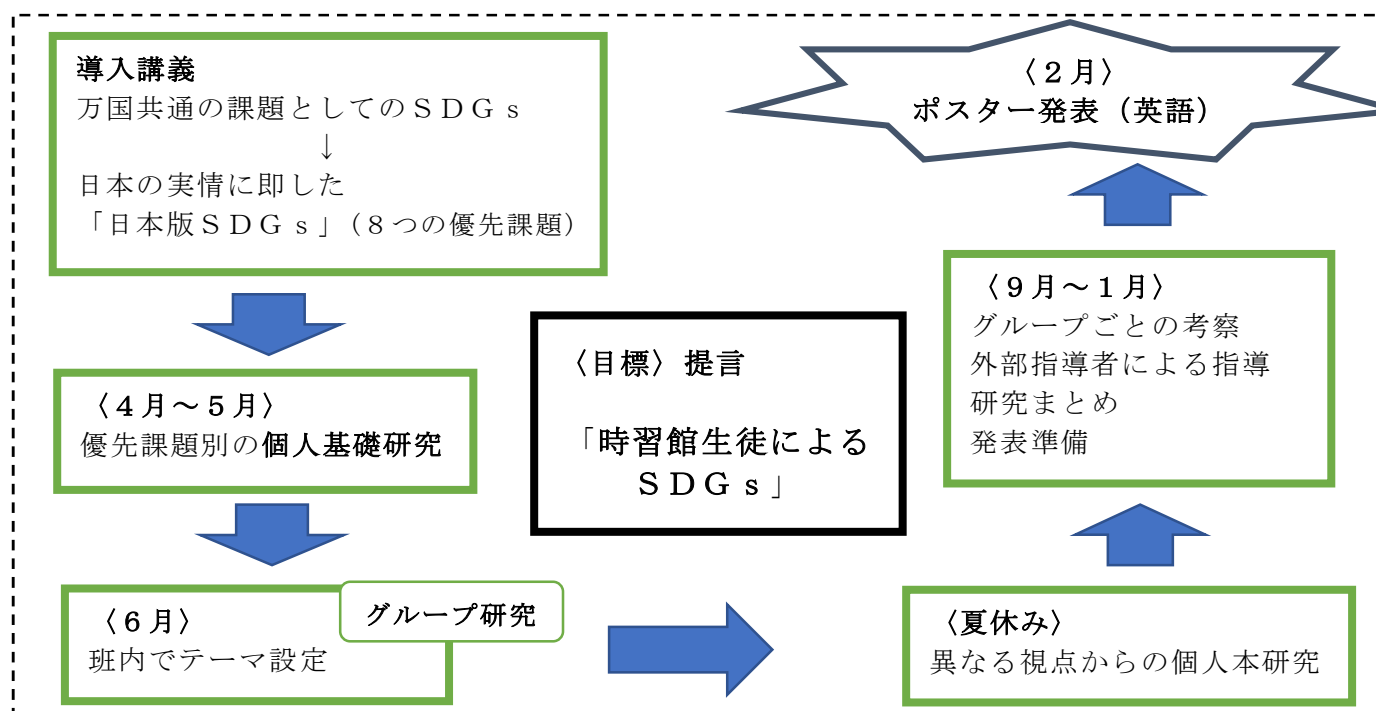
1 目的

1年次の『アジア探究』での学習の成果を踏まえ、「世界の中の日本を知る」という観点から、日本及び世界の諸課題に関する探究活動に取り組み、社会を客観的に見つめる力を養う。

2 学習指導要領上の科目との関連

2年次の『総合的な学習の時間』（1単位）を代替する。

3 カリキュラム開発の概要



本科目では一昨年度より、国際連合により提唱された「持続可能な開発目標（以下、SDGs）」に着目したグループでの探究活動を行ってきた。今年度は特に、「自ら課題を発見する」ことに重点を置き、「課題を解決するためにはどのような取組や支援が考えられるか」を具体的に提言することをめざし、研究を行った。

(1) 導入講義（2時間）

「時習館生徒によるSDGs」を提言するための導入として、SDGsが解決をめざす課題について知るための講義を行った。

生徒たちは、1年次の「探究基礎」においてSDGsを題材に個人研究に取り組んだため、その言葉自体はほとんどの生徒が認知していた。そこで、「SDGs＝持続可能な開発目標」の設定経緯や、前身である「ミレニアム目標」とは異なり「全ての国の目標」とされている点など、SDGsの基礎知識について講義した。

また、生徒たちが研究テーマを設定するヒントとなるような、世界の貧困、環境問題、教育格差などの現状を学んだのち、「持続可能」という言葉がもつ意味と意義について考えた。

(2) 第一段階 個人基礎研究（6時間）

- ・研究カテゴリを後述の「日本版SDGsにおける8つの優先課題」から選択
- ・同じカテゴリを選択した生徒同士で7～8名のグループを編成
- ・日本の課題について個人基礎研究を行い、レポート作成（4月26日～5月31日）
- ・個人基礎研究レポートをグループ内で共有、グループ研究のテーマを決定
(6月7日 2時間連続の1時間目)

一年次の『アジア探究』で身に付けた考察力を生かし、世界に目を向ける前段階として、まず日本国内の諸課題について文献調査と考察からなる個人基礎研究に取り組ませた。生徒には、日本版SDGsが扱う「8つの優先課題」のうち以下の7つから特に興味のあるものをカテゴリとして選択させた。なお、「8つの優先課題」は世界全体でのSDGs達成のため、日本として特に注力すべきものとして挙げられたものである。また、これらは互いに密接に関わり、どの一つが欠けてもビジョンは達成されないという認識で取り組むことが求められている。

【日本版SDGsにおける8つの優先課題】

- 1 あらゆる人々の活躍の推進
- 2 健康・長寿の達成
- 3 成長市場の創出、地域活性化、科学技術イノベーション
- 4 持続可能で強靱な国土と質の高いインフラの整備
- 5 省・再生可能エネルギー、気候変動対策、循環型社会
- 6 生物多様性、森林、海洋等の環境の保全
- 7 平和と安全・安心社会の実現

(8 SDGs実施推進の体制と手段) … 国の実施体制に関するものであり、除外

個人基礎研究レポート執筆後は、同じ優先課題を選択した7～8名からなる班を作り、研究の成果を一人ずつ発表した。発表に際しては、以下の点に触れるよう留意させた。

【個人研究発表で発表すべき内容】発表時間の目安は発表3分＋質疑3分

- ①研究テーマ、及びそのテーマを着想するに至った経緯
- ②研究方法と、研究を通してわかったこと
- ③今後の更なる研究の可能性（文献調査の範囲を超える部分についても言及してよい）
- ④補足説明（難しい用語などを言い換える）

共通するカテゴリの異なるテーマについて研究した生徒の発表を聴き、意見交換を行うことで、課題に対する見識を深め、視野を広げることができた。

(3) 第二段階 グループ研究（個人本研究3時間＋夏季休業、グループ研究16時間）

①個人本研究

- ・個人基礎研究レポートをもとにグループの研究テーマを決定
(6月7日 2時間連続の2時間目)
- ・グループでの研究課題を複数の視点から更に深く個人研究(6月14～21日)
- ・夏季休業中に個人本研究レポートを作成

個人基礎研究レポートを基に、グループでの研究テーマを設定した。テーマ決定に際しては、KJ法を用いて意見をまとめた。KJ法とは、テーマに関するキーワードをできるだけ多く書き出し、それらをグループ分けしたり、キーワード同士の関係性を考えながら考えを整理する方法である。この方法を用いることで、個人基礎研究で得た成果をもとに、グループ全員で協力しながら研究すべき課題を探ることができた。



グループ活動の様子

設定したテーマから「時習館生徒によるSDGs」に関する提言を行うために、日本版SDGsにおける「実施のための主要原則」に則り、以下の4点を踏まえた研究を行うことを求めた。

【「時習館生徒によるSDGs」を作成するために：グループ研究の4原則】

- ①普遍性： 日本国内と日本国外の両面を考えよう。
- ②包摂性： 「誰一人取り残さない」。脆弱な立場にある人にも焦点をあてよう。
- ③参画型： 既にある学説への言及に留まらず、自らを含むあらゆる人々が当事者として、主体的に参加する機会を考慮しよう。
⇒ 導入講義のスライドで示した「アクション」がこれに該当する。
- ④統合性： 社会課題は単一の視点に固執しては解決できない。あらゆる分野や立場から課題を見つめ、相互の関係性・相乗効果を鑑みよう。そのためには、課題にかかわる過去や現在の状況、更には、将来の社会変動の見通しを考慮し、課題を取り巻く環境がどう変わるかを考える力も必要となる。

この原則に加え、提言の「具体性」も重視し、班で設定したテーマについて学問分野(例：経済学的な手法、教育学的な手法)、国及び地域・立場(例：国、機関、企業、自治体、個人)等、班で少なくとも6～7の「見地」を設け、班内での割り振りを決めさせた。こうすることで、各生徒が夏季休業中に責任をもって研究を行うことを可能とした。また、全生徒をグループ研究に参画させることで当事者意識を涵養したほか、研究を多角的に行う素地を整えることができた。

②グループ研究

- ・個人本研究レポートをグループ内で共有(9月6日)
- ・グループ研究方針の見直し(9月27日～10月18日)
- ・愛知大学教員に対する中間発表(10月18日)
- ・グループ研究(10月25日～1月31日) 報告書、ポスター作成を含む

夏季休業中に作成した個人本研究レポートを9月にグループ内で共有し、疑問点や更に調査すべき点を指摘し合った。①グループで解決すべき課題を明らかにし、②その課題の解決に役立つと考えられる仮説を立て、③仮説を検証する、という探究のプロセスを確認し、更に深めるべき点を考えさせた。

ここで7～8名の班を更に二つに分け、発表班全32班を編成した。少人数編成にすることで、個々の生徒のグループに対する責任が大きくなり、全員が活動に関わりながら研究を進めさせることができた。

10月中旬まで研究を進めた上で、その成果をまとめ、愛知大学の先生方に対し発表した。研究の方向性、深まり、参考にすべき文献についてグループごとに助言をいただき、研究課題をより具体化させることができた。

11月以降は追加調査を行い、研究テーマを確定させた。確定した研究テーマは次の通り。

班	研究テーマ（ポスタータイトル）
1	Welcome to our “Home School”
2	Awareness Change
3	Poverty reduction get rid of Education inequality
4	What’s Happening to Japanese Teachers
5	Let’s study support ~To poor children~
6	Support For ... LGBTQ and Women issue
7	App for reserving food loss
8	Make a plan Change the situation
9	Educational Gap and Poverty
10	High tax High education
11	Possibility of Food Bank
12	Possibility of Food Bank
13	Water Pollution
14	The Secret for Realizing Eco-Friendly Cities ~Learn from Minamata Disease~
15	How to Cut the Cost of Road Maintenance
16	Make Our Community!
17	Let’s Make the Wave of Renewable Energy for Smaller Companies
18	Sustainable Future Of Food And Us
19	Stop Global Warming Using Solar Panels
20	We can reduce CO ₂ !
21	The Impact of Plastic on coral
22	Coral Protection
23	Danger approaching the Sea
24	Danger approaching the Forest
25	EDUCATION OF the ENVIRONMENT -Let’s pick up garbage in the beach!!-
26	Material to Replace Plastic
27	LET’S OPEN A WORKSHOP!
28	Company as well as User ~ To eliminate SNS Slandering ~
29	GENDER EQUALITY
30	Child Abuse
31	Use video advertisement to reduce DOWA discrimination
32	Gender equality and stereotype in schools

(4) 発表準備（7 時間）

- ・ 研究報告書、英語ポスター、英語発表原稿作成（11 月 15 日～12 月 20 日）
- ・ ポスター修正、発表練習（1 月 17 日～31 日）

①研究報告書、英語ポスター、英語発表原稿作成

グループでの研究成果を研究報告書に日本語でまとめ、それをもとに英語でのポスター作成を行った。本年度は、学校配備のタブレット P C にインストールされた PowerPoint を活用してのポスター作成に取り組んだ。データの提出及び共有には Microsoft Teams を使用した。

②ポスター修正

本校英語科教員の協力のもと、生徒が作成したポスターの英語表現の確認を行い、フィードバックした上でポスターの修正を行った。また 1 月以降の授業では、修正と並行して英語での発表練習を行った。グループ同士で発表を聴き、互いにコメントすることで発表内容や英語表現を改善させることができた。英語で論理的に、かつ聞き手の反応を見ながらわかりやすく説明することに当初は苦戦していた生徒たちも、練習を重ねる中でスキルを向上させていった。

(5) 成果発表会（1 時間 2 月 4 日）

新型コロナウイルス感染症対策として 32 班を 3 部屋に分け、更に班番号の偶奇で発表と聴衆の

役割を分けることで、密を避けて発表を行った。各グループの持ち時間を発表6分、質疑応答3分とし、英語での発表を2回ずつ行った。外部からの参観は中止となったが、愛知大学の先生方をお招きし、発表内容に対する御助言をいただいた。

生徒たちは他の班の発表を聴きながら互いに評価し合い、後日、発表班にコメントをフィードバックした。各班とも、写真やイラストなどの追加資料や、指示棒などの小道具を用いて聴衆に伝えるために工夫を凝らした発表を行った。

発表練習を始めた当初は原稿を見てばかりであった生徒たちも、当日は堂々と英語で発表を行うことができ、プレゼンテーション能力の向上を実感した。

当日の評価に用いたループリック評価表は次ページを参照。



ポスター発表の様子

中間発表会及び成果発表会に協力をいただいた愛知大学の教員は、以下のとおりである。

塩山 正純 氏（国際コミュニケーション学部 教授）
 檜村 愛子 氏（文学部 教授）
 加治 宏基 氏（現代中国学部 准教授）
 岩崎 正弥 氏（地域政策学部 教授）
 石田 周 氏（地域政策学部 助教）

4 カリキュラム開発の成果

課題が比較的明確な単一の事象を深く掘り下げ、解決策を提言した昨年度『アジア探究』とは形を変え、『国際探究』では、複数の事象を横断的に考察する中で自ら課題を見出し、解決のために自分たちがどう行動すべきかを提言する形とした。日本だけでなく世界に視野を広げたことで、初めは「教育」などの漠然としたテーマを設定する班がほとんどであったが、個人研究を班に持ち寄ることで視野を広げ、更に大学教員の視点を加えることで、徐々に提言に具体性が伴うようになった。また、研究をポスターにまとめ、発表を行ったことで、「SDGs」という言葉の一人歩きではなく、当事者意識をもって国際的な課題を見つめられるようになった。

(1)意識調査結果〈抜粋〉（全ての設問は本書 61～62 ページを参照）

数字は8段階評価で、大きい方が高いことを示す。数値は全生徒の平均値。	6月	2月
A 論理的・批判的思考力	5.1	5.5
②一つではなく複数の情報源を元にいろいろな視点・立場から考えるようにしている。	5.4	5.8
④相手の話を聞きながら自分の考えや質問をまとめることができる。	5.2	5.6
⑤ものごとの背景や理由、影響等について多面的に考える。	5.3	5.7
B 問題発見・解決力	5.3	5.6
⑥疑問をもち、いろいろな場面から課題を見つけることができる。	5.1	5.6
⑧課題に取り組む時は、「何が問題であるか」を明確に把握する。	5.4	5.8
C 異文化理解力	6.0	6.3
⑬自分とは異なる国（グループ）の人々に関わることは価値があると思う。	6.5	6.7
D プレゼンテーション能力（表現力）	5.0	5.5
⑭わかりやすく説明したり、効果的に表現したりすることを意識して、コンピュータやプレゼンテーションソフトを活用できる。	4.9	5.5
⑮自分の意見や立場を相手にわかってもらえるように表現したり発表したりすることができる。	5.1	5.6
G グローバル課題への関心	5.9	6.2
⑯世界や社会に対して自分が貢献できることを考え、行っていきたいと思う。	6.0	6.4

全ての項目で能力の向上が見られることがわかる。特に、論理的・批判的思考力とプレゼンテーション能力が大きく向上し、中でも設問⑥課題発見能力、⑭プレゼンテーションソフトの活用、⑮発表スキル、⑯社会貢献に対する意識が向上した。

また設問⑬より、本校生徒が異文化理解に高い意識を有していることがわかる。

(2) 生徒アンケート結果

調査結果と現実を結びつけることの大切さがわかった。今回、提言をすることはできたが、今後は提案するだけでなく、もう一步踏み込んだ研究をしていきたい。
問題点と解決策を考えるだけでなく、もっと色々な視点から考えることが必要だとわかった。海外での実践事例も、国が違えば取り入れることが難しくなることがわかり、面白いと思った。もっと研究したい。
インターネットは便利だが、同じような内容ばかり出てきたり、偏った部分があるとわかった。物事をもっと広い視野から見て、バランスよく情報を取り入れられるようになりたい。
現状から課題を見つけ、論理的に考えて解決策を導くことができるようになった。
SDGsへの理解や、達成のための道筋が少し見えてきた。国際社会が決めた「SDGs」という目標はどこか遠いもののように感じていて、今回のように自分たちでSDGsに関する研究をしなければ、他人事として考えていたかもしれない。一番大切なのは、「知って、行動すること」だと思った。この経験を大切にしたい。
一つの提案に対して、様々な視点から複数の根拠を示す必要があり、そのためにはたくさんの資料から必要な数値や記述を正確に見つけ出す力や、自分なりに考察することが必要だとわかった。
自分たちの提案のメリット・デメリットを考えるだけでなく、他のアイデアと比較して優位性があるのかを考察することで、より説得力のある提案ができるようになった。
難しい英単語は、相手に伝わるように簡単な単語や表現に言い換えること、また原稿を見ずに聴衆とコミュニケーションを取りながら発表することの大切さがわかった。聴いている人たちに楽しんでもらえた。
筋道の通った、論理展開のしっかりした原稿を書くことができるようになった。
ニュースを見るときに、問題を真剣に考えながら見るようになった。

5 今後の課題

3年次の研究に接続する研究として、課題の発見、文献調査、考察、発表までの一連のプロセスを経験させることができた。生徒たちが自ら課題を発見し、その解決方法の提言をするという一定の目標は達成できたが、提言内容の具体性や実現性について検証するところまで踏み込んだ研究をさせたかった。また、大きすぎる、或いは解決困難なテーマを設定してしまう班や、偏った視点のまま研究を進めてしまう班もみられ、問いの立て方や研究の深化プロセスには改善の余地がある。

班によって研究の深まりに差があり、研究の到達目標を段階的に示す必要性もあると思われる。

『国際探究』の探究活動で用いたルーブリック評価表

〔評価する項目〕①発表中に聴衆を見て話しているか。適度に間を取っているか。（発表スキル）

②ポスターが見やすく内容がわかりやすいか。（ポスター）

③内容が明確で身近な行動についての提言になっているか。（発表内容）

	4点	3点	2点	1点
① 発表スキル	聴衆を意識して、全体を見ながら話している。	聴衆を意識して、全体を見ながら話すことがある程度できている。	ある特定の方向のみを見る、または、顔を下げることが数回ある。	ずっと顔を下げて話している。
② ポスター	聴衆の興味を引くデザイン（文字・図・色など）であり、内容がとてもわかりやすい。	ある程度聴衆の興味を引くデザイン（文字・図・色など）であり、内容を理解することができる。	文字や図が見づらい部分があるが、内容を理解することはできる。	デザイン（文字・図・デザインなど）が見づらく、内容を理解することができない。
③ 発表内容	提言の内容に関する説明が明確で、身近な視点から世界につながる具体的な提言をしている。	提言の内容に関する説明がわかり、身近な視点から提言している。	提言の内容に関する説明がわかりづらい部分があるが、提言ができている。	提言の内容に関する説明がわかりづらく、提言ができていなかった。

1 目的

各自の進路目標に関する日本の課題を挙げ、広域的かつ長期的な視点で分析させる。その際、グローバル社会における自分の役割を考えさせるため、生徒がいつ、どのように行動するかを提示させる。これらを英語で発信し、英語論文にまとめることで、3年間のSGH・AGHの取組の総括とし「日本の未来を創造的に描くことができるグローバル・リーダー」の育成に資する。

2 学習指導要領上の科目との関連

3年次の『総合的な探究の時間』（1単位）を代替する。

3 概要と成果

先に挙げた目的を達成するため、本科目の取組を通して育成すべき人物像は以下の3つである。

- | |
|--|
| (1) グローバル社会における日本の未来を創造的に描くことができる人物
(2) グローバル・リーダーとして果たすべき役割や責任を考えることができる人物
(3) 本校が考える【8つの要素】を備えた、グローバル・リーダーとして活躍できる人物 |
|--|

＊【8つの要素】は、本校AGH事業の目的である「日本の未来を創造的に描くことができるグローバル・リーダー」を育成するために必要なものとして設定した要素である。下記の(3)における【 】内に示された8つの資質が、それに該当する。

このような人物を育成するためのプロセスは、以下のとおりである。

(1) 「グローバル社会における日本の未来を創造的に描く」ために・・・

- ① 各自の進路目標に即した探究活動を個人で行う。
- ② 進路目標に関する日本（及び諸外国）の課題を挙げ、広域的かつ長期的な視点で考察する

(2) 「グローバル・リーダーとして果たすべき役割や責任を考える」ために・・・

- ① 課題解決に際して、自らが果たすことができる役割を考える。
- ② 具体性とオリジナリティのある「行動計画」（上記の役割を担うために、具体的にいつ、どのように行動することができるかに関する計画）を立て、それを他者の前で提案する。

(3) 「本校が考える【8つの要素】を備えた、グローバル・リーダー」を育むために・・・

- ① テーマの設定と情報収集を通して、【問題発見・解決力】、【異文化理解力】、【自国の伝統や文化に対する理解力】、【グローバル課題への関心】を高める。
- ② 集めた情報に基づいた多角的な分析と研究を通して、上記4つの関心と能力の他、【論理的・批判的思考力】及び【コミュニケーション能力】を高める。
- ③ 英語でのプレゼンテーションと論文作成を通して、【プレゼンテーション能力】及び【英語によるコミュニケーション能力】を高める。

年間指導計画はこのプロセスを意識しつつ、また昨年度の『国際探究』（2年学校設定科目）からの接続である点や過年度の反省を踏まえて、以下のように作成し、実行した。

I テーマの設定と初期文献調査（配当：2年次に2時間＋春期休業中課題）

研究テーマを考えた上で、それに関する論文もしくは書籍を少なくとも2つ（Webサイトの記事は不可）読み、その内容を分析し、暫定的な「リサーチクエスト」を導く課題を設定した。

研究テーマを考えるにあたっては、①自分の興味ある事柄や進路目標を挙げ、②挙げた事柄に関連する語を書き出し、それを相互・対立・因果関係等の視点から、線や丸でつなげることを推奨した。また、論文や書籍については①論文・書籍名及び著者名、その他必要な情報、②その論文や書籍におけるリサーチクエストや目的、③用いられている研究手法（聞き取り調査・文献調査など）、④自分が読んで学んだこと、⑤疑問点や不足していると感じる事柄、⑥感想をそれぞれ挙げさせることで、リサーチクエストの導出がしやすいように配慮した。

そのほか「CiNii Articles」や「Google Scholar」をはじめとしたWebサイトでの論文検索の方法や、テーマを設定する際の留意事項についても説明した。課題は報告書として提出し、愛知大学の先生方に目を通していただいた。過年度と比較し、問題点を絞り込んでいる点は評価をいただいたが、全体としてテーマが「壮大」であり、より細分化した小テーマを考える必要がある点が課題として浮上した。一方で、テーマと小テーマを往来することの重要性も御指摘いただいた。

Ⅱ 研究計画の作成と研究第1段階（時期：4～6月、配当：7時間）

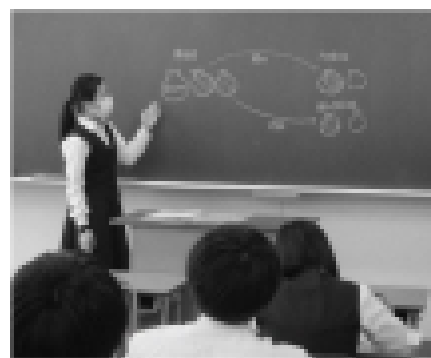
提出した報告書に愛知大学の先生方による助言が付されて返却されるまでに、研究のキーワードについての問い「小さなリサーチクエスチョン」をできるだけ多く挙げ、それに答えるための方法を考えることで、研究計画の作成に弾みがつくようにした。その際、20～21ページと同様の「ぶつける問い（ツッコミ）」のリストを提示し、「小さなリサーチクエスチョン」を挙げやすくした。

報告書の返却後、大学の先生方からいただいた助言を基に研究テーマを確定し、研究計画を作成した。その後、6月の中間発表会で研究の概要と途中経過を日本語で説明するための準備に取りかかった。テーマ確定後、以下の6講座展開にて授業を行った。1講座につき約20名の生徒に対して担当教員が面談を行い、大人としての視点から、研究を深めるためのヒントを提供した。

〔講座の分け方と担当教員の教科〕

- | | |
|--------------------------|------------|
| (1) 経済・スポーツにかかわる課題 | 【担当：数学科】 |
| (2) 環境・心理にかかわる課題 | 【担当：英語科】 |
| (3) 人権・ボランティア・伝統にかかわる課題 | 【担当：国語科】 |
| (4) ジェンダー・国際社会・言語にかかわる課題 | 【担当：英語科】 |
| (5) 教育・まちづくり・交通にかかわる課題 | 【担当：地歴公民科】 |
| (6) 法・政治・地方自治・歴史にかかわる課題 | 【担当：地歴公民科】 |

この中間発表会は従前に行っていたものとは異なり、10の会場を設け、3年生だけでなく1・2年生や他校教員に対する発表の形をとった。3年生には自分の研究方針をこの機会に宣言させることにより、責任をもって今後の研究に取り組ませることを、1・2年生や他校教員には、本校の3年生が2年間の探究活動への取組の後、どのような活動を行っているかを知ってもらうことを目的とした。以下は生徒が記した感想の抜粋であるが、この発表会がその後に向けた学びの場となったことがうかがえる。



中間発表会の様子

○メリット、デメリットの両方を考えた上で、効果を考えることが重要であると気づいた。

○自分を含め、主張とは逆の方向からの考え方や別の角度からのアプローチが少ない気がする。

○発表をする際は、初めに何について述べるのか、目的等を明確にすると、聞き手にとって理解しやすいと感じた。

○テーマとする事象に高校生などの若者がどう参画できるかを視野に、考察を深めたい。

Ⅲ 研究第2段階（時期：6～7月、配当：4時間）

この段階では、中間発表会を終えて浮上した視点に関して追加で研究を行い、掘り下げることを求めた。併せて、アンケート調査やインタビュー調査の実施を希望する者には、その調査対象や質問、選択肢をGoogle Form上に入力させた。本年度はアンケート調査を中学校（生徒・教員）及び高等学校（同上）を対象に行ったほか、鉄道会社社員へのインタビュー調査も実施した。

Ⅳ 研究第3段階（時期：9～11月、配当：9時間）

この段階では、課題解決のための具体的方策を考えながら、自らの「行動計画」を策定し、一連の研究成果を発表できるようにまとめさせた。この過程で生徒には、以下の項目からなる「研究概要報告書」を日本語で執筆させた。本年度は文章をGoogle Form上に入力することで、生徒の作業時間の短縮とデータの保存を図った。図表が必要な生徒には、手書き資料を別途作成させた。

1	背景と目的	*問題意識を明文化し、課題の現在に至る経過と解決による効果を述べる
2	観点と方法	*この研究における「リサーチクエスチョン」と、研究方法を示す
3	結果と考察	*研究で得られたことと、そこから論理的に導かれる考察を説明する
4	結論と今後の展望	*未解決点も含めて研究を総括し、自らの行動を前提とした展望を述べる

入力にあたっては各項の分量に上限を設け、簡潔かつわかりやすい表現を心がけさせた。また入力したものは印刷の後、生徒に返却し、最終発表で指導していただく大学の先生に渡すことを前提に校正を行わせた。生徒が提出した「探究概要報告書」のうち4編を、55・56ページに掲載する。

IV 最終発表会（時期：11月中旬、配当：2時間） *論文執筆は、英語科の授業にて別途実施

S G H指定期からの過去4年間の取組において、対面にて最終発表会を実施する場合に3時間を要し、研究及び指導にかけることのできる時間が短くなることが課題であった。昨年度『A G H海外学習』にて、オンラインでの研究発表の実施方法を確立したことから、本年度は本科目でもオンライン発表を導入した。一方で、生徒がクラスメイトの発表を聴くことにも大きな意義があるため、待ち時間には他の生徒の発表を聴かせた。これにより従前の形式を踏襲しつつ、2時間での最終発表会を実現することができた。また、これまで時間的・地理的制約により参加することができなかった大学教員の参加も実現し、英語母語話者を含む多様な講師からの指導を受けることができた。加えて英語で発表することの意義をもたせることもできた。発表会の実施に関する詳細は、以下のとおりである。



最終発表会の様子(会場A)

- ・4つの会場を設け、各クラス正副担任がそれぞれ2つの会場を監督する。1つの会場（会場Aとする）では、クラスメイトが発表を聴講する。もう1つの会場では、生徒と講師が1対1にて発表を行う。どちらで発表する生徒も、待ち時間は会場Aにてクラスメイトの発表を聴く。
- ・2時間連続（110分）にて実施する。1会場あたりの生徒数は最大10名とし、生徒1名につき9分を与える。その中で5分程度の発表を行い、続いて講師からの指導を受ける。

以下に挙げる生徒の感想からは、この最終発表会を、本校における3年間の探究活動の集大成と位置づけていた様子が見えてくる。

- 半年という時間をかけて研究を行うと、新たな問いが生まれ、段々と研究が発展していくことを実感した。今回の発表においても、先生からいただいたアドバイスについて更に考えることで、自分の考えがより洗練されるのではないかと感じた。
- 発表を終えて、研究を始めた時点でもっていた疑問や目標が、研究を進めるにつれて新たな発見や疑問に影響され、首尾一貫性に欠けてしまったように感じる。様々な観点や視点をもつことは大切だが、それをもったままゴールまで向かうことの難しさを知った。
- 他の人の発表と講評を聞き、範囲や対象を定めた上で研究することの必要性を再確認した。課題に対する解決策は一つではなく、考えられる利点や欠点を様々な視点から比較し、方法を選択することが大切だと感じた。この研究で得たことを、今後に生かしたい。
- 研究テーマに元々興味をもっていたため、知識や自分の考えが豊富にある状態で質疑応答を迎えることができ、応答に困ることなく、楽しむことができた。2年の『国際探究』での経験を生かすことができた。言語は手段であり、重要なのは内容や伝えたい思いであると感じた。

この最終発表会において、講師を務めた愛知大学の教員は、以下のとおりである。

国際コミュニケーション学部	鈴木 規夫 教授、小崎 隆 教授、鎌倉 義士 教授
	Sian Davies Edwards 助教、Andrew Kean 助教
文学部	Daniel Devolin 助教
地域政策学部	石田 周 助教
語学教育研究室	Jared Michael Kubokawa 助教、Peter Lyons 助教

4 評価と課題、展望

昨年度導入し、効果のあった初期文献調査やアンケート調査を継続しつつ、中間発表会及び最終発表会の実施方法を変更することにより、限られた授業時間を有効に活用することができた。生徒の感想からは、1年次の『S G アジア探究』及び2年次の『国際探究』での取組を生かして研究を進めたこと、またここでの取組に満足せず、大学など次のステージでより発展的な研究に挑戦しようとする意欲を感じることができた。一方で、生徒が入学試験を控えた2学期に、授業外での活動に多くの時間を割くことになった点や、最終発表会の形態（クラスメイトの聴講の有無）が生徒によって分かれてしまった点は、今後に向けた課題である。特に前者は他の探究科目にも同じことがいえ、科目の目標とのバランスを図ることが求められる。研究の質を低下させないためにも、授業外での活動はできる限り1学期に収められるように計画し、その上で年度当初に探究活動の全体像と時間配分の見通しを提示することで、生徒が効率よく研究に臨める体制を整えたい。

2 A G H 海外学習

1 目 的

日本を取り巻く諸課題に関するグローバルな視点からの研究に、段階的かつ集中的に取り組み、グローバル・リーダーとして必要な「問題発見・解決力」「異文化を理解する態度や能力」「英語での説得力と発信力」を育成する。英国・ドイツ・マレーシアの3か国に有する姉妹校での研究発表や現地の国際機関・企業等での研修を通して、探究活動に対する意識を高めるとともに、本校で行う『日英独高校生による国際シンポジウム』『English Assembly II』のいっそうの充実を図る。

2 実 践

(1) 国内研修

① 目 的

- ・日本の諸課題に関する個人研究及びその成果のポスター発表（英語）に向けた指導を行う。
- ・グローバルな視点から世界の諸課題について考える機会を設ける。
- ・個人研究の内容や世界の諸課題について、生徒相互で意見交換を行う。

② 参加者数

26名（1年生19名、2年生6名、愛知県立御津高等学校の1年生1名）。そのうち全研修を修了した生徒は24名（1年生18名、2年生5名、御津高校1名）であった。

③ 実施日と内容

回	月日（曜日）	時間	内容
1	5月29日（土）	13:00～17:00	・オリエンテーション ・ALTの先生による講義① （プレゼンテーション、ポスター作成について） ・ALTの先生による講義② ワークショップ（ディスカッション基礎編）
2	6月19日（土）	13:30～17:00	・英語力測定テスト①（リーディング、リスニング） ・豊橋商工会議所産業振興部長による講演 ・個人研究プレゼンテーション（日本語）
3	7月17日（土）	13:00～18:00	・ポスタープレゼンテーション練習①（日本語）、指導 ・英語力測定テスト②（スピーキング）
4	8月24日（火）	13:00～17:30	・自然科学研究機構 基礎生物学研究所教授による講演 ・ポスタープレゼンテーション練習②（英語）、指導
5	10月16日（土）	13:00～18:30	・英語力測定テスト③（リーディング、リスニング） ・ポスタープレゼンテーション練習③（英語）、指導
6	10月30日（土）	13:00～17:00	・講義（異文化理解について） ・ポスタープレゼンテーション発表 『English Assembly II』として実施（詳細は後述）

今年度も新型コロナウイルス感染症は収束を見せず、9月の研修及び10月に行われる姉妹校生徒との交流は中止となった。初回の研修でALTの先生から効果的なポスターの作成について講義を受け、日本語でのポスター作成と発表練習を行った。その後の英語による発表練習では、参加生徒が発表後にALTの先生から直接、発表における姿勢や研究内容に関する助言を受けた。生徒間で各自の研究について活発な議論がなされ、回を重ねるごとに発表・ポスターともに改善が見られた。『English Assembly II』ではオンラインで豊橋技術科学大学の留学生に対して発表を行い、第三者の視点から考察する機会を得ることができた。

また今年度、本校が文部科学省所管の「SGHネットワーク」に参加したことにより、全国発表会「全国高校生フォーラム」での発表の機会を得た。今年度は、本事業に2年連続で参加した2年生生徒1名が参加し、「最新型伝統芸能」に関する発表をオンラインで行った。発表は、学識経験者や全国・世界のWWL拠点校と連携校、SGHネットワーク参加校の生徒が聴講した。



日本語プレゼンテーション

(2) 海外研修派遣生徒の選抜

海外研修の実施を前提として、国内研修及び日頃の研究への取組の評価、英語力測定テストを行った。しかしながら、新型コロナウイルス感染症を取り巻く社会情勢を踏まえ、今年度も海外研修を中止とした。

(3) 『English Assembly II』（国内研修最終発表会）

①目 的

国内研修の総決算として個人研究の成果を英語で発表する場とし、他の参加生徒及び近隣大学の外国人留学生と成果を共有し、日本の文化や歴史をグローバルな視点でみつめる機会とする。また、世界の諸課題に関する講演を通して、グローバル課題への興味及び関心を深め、今後の更なる探究活動に向けての素地を作る。

②期 日

令和3年10月30日（土） 13時～17時

③参加者

- ・『AGH海外学習』参加生徒 24名（2名欠席）
- ・県内他校で指導にあたるALT 2名
- ・豊橋技術科学大学の留学生 4名（オンラインでの参加）

④内 容

- ・ALTによる異文化理解に関する講演

“Culture and Diversity in the United Kingdom”と題して講演を行っていただいた。生徒は両名の出身国である英国の歴史や文化について理解を深め、日本との相違点・類似点などに気づくことができた。普段の歴史や英語の授業では習う機会のない事柄に触れ、知的好奇心を大いに刺激された。

- ・個人研究ポスタープレゼンテーション及びディスカッション

生徒を3つのグループに分け、個人研究の内容について豊橋技術科学大学の留学生に対して個別にポスタープレゼンテーションと質疑応答を英語で行った。発表後には各グループの参加生徒と留学生とでフリーテーマでのディスカッションを行った。自らの研究について留学生と個別に議論を交わすことができ、今後の探究活動における課題を発見することにつながっていた。



ポスタープレゼンテーション練習



ALTの先生による講演



ディスカッションの様子

(4) 渡航直前研修【中止】

①目 的

- ・国内研修で取り組んだ研究の内容を、研修及びディスカッションを通じて深化させる。
- ・姉妹校での研究発表に必要なプレゼンテーションスキルを身に付ける。

②内 容

次項で取り上げる海外研修に先立って、ALTの先生による指導を中心に、数回の研修を予定していたが、海外研修の中止のため、本研修についてもすべて中止とした。

(5) 海外研修【中止】

①目 的

「1 目的」に示したとおり。

②予定していた期間と派遣人数

マレーシア 令和4年1月の一週間程度、6名（御津高校の生徒1名を含む）

英国・ドイツ 令和4年3月の一週間程度、英国は8名、ドイツは4名

③予定していた研修内容

姉妹校（マレーシア：ジッ・シン校、英国：セント・ポールズ校及びセント・ポールズ女子校、

ドイツ：オットー・フォン・タウベ・ギムナジウム）での研究発表及びディスカッション、現地の国際機関・企業等での講義やワークショップに参加し、グローバル化の概念について多面的に学び、将来、グローバル・リーダーとなる上で必要な資質を身に付ける。宿泊は姉妹校生徒宅へのホームステイとし、派遣国の家庭生活の一端を体験することにより文化や歴史を学ぶ。

(6) 海外研修代替事業

① 目的

- ・国内研修で取り組んできた個人研究の内容について、姉妹校生徒と意見交換を行う。
- ・姉妹校生徒への発表に向けて、個人研究の内容を深化させ、英語での発表技術を高める。
- ・姉妹校生徒との意見交換に向けて、英語でのディスカッション能力を高める。

② 参加者数

国内研修修了者を対象に参加者を募集し、10名（1年生6名、2年生3名、愛知県立御津高等学校の1年生1名）が参加した。

③ 実施日と内容

回	月日（曜日）	時間	内容
1	1月6日（木）	13:00～15:00	・ALTの先生によるワークショップ （ディスカッション実践編）
2	1月9日（日）	13:00～16:00	・関西学院大学教員による探究活動指導
3	1月22日（土）	13:00～16:00	・ポスタープレゼンテーション練習（英語）
4	2月中旬から下旬にかけて		・ポスタープレゼンテーション （各校にてビデオ撮影を行う。動画はYouTube上で限定公開を行い、姉妹校に共有する）
5	3月7日（月）	17:00～18:00	・姉妹校（英国：セント・ポールズ校、セント・ポールズ女子校及びドイツ：オットー・フォン・タウベ・ギムナジウム）とのオンラインディスカッション

第1回研修（ディスカッションに関するワークショップ）ではカードゲームを用いて、意見だけでなく、そのように考える理由を明確に説明する練習を大人数で行った上で、2人一組での実践的なディスカッションを行った。第2回研修（探究活動指導）では関西学院大学から5名の教員を招き、参加生徒が取り組んできた研究を「探究」という観点でより深めるための指導をいただいた。初めに講師との個別面談の形で、生徒が講師からの質問に答えながら、更に掘り下げることができる点やその方法について指導をいただいた。次に講師による講義を受け、今後の研究に向けた方針を見定めた後、他の生徒や講師が聴く中でそれを語化し、発表内容やポスターの修正に生かすことができた。その後で第3回研修（ポスタープレゼンテーション練習）を行い、留意点の最終確認を行った上でビデオ撮影に臨んだ。動画は姉妹校と共有し、第5回研修（姉妹校とのディスカッション）では、姉妹校生徒と研究テーマに関するディスカッションを行った。

第2回研修で指導を受けた関西学院大学の教員は、以下のとおりである。

住 政二郎 氏（生命環境学部 教授）
 時任 隼平 氏（高等教育推進センター 准教授）
 一言 英文 氏（文学部 准教授）
 西口 啓太 氏（ライティングセンター 准教授）
 野瀬由季子 氏（ライティングセンター 助教）



ディスカッションワークショップ



関西学院大学の教員による指導



姉妹校とのオンラインディスカッション

3 成 果

(1) 国内研修

初めに『English Assembly II』の事後アンケート結果を掲載する。

①異文化理解に関する講演及びワークショップについて

Q. 異文化理解に対する意欲や関心は高まりましたか。

・ 大いに高まった。	89%
・ 以前と比較すれば、多少高まった。	11%

Q. プレゼンテーションやワークショップを通して学んだことを述べてください。

英国の文化の話題から異文化理解へと内容が移行するにあたって、聴衆を惹きつけながら大事な話に持っていく発表に感銘を受けた。
今までにないくらいずっと英語を聞いて、内容もすごく興味深くて楽しかった。
礼儀の正しさや言葉の間接的な表現の多さなど、英国と日本は精神的な面でよく似ているということがわかった。

②個人研究発表について

Q. 研究発表の評価は、全体としてどの程度満足できるものでしたか。

・ 大変満足できる [80%以上]	43%
・ おおむね満足できる [50%以上 80%未満]	48%
・ あまり満足できない [20%以上 50%未満]	10%

Q. 留学生や他の生徒から質問はありましたか。また、質問には答えられましたか。

・ 質問があり、概ね的確に回答することができた。	52%
・ 質問があったが、その多くには的確に回答することができなかった。	43%
・ 質問はなかった。	5%

Q. 外国人留学生に対する研究発表及びディスカッションの感想等を書いてください。

発音はわかりにくかったが、今までのリスニングの練習成果が出て概要が掴めたことで、実力を確認できたのは収穫だった。また完璧だと思っていたポスターにも穴があることを教えていただき、次回どういった点に留意して作成すればよいかがわかった。
発表に対して様々な意見をいただく経験は初めてで、自分の甘さに気づくことができた。
原稿を完璧に覚えられなかったというのが悔しい点ではあるが、自分の思いをしっかりと伝えることができてとてもよかった。

③『English Assembly II』全体、国内研修全体を通して

Q. 『English Assembly II』に際して、全体の感想を述べてください。

留学生が言っていることを聞き取る力、即座に反応する語彙力や文法を身に付けたい。
実際に海外の方と1対1で話すことで、必死になって伝え、理解しようとするので、これを続けていくととても英語の力が伸びると感じた。普段は聞くことのできない相槌など、会話の中での些細な表現を知ることができてよかった。
言語が違う方とお話することはとても緊張したが、発表を理解してくれた時にはやりがいを感じた。また育ってきた環境の違いで意見が異なり、世界観が広がった気がした。

Q. 国内研修全体を通して、次の各点において、あなたは成長したと思いますか。

項目		成長した(%)
1)	問題発見力、解決力	100
2)	論理的思考力、批判的思考力	83.3
3)	英語によるプレゼンテーション能力	100
4)	異文化を理解する力	100
5)	自国の文化、歴史を理解する力	95.8
6)	アジアあるいは世界における自国の立場を理解する力	91.6
7)	上記 1)～6)を自分の言葉で他に向けて発信する力	100

8)	自らが元々もっていた資質や能力の向上	100
9)	グローバル・リーダーとして活躍するのに必要な力	83.3

Q. 5月から今日までの研修で行ったことのうち、ためになったものの1位と2位を以下の中から選択してください。

取組項目		1位(%)	2位(%)
1)	探究活動：文献やインターネットでの調査	12.3	8.3
2)	探究活動：ポスター作成	12.3	20.8
3)	探究活動：研究概要発表プレゼン	16.7	16.7
4)	A L Tの先生による講義・個人指導)	12.3	29.2
5)	英語力測定テスト（筆記試験、面接）	0	4.2
6)	英語でのディスカッション練習	12.3	16.7
7)	English Assembly II	33.3	4.2

Q：上記1)～7)の各取組項目においてそのように思う理由を書いてください。

1)	自分で筋道や構想を意識して調査や考察をすることができ、これからに役立つと思った。 自分で課題を見つける能力が上がり、調べていくことで知識が増えたから。
2)	ワードやパワーポイントの使い方に詳しくなり、人に見せるためのレイアウトを考えながら作る技術が上がったから。
3)	様々な意見を聞き、自身の英語や勘違いしていたことを指摘してもらい成長できたから。 プレゼンテーションに対する抵抗が減ったから。限られた英語でどれだけのことが言えるか考えて書くのにとってもよい経験になったから。
4)	発表を聞いてもらうことで、言い回しやプレゼンテーション時の話し方のアドバイスをたくさんもらえて、参加を決めた理由のひとつであるプレゼンテーション能力の向上につながったから。
5)	資格試験を受けたことがなかったので初めて自分の英語力を客観的に知り、何が必要なのかもわかったから。
6)	周りにはこんなにも英語が上手な人がたくさんいると知って刺激を受けたから。 英語で10分間発表する経験はなかったので、気持ちの面でも成長できたから。
7)	留学生と会話することで、様々な人の発音やスピードがわかったから。また効果的なポスター作りについてたくさんのことを学んだから。 留学生を相手に英語でプレゼンをするのはとても貴重な体験で、日本人との交流では得られない視点からのアドバイスをもらえたから。

Q. 国内研修全体を通しての感想や学んだことを述べてください。

参加しなければ、研究テーマについて考えることも、ましてやその解決策を考えることもなかった。ここで得た知識やプレゼン力を生かして、将来はこの問題の解決に少しでも貢献できたらいいと思う。
英語は難しい！！そして自分の努力次第で今よりもっと話せるようになると確信した。
数多くの課題に同時に取り組む上での効率のよい取り組み方、課題発見後の迅速な情報収集、異なる考えを持つ相手への意見の伝え方など、たくさんのことを考え実践できたおかげで近い将来にも遠い未来にも役立てられる能力を育むことができた。感謝の気持ちしかない。

次に「全国高校生フォーラム」に参加した生徒の感想を掲載する。

緊張したが、自分の研究を多くの人に見てもらえる機会となり、参加してよかった。様々な視点からアドバイスをいただき、研究を深める契機となった。全国の高校生徒のディスカッションでは、英語でコミュニケーションをする難しさを感じながらも活発に意見交換を行うことができ、視野を広げることに繋がった。

(2) 海外研修代替事業

初めに、第2回研修（探究活動指導）における参加生徒の感想を抜粋して挙げる。

先行研究について調べ、その問題点を指摘してから自分の研究に入ること、研究の妥当性と新規性をともに満たすことができそう。ポスターのデザインも、もっと見やすく、わかりやすくできると思う。研究内容と意見との接続が弱かったので、具体例や先行研究の内容を挟みたいと思う。先生方がおっしゃったように「綺麗事」で終わらないように頑張りたい。
普段から探究活動の指導を行っておられる先生方から指導をいただき、方向性や帰着点に関する悩みについてヒントをもらえたのがよかった。現状を調べて分析することでも探究になりうるということで、これまで無理に結論を出そうとして少し飛躍してしまうことが多かったが、今回、堅実な方向性を定めることができたと思う。
調べたことを相手に伝えるための方法を工夫することの大切さを学んだ。自分では理解していても、相手に上手く伝わってなければ意味がないので、相手に伝えるために再度自分の中で整理して「どの情報を一番伝えたいのか」や「どの情報を示せば論理的になるのか」ということを考え直したい。今回多くのアドバイスをいただくことができ、今後もっと掘り下げたいテーマが浮かんできた。それを掘り下げるための方法も教えていただけたので、これから実践していきたい。先生がおっしゃった「好きなことを言えるのは才能」という言葉がとても印象に残った。これからは自分の「好き」という気持ちを大切に、研究を続けたい。
説明の結めの甘さなど、様々なことに気付いてよかった。スマート農業への意見を地元の農業従事者に聞いてみるという指摘は、深く農業に携わっていない自身の視点からではしか利点を考えていなかったことに気づく契機となった。また自分の研究を1センテンスで表すことが難しく、テーマや背景について正しく、深く理解していないと誤った方向にまとめてしまいそうだと感じた。自分の研究を今一度掘り下げて「これだ」というものが表現できるようにしたい。

次に、第5回研修（姉妹校との交流）終了時の参加生徒の感想を抜粋して挙げる。

英国セント・ポールズ女子校のクラスの中に、私の研究テーマである着物を着たことがある方がいたので嬉しかった。反省点としては、もっと話せたのではないかなと思う。リアルタイムということもあり緊張してしまい、話せたはずの英語さえ言葉にできず、悔しかった。
互いの国に対して両者が現実とは異なる認識をもっていて、きちんと伝えることが文化の理解の上で大切だと改めて思った。
自分が伝えたいことや研究の結論を上手く伝えるためには、伝える情報を精査して盛り込みすぎないことが大切だということがわかった。全体を通して、自分の研究についてより深く考えたい、また英語を話せるようになりたい、という思いを抱くことができた。
この事業を通して、海外についてもっと知りたいと思った。大学での学びにつなげたい。また私は英語を話すことがあまりできないということを、今回のオンラインディスカッションで痛感した。これから学校の授業以外にも機会を探し、英語を話す技能を高めたい。

4 今年度の反省と来年度への課題

- (1) 今年度も研修プログラムを縮小せざるを得なかったが、国内研修の第2回からポスタープレゼンテーションを集中的に行ったことにより、研修に臨む参加生徒の成長には著しいものが見られた。辞退者はわずかであったが、2年生の参加がやや少なかったように思われる。探究活動未経験の1年生が2年生を見本とすることで、生徒が切磋琢磨できる環境の整備に尽力する必要がある。
- (2) 今年度も「English Assembly II」はオンラインで実施した。対面での交流が望ましいが、アンケート結果からは、このような形であっても貴重な経験ができたことが窺える。参加者数を増やす材料としても期待できると思われる。
- (3) 英語によるプレゼンテーション能力の向上を最大の収穫として捉えた生徒が最多数であった。この経験は、他の活動にも生かすことができている。例えば英語の授業内で実施しているパフォーマンステストでは、参加生徒の発表が群を抜いていた。本事業に参加した生徒のポスターや発表の様子を見て、発表の技術や研究の精度の向上をめざそうとする生徒の増加が期待されよう。
- (4) 本事業への参加生徒の研究テーマはいわば全校生徒の興味や関心の縮図であり、「AGH発展学習」における連携先の選定や、講座テーマの設定における好材料であるといえる。しかし、生徒の選ぶテーマは理科系の研究に比べ、論理性に欠ける側面もある。海外研修代替事業において関西学院大学の教員から各生徒の研究に向けていただいた助言は、その問題解決の一助となるものであった。この活動を初期の段階で実施し、研究を深めていく時間を確保することも来年度の開発の重点目標に位置づけたい。

3 AGH発展学習 【国内大学との連携】

1 目 的

大学教員による講義をオンラインにて受講することで、探究活動のテーマや手法についての興味・関心を喚起し、テーマの適切な設定や理解及び探究活動の在り方を考える契機とする。

2 実 践

(1) 第1回

①方 法

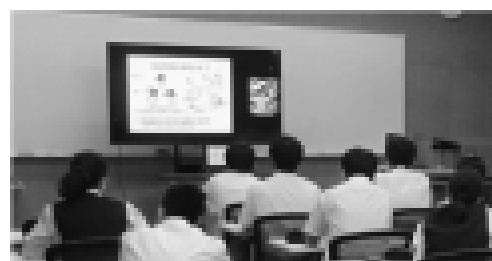
実施日 令和3年9月30日（木）

講 師 芳村 圭 氏（東京大学生産技術研究所 教授）

演 題 「気候と水循環研究の最前線～水の同位体から古文書まで～」

②内 容

「学際的な研究とは何か」というテーマの下、芳村氏の講義を受講した。芳村氏は自身が「情報のタイムカプセル」と称する水の同位体や、古文書の記載に着目することで、観測データが存在しない時代の気候を解明しようとしている。本講義は水循環の基本メカニズムの説明に始まり、地球の誕生以降の環境の変遷、更には文明の勃興と気候との関係にも言及する形で進んだ。分野を横断した研究の一端に触れ、生徒は幅広く学習することの大切さを学んだようであった。



芳村氏によるオンライン講義

③成 果

参加生徒の感想を抜粋して掲載する。

研究自体が面白く、「あ、このような方法でできるのか」という新しい発見に多く出会えた。
私はこれまで「文型クラスに進むのだろうか」「数学なんてできなくて仕方ないな」と思っていたので、今回の講義の「文理融合」という内容に興味を湧き、参加した。参加前は文系と理系ではやること異なるのではないかと考えていたが、芳村先生の講義を聞いて、理系の研究であっても理系の知識だけでなく、文系の知識を使う場合もあることに驚いた。
根気強く取り組むことが大切だということを知った。「降水量を調べたい！」と思ってから同位体を使おうと思いつくまでにも時間がかかりそうで、更にそこから同位体や古文書まで調べるのは相当大変だと思う。ずっと努力をして新しい方法などを思いつくのがすごいと思う。
今後、自分の研究項目の枠組みにとらわれないように、また他の分野の人と協力して新しい視点を見つけたい。
以前どこかで「文系／理系と壁を作るのはよいことではない」と聞いたことがあったが、芳村先生のお話を聞いて、やはりそうなのだなと思った。ただ、文系と理系を分けることで生まれるメリットもあるだろうし、すぐには今の体制を変えることはできないだろう。自分の心持ちだけでも、バリアフリーでありたいと思う。

(2) 第2回

①方 法

実施日 令和4年2月9日（水）

講 師 時任 隼平 氏（関西学院大学高等教育推進センター 准教授）

演 題 「探究活動を充実させるためのポイントを知る～これでいいのか？私の探究～」

②内 容

「現在の探究活動を見直し、今後の活動を充実させる」というテーマの下、『AGH海外学習』海外研修代替事業にて指導をいただいた時任氏の講義を受講した。講義は5つのポイントに言及する形で進行し、生徒は時任氏から発せられる問いに従って、自身の探究活動への取組を振り返った。例えば「～を明らかにする」という形で探究活動の目的が明文化できるか、という質問では、上手く表現できない生徒が殆どであった。

この経験を通して、生徒の今後の探究活動がより充実したものになることを期待したい。

③成 果

参加生徒の感想を抜粋して掲載する。

これまで私は、わかっていることをただまとめることが多かった。今後は「まだわかっていないことを明らかにする」ということをめざし、探究活動に取り組みたい。

探究活動を何度か行う中で、いつも「このやり方でよいのか？」と疑問に思っていた。今後は対象地域を絞り、現実世界と接点をもたせることを意識して取り組みたい。

探究活動を行うにあたっての基本的な「目的」や「めざすべきもの」を考えるきっかけとなり、とても有意義な時間だった。

活動の目的を決めたり、内容を構築したりする段階の考え方について、今回きちんと学ぶことができたので、来年度は細かいところまでしっかりと考えて取り組みたい。

私は研究を始める時にテーマが明確になっていないことが多いので、研究方法を考えながら明確なテーマ設定をする必要があると感じた。また、先行研究の出所も曖昧だったので、信頼できる情報を自分で見極められるようにしたい。探究活動は苦手だが、意識すべきポイントを知ることができたので、次に行う活動が少し楽しみになった。

3 教員による評価

本年度はこれまでと趣向を変え、探究活動を深めるという視点から2回の講座を企画した。参加者こそ多くはなかったが、アンケートの記述内容から、参加生徒は講師の先生方の熱意を感じ取り、充実した学びを得た様子をみてとることができる。この事業に参加した生徒が、今後の探究活動においてその経験を生かして活動に取り組み、それにより他の生徒の学びが促進されることを期待してやまない。

4 今後の課題

本事業は来年度も夏と秋の2回、オンラインでの実施を予定している。主たる参加者となる2年生の『国際探究』の年間指導計画において、その時期は先行研究の分析や仮説に対する考察という、探究活動において重要な段階に相当する。この事業が探究活動に与える効果を鑑みて、本年度の第2回の講座のように、自身の探究活動を振り返るワークショップを実施するなど、その内容を検討したい。

【企業との連携】

1 目 的

グローバルな課題への興味・関心を喚起し、探究活動テーマの適切な設定と理解の深化につなげる。

2 実 践

- (1) 実施日 令和3年12月13日（月）
- (2) 講 師 来田 享子 氏（中京大学教授、公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会理事）※第1部のみ
神戸 和貴 氏（日本放送協会〔NHK〕名古屋拠点放送局 アナウンサー）

(3) 内 容

第1部：「スポーツとSDGs、ジェンダー」をテーマに、東京オリンピック・パラリンピックの実例を取り上げながら、来田氏によるオンライン講演会を行った。2年文型全生徒107名が参加した。

第2部：「NHKとSDGs」をテーマに、NHKアナウンサーによるパラリンピック選手取材及び、NHKの脱炭素に向けての取組を紹介した。1・2年希望生徒78名が参加した。

第1部・第2部を通じ、質疑応答も活発に行われた。

(4) 成 果

①生徒アンケート結果・生徒感想（抜粋）

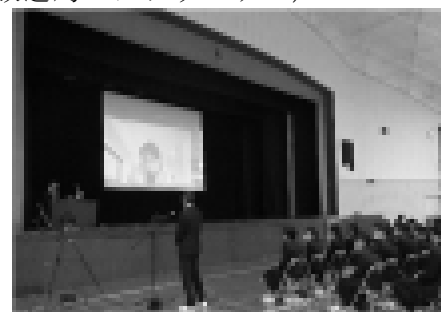
第1部 ○今日の講演の内容を理解できましたか。

よく理解できた。 84.6% どちらかといえば理解できた。 15.4%

○スポーツやオリンピックとSDGsの関わりについて、興味や関心が高まりましたか。

大いに高まった。 78.0% 以前と比較すれば、多少は高まった。 20.9%

私は授業でトランスジェンダーやLGBTQについて研究を進めているが、スポーツとジェンダー問題の関係については考えたことがなかったので、とても興味をもった。（多数）



第1部の様子

オリンピックはただのスポーツの世界大会ではなく、多様な人が様々なことを発信できる素晴らしい場であるということを学ぶことができた。
スポーツとジェンダーがつながっているということに初めて気づかされた。自分が無意識に性別で差別をしてしまっていることもあるのだということを知って驚いた。そのような差別をなくすために、普段の生活から男女の違いで差別をしないことを意識していきたいと思った。とてもよい経験になった。
日本のジェンダーに関する考え方やL G B T Qへの理解が遅れていることに、驚きと憤りを感じた。
今回の講演で、オリンピックの意義や、こんな状況下だからこそ人と人をつないでいくことの大切さや温かさを知り、経済面ばかり考えていて忘れていた“オリンピックの真の目的”を考え直す機会をもらえてとてもよかった。
パラリンピックには男女で分けられていない競技が多いことを知り、見てみたくなった。
海外の選手には多くなってきているトランスジェンダーの選手が、日本では一人もいないことが一番印象に残った。

第2部 ○企業のSDGsに対する取組について、興味や関心が高まりましたか。

大いに高まった。 81.1% 以前と比較すれば、多少は高まった。 18.9%

○アナウンサーの仕事や、取材に対する姿勢について理解できましたか。

よく理解できた。 82.4% どちらかといえば理解できた。 17.6%

授業で地球温暖化への日本の対策を調べて発表するのだが、今回のお話を踏まえて、自分たちにもできることも調べ、発表しようと思った。
今までは企業のSDGsに対する取組について詳しく知らなかったもので、今回学べてよかった。他の企業の取組についてももっと知りたいと思った。
環境問題に対しての対策チームがNHKでも結成されていたことに驚いた。大企業なども環境問題を通じて社会貢献をしていることを学んだ。
障がいを持った方と「普通」に接するということがどれほど難しいか改めて感じさせられたとともに、障がいを持つ人について理解を深めることの大切さも感じた。(多数)
SDGsを学校で習っていたこともあり、今回の環境の話はとても興味のあるテーマだった。
ペットボトルからマイボトルに変えるなどの細かい行動はそこまで影響がないと思っていたが、100人のうち3.5人の行動で変わるという話を聞いて、自分一人の影響力もそれなりにあると感じ、積極的に行動しようと思った。
NHKのアナウンサーは番組を作ることができるだけでなく、人とのつながりもたくさん作ることができるのが驚きだった。番組制作に興味があったので、貴重なお話を伺えてよかった。
自分たちが行動することは小さなことだと思っていたが、行動することで大きな企業が動いてくれるかもしれないので、小さなことでも意識していくことが大切だとわかった。

3 教員による評価

第1部：『国際探究』でジェンダーに関する研究をしている生徒も多く、熱心に講演に聞き入っていた。オリンピックやスポーツという身近な題材に対し、課題意識をもって臨むことで新たな視座が開けたという感想が多く寄せられ、生徒たちの課題発見力を向上させる一助になった。

第2部：講師のパラリンピック選手への取材から得た経験と、NHKの脱炭素への取組について学び、一人ひとりの小さな活動が大きなムーブメントにつながる実感を得ることで、生徒たちの研究の動機づけにつながった。

第1部・第2部を通して質疑も活発に行われ、生徒たちの関心の高さを感じさせた。企業の活動に具体的に触れて得られる学びは、生徒の関心や今後の探究活動の幅を広げ、課題意識をもちながら探究活動のテーマを設定する中で大いに役立つものであった。

4 今後の課題

生徒たちの研究テーマに新たな角度から光を当てることで、新たな学びの機会と研究への刺激を与えることができた。SDGsという、ともすれば概念的なキーワードに対し、具体的な取組のビジョンを提供できたことは一つの成果といえる。今後、生徒の研究テーマと結びつけながら、地域や業種を問わず、多種多様な企業との連携も視野に入れたい。

1 目 的

姉妹校教員による講義をオンラインで受講することで、探究活動のテーマへの興味・関心を喚起し、テーマの適切な設定や理解を深めるとともに、グローバル社会で果たすべき役割と責任を探究する。

2 実 践

(1) 方 法

実施日 令和4年3月4日（金）

講師、所属【SPS：セント・ポールズ校、SPGS：セント・ポールズ女子校】及び講義テーマ

Kerilynne Cloete（ケリーリン・クローテ）先生【SPS】

テーマ：セント・ポールズ校の紹介及び英国・南アフリカ文化について

Joseph Swartzentruber（ジョセフ・シュワルツェントルーバー）先生【SPS】

テーマ：英国での日本文化の受容について

Hélène May（エレン・メイ）先生【SPGS】

テーマ：セント・ポールズ女子校の紹介及び英国のコロナ禍の教育事情について

(2) 内 容

事前に生徒国際交流係へアンケートを行い、聞きたい話題として挙げたテーマについて、姉妹校の先生方にお話しいただいた。南アフリカ出身の Cloete 先生からは、日本では殆ど見聞きすることのない南アフリカの文化についてお話しいただき、多くの生徒が興味を示していた。生徒として本校を訪問した経験のある Swartzentruber 先生は、どのような日本文化が人気で、現地メディアがどのようにそれを扱っているか、様々な視点からお話しいただいた。また May 先生には、パンデミックに対する英国の教育現場の実体験をお話しいただき、特にマスクに関する話題には多くの生徒が関心を寄せていた。



Swartzentruber 先生の講義

(3) 成 果

参加生徒の感想を抜粋して掲載する。

英国と南アフリカの違いなど、日本にいと知る機会もないことを知ることができてよかった。また英国から見た日本文化についても知ることができないので、よい機会になった。
英国と南アフリカが、びっくりするくらい似ていて感動した。また英国で日本文化のイベントがあると知って嬉しかったし、姉妹校の最新の設備や伝統的な部分を見て羨ましいなども感じた。
英国での日本文化の評価を知って、世界による日本の評価の一部を垣間見ることができた気がする。世界的な視点から日本を見つめるための助けになるだろう。
どの国のメディアも、面白くするために誇張することがあるのだと知ることができた。
コロナ禍において学校を清潔にし、感染対策をするという点が日本と似ていると感じた。またパンデミック前はマスクを着ける習慣があまりなかったと聞いて驚いた。私はマスクを着けることに抵抗はなかったが、元々着けていなかったとすれば慣れるのも大変だったのではないかなと思う。
自分も持っているのとは異なる視点から見た日本を知ることができた。今後は様々な人と関わることで、より多くの視点から考えることができるようになりたい。

3 教員による評価

英国の最新事情について、日本文化の関わりも交えながらお話しいただき、生徒は普段見聞きことのない話題に触れるとともに、60 分間という長きにわたって英語のシャワーを浴び続ける貴重な経験を行うことができた。質疑応答も活発に行われ、文化や習慣の共通点や相違点に感嘆の声があがる場面もあった。参加者数が多くなかった点が残念だが、参加生徒がこの経験を共有することを期待したい。

4 今後の課題

今回、相手方の都合によりドイツ及びマレーシアの姉妹校との連携を行うことはできなかった。来年度も新型コロナウイルス感染症の状況が見通せない中で、仮に姉妹校生徒・教員の来日が不可能となった場合には、予定される時期に連携を行うことで、異文化理解に対する生徒の興味と関心を高い水準で保ちたい。姉妹校生徒を交えた交流や4か国での共同講義など、新たな形態での実施も模索したい。

4 その他の取組

【国語科】『国語総合（現代文）』のカリキュラム開発（1年）

1 目 的

世界で活躍できる人材を育成するために、日本の文化や伝統を深く知り、高い論理的思考力を身に付けて、世界に発信する際の表現力や発表能力を涵養することを目的とする。

2 実 践

(1) 方 法

近現代の詩・短歌について、調査、研究、考察をし、結果をまとめ、発表する。

(2) 仮 説

短歌を鑑賞し、それを発表することで、資料を的確に活用する能力、書かれていない部分を解釈する論理性を身に付けることができる。また、調査資料を班で作成し、発表することにより発表能力の向上につながる。

(3) 内 容

①近現代の「詩」を鑑賞し、その後「短歌」を班ごとに調査、解釈し、結果をまとめ、発表する。

(ア) 授業時間 5時間（「詩」の学習時間2時間を含む）

(イ) 発表する短歌について班ごとに調査し、作者と作品の解釈についての資料を作成する。（2時間）その後班ごとに発表を行い（5分×8班）発表について質疑応答をする。（1時間）

(ウ) 発表する短歌の作者（各班で分担し担当）

・正岡子規 ・与謝野晶子 ・石川啄木 ・若山牧水 ・北原白秋
・斎藤茂吉 ・寺山修司 ・俵 万智

(エ) 生徒の感想

- ・寸劇、音楽、音、四コマ漫画をはさむなどの工夫をすることで、聞く人の興味を喚起し、飽きさせない発表になっていた。
- ・班員がそれぞれ違う解釈をした。現代語にするのは難しいと思った。しかし、色々な読み取り方があることも短歌を解釈する楽しさでもあるのかなと思った。
- ・班員それぞれの思考を擦り合わせ、より細かく解釈できた。その過程で、班員それぞれの個性を感じることができた。
- ・絵を描くことで、情景が思い浮かび、短歌の解釈も深まった。
- ・絵を描くことで、解釈の間違いに気づくことができた。
- ・多くの情報から必要なもの、聞き手の興味を引きそうなものを選択する術を学べた。
- ・作者や詠まれた時の背景を知ることによって、解釈が深くなった。
- ・他の班の発表を聞いて、文法や単語の意味を詳しく調べるとわかりやすく、説得力が増す説明になるとわかった。
- ・細かく調べ、論をいくつか挙げ、根拠を考えて最適なものを選び取ることが大切だとわかった。

3 結果と成果

(1) 結 果

作者や時代など作品の背景を調査し、更に単語の意味、文法事項などを詳しく調べることで、論理的な短歌の解釈ができると生徒は理解することができた。効果的な発表の手順についても考察を深めることができた。より確実に伝わる説明をするために各班が工夫し、よりよい方法を模索するようになった。作品を理解するだけでなく、自分たちの読みを発表し、他と共有しようとする場を作ることによって、満足度の高い授業となった。

(2) 成 果

目的達成に必要な考え方、相互理解の方法、表現力、探究心、論理的思考力、発表能力などを身に付けるための実践をすることができた。

4 今後の課題

(1) 未知のものに対する調査や探究を、安易にインターネットに頼るのではなく、文法や語彙、時代

背景等を基にして、論理的に考える力を更に身に付けさせたい。

- (2) どのようにしたら相手の心に響く、印象的な発表になるかを考え、その方法を身に付けさせるためのカリキュラム開発を更に進めていきたい。

【国語科】『古典B（漢文）』のカリキュラム開発（2年）

1 目 的

世界で活躍できる人材を育成するために、日本の文化や伝統を深く理解し考察を深め、それを世界に発信する際の表現力やプレゼンテーション能力を身に付けることを目的とする。

2 実 践

(1) 方 法

古典B（漢文）において学んだ孟子の「性善説」と荀子の「性悪説」に関して、人間の「本性」をどのように考えるか、根拠を踏まえて各自考察を深め、自分なりの結論を出し、グループ内で発表し、相互に評価し合う。

(2) 仮 説

- ①発表を設定することで、対比的な二つの「説」の内容（主張）を的確にまとめ、深く吟味することができる。
- ②考察を通して、生徒個々人の人間観を深めることができる。
- ③グループ発表を行うことで、「コミュニケーション能力」や「プレゼンテーション能力」を身に付けることができる。

(3) 内 容（全5時間）

- (ア) 孟子の「性善説」、荀子の「性悪説」についてそれぞれの主張の特色、説得のレトリックに注意して、正確に解釈する。（3時間）
- (イ) 人間の「本性」についてどう考えるか、自分の立場を、根拠（具体例）を踏まえて論ずる文章を作成する。（1時間）
- (ウ) グループを設定し、それぞれの立場（考え）を発表する。他の人に自分の立場を、説得力をもって伝えられるよう工夫する。（1時間）
- (エ) 生徒の感想
 - ・班4人の中でも意見が異なっていてとても面白かった。答えのないことを討論する難しさも感じた。説得力をつけるために引用したり、理由や目的を明確に話したりすることで共感できるなと思った。
 - ・人の本性は善だと考える同じ意見の人の中でも、根拠は色々あって面白いなと思った。
 - ・この発表を通して、自分が考えることはほんの一部に過ぎず、他の人の意見を聞くことで世界観が広がるな、と改めて実感した。
 - ・色んな人の意見を聞いて、納得したり自分の意見を改め直したりして、考えを深め見詰め直すことができて、たくさん刺激を受けたのでよかった。
 - ・他の人の考えを聞く活動はとても有意義な時間であると思う。固定観念にとらわれていたりして自分の視点を変えることは難しいが、それをすることで発表がより根拠を持ち、明確なものになると思う。

3 結果と成果

(1) 結 果

生徒は、それぞれが自説を説得する立場になって、改めて孟子の巧みな説得の論法に気づくことができた。発表ではほとんどの生徒が孟子同様、根拠として身近な具体例、他の人の興味を引く魅力的な例を挙げていた。グループ発表は一人5分程度であったが、根拠を示しながら要点を伝える力（表現力）を養うよい機会となった。

(2) 成 果

古典の文章をただ解釈するだけでなく、自分の意見を持ち発表することは、内容をより深く考察しようとする意欲につながった。また、それぞれの考えを知り、共有する場での楽しさ・面白さを

通じて、探究活動や発表への関心を高めることができたと思われる。

4 今後の課題

限られた授業時間の中で、探究活動・発表にかけられる時間をいつ、どれくらい割り当てるか、予め計画しておくことが効果的な指導をするために必要である。

今後はより発展的な探究活動を行うために他教科との連携について模索したい。

グローバル・リーダーに求められる道德心の涵養【ボランティア組織「ゆりのき会」】

1 目的

「Think Globally, Act Locally」の活動理念の下、外部団体主催の行事への参加や他校と連携してのボランティア活動の企画を通して、世界の現状に目を向け、グローバル・リーダーに求められる道德心を涵養する。

2 内容

- (1) 「ハイゼックス包装食実習」を校内で3回、校外で1回開催し、のべ74名の生徒が参加した。
- (2) 豊橋医療センター緩和ケア病棟に寄贈する手作り座布団ボランティアに、のべ21名の生徒が参加した。
- (3) 「ゆりのき会」のメンバーが献血ボランティアを呼びかけ、愛知県赤十字血液センター豊橋事業所へのべ23名が出向き、献血を行った。
- (4) 国際ソロプチミスト豊橋主催のケア帽子作りに5名が参加し、豊橋市民病院と蒲郡市民病院にそれぞれ2回寄贈した。
- (5) 校内文化祭ゆりのき企画で、手作り座布団、ケア帽子、コートジボワールに送る運動靴、献血を広めるための展示を行い、ハイゼックス炊飯袋の使い方を説明した。募金額(2,100円)に各部活の企画から寄せられた売上金を加えた51,333円を、豊橋善意銀行を通してコロナ禍による生活困窮の人々に、また生物部の売上金から62,119円を愛知県環境保全基金に、それぞれ寄付した。
- (6) 赤い羽根共同募金の校内募金に64名の生徒が参加し、44,860円を豊橋市共同募金会に寄付した。
- (7) 豊橋市社会福祉協議会主催の「コロナ禍でもボランティア続け隊」に11名が参加し、くす玉の飾りを作って市内の老人福祉施設に寄贈した。
- (8) 「コートジボワールの子どもたちに愛の靴を送ろう」企画に24名が参加し、38足をNPO法人ぎふ・コートジボワールに寄付した。
- (9) 「とよはし高校生ボランティアハートネットワーク」オンライン交流会を開催し、6名の生徒が参加した。本校がホスト校となり、生徒はその責務を果たした。
- (10) 「ゆりのき大鍋実習」を開催し、豚汁約500食を提供した。試食した人からの募金54,000円を、ユニセフを通じて世界の子どもたちの人道支援のために寄付した。
- (11) 豊橋善意銀行主催「高校生善意ナベ募金」に9名の生徒が参加した。
- (12) 「ゆりのき通信」を2回発行した。活動内容を報告し、ボランティア活動への参加を呼びかけた。

3 成果

「ゆりのき通信」や掲示物を発行して、活動内容の広報やボランティア活動への参加の呼びかけを積極的に行った。コロナ禍で、外部主催のボランティア行事が中止になる中、本校では「コロナ禍だからこそできること」をモットーに、安全に留意しながら活動を広げた。また、SDGsに対する関心の高まりもあり、各活動に参加する生徒数、募金額ともに多かった。ボランティア活動への関心・意欲が大いに高まっているといえる。

4 今後の課題

本校の教育目標である「自ら考え 自ら成す」の精神を実践して、今後とも自主・自立の心の涵養を図り、本校生徒がグローバル・リーダーとなる上で必要な道德心の涵養をめざして取り組んでいきたい。

資料 1

令和 3 年度入学生教育課程編成表

教科	科目	標準 単位	第 1 学年	第 2 学年		第 3 学年	
				グローバルコース(文系)	サイエンスコース(理系)	グローバルコース(文系)	サイエンスコース(理系)
国語	国語総合	4	5				
	現代文 B	4		2	2	2	2
	古典 A	2				2	2
	古典 B	4		4	3	2	1
地理 歴史	世界史 A	2			2 △		
	世界史 B	4		3	3 △ ①	3	3 ▲
	日本史 A	2			① 2		①
	日本史 B	4		3 ①	3	3 ▲	3
	地理 A	2			2	①	
	地理 B	4		3	3	3	3
公民	アジア探究 #	2	2				
	人類の思想	1				1	
数 学	数学 I	3	2				
	数学 A	2	2				
	数学 II	4	2	3	2		
	数学 B	2		3	2		
	数学 III	5			2		4
	発展数学 ※	3				3	3
	数学演習 ※	2				2 ①	
理 科	SS総合理科 A *	2～5	2	1 ①		2 ▲ ①	
	SS総合理科 B *	2～5	2	1		2	
	SS総合理科 C *	2, 4		2		2	
	SS物理 *	6			3		3 ▲
	SS化学 *	8			4 ①		4 ①
	SS生物 *	6			3		3
保 体	体育	7～8	2	2	2	3	3
	SS健康科学 *	2	1	1	1		
芸 術	音楽 I	2	2 ①				
	音楽 II	2		2 ①			
	音楽 III	2				2	
	美術 I	2	2				
	美術 II	2		2			
	美術 III	2				2	
	書道 I	2	2				
	書道 II	2		2			
	書道 III	2				2	
	コミュニケーション英語 I	3	4				
外国語	コミュニケーション英語 II	4		4	4		
	コミュニケーション英語 III	4				5	5
	ESP I *	2	2				
	ESP II *	4		2	2	2	2
家庭	家庭基礎	2	2				
総合的 な探究 の時間	探究基礎 ※	3	3				
	探究 I *	1			1		
	国際探究 #	1		1			
	探究 II *	1					1
	グローバル社会探究 #	1				1	
特別活動	ホームルーム活動	1	1	1	1	1	1
計		34	34	34	34	34	34

※印は学校設定科目。*印はSSHに伴う学校設定科目。#印はAGHに伴う学校設定科目。

〕印は選択履修。①は1科目選択を意味する。

△印はA科目から1科目、B科目から1科目選択する。ただし、世界史Aまたは世界史Bを必ず含む。

▲印は2年次の選択を継続する。

必履修科目の代替について

「現代社会」→「アジア探究」

「物理基礎」→「SS総合理科A」、 「生物基礎」→「SS総合理科B」

「化学基礎」→グローバルコース(文系)「SS総合理科C」、サイエンスコース(理系)「SS化学」

「情報の科学」→「探究基礎」

「総合的な探究の時間」→「探究基礎」「探究I」「探究II」「国際探究」「グローバル社会探究」

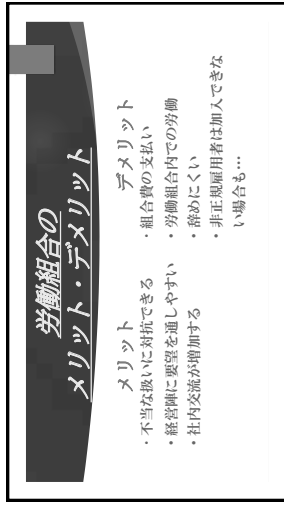
[その他] 「英語表現 I、II」→「English for Social Purposes(ESP) I、II」



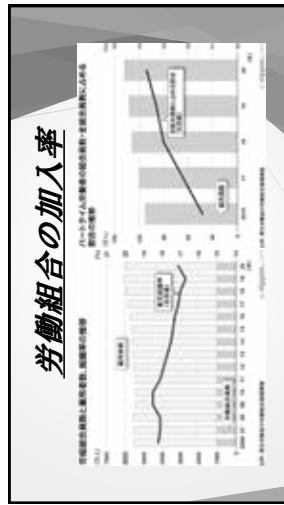
1



2



3



4



5

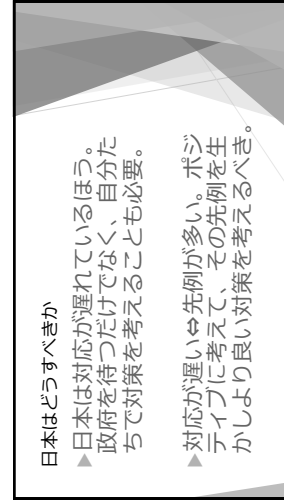
Slide 6 has a background image of a group of people. The title is "海外の取り組み". The table provides details on the California Transparency in Supply Chains Act.

法の名前(国、地域名)	施行年	概要	ベンチャー
サブライチエー ンの透明性に 関する法律 (カリフォルニア州)	2012 年	対象:カリフォルニアで事業を行つ、売上げ1億\$以上の企業など 人権についての取り組みの 情報開示(ホームページ上) など	

6



7



8



9

カテゴリ「東アジアの国独自の問題」

一帯一路の内外
～日本はどう対応すべきか～

AICH GLOBAL HIGH SCHOOL アジア研究 豊加県立時習館高等学校 JISHUKAN HIGH SCHOOL

1

そもそも一帯一路って？

中国が提唱する
途上国向けの
インフラ整備プロジェクト！

147か国と32国際組織が協力文書に調印
※2022/1/20時点 中国発表

AICH GLOBAL HIGH SCHOOL アジア研究 豊加県立時習館高等学校 JISHUKAN HIGH SCHOOL

2

クアッド QUAD 日米豪印

対中国の包囲網を構築するために、民主主義の価値を共有する大国で経済安全保障を中心に協力を拡大させる。

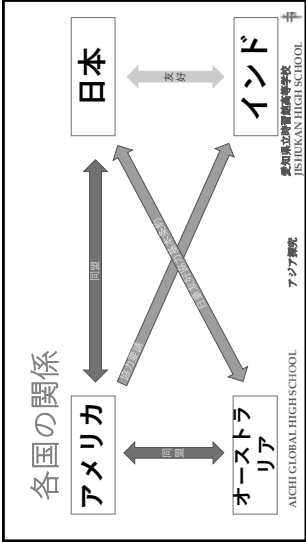
「自由で開かれたインド太平洋」の実現を目指している。

- ・日豪印首相の共同声明

東・南シナ海を含む海洋秩序への挑戦に対抗する
インド太平洋の安全と繁栄のため、ルールに基づく秩序を維持する

AICH GLOBAL HIGH SCHOOL アジア研究 豊加県立時習館高等学校 JISHUKAN HIGH SCHOOL

3



4

アメリカの対中感情

民主主義vs社会主義
・人権問題
・利権問題

経済面
・対中東での共同

ウイグルを開放しろ！
香港をどうする気だ！
台湾を認めろ！

AICH GLOBAL HIGH SCHOOL アジア研究 豊加県立時習館高等学校 JISHUKAN HIGH SCHOOL

5

中国の対米感情

民主主義vs社会主義
・利権問題
・欧米への侵略者意識

経済面
・対中東での共同

AICH GLOBAL HIGH SCHOOL アジア研究 豊加県立時習館高等学校 JISHUKAN HIGH SCHOOL

6

アメリカの危惧する
「デジタルシルクロード」

- ・通信設備、IoT、電子商取引を、中国規格で広めていこうという構想

<実例>

- ・「アリババ」による「デジタルフリートレードゾーン」
- ・「北斗衛星」の打ち上げ

AICH GLOBAL HIGH SCHOOL アジア研究 豊加県立時習館高等学校 JISHUKAN HIGH SCHOOL

7

「デジタルシルクロード」について

- ・GAFAsの寡占解消に期待
- ・発展途上国へのIT普及に貢献
- ・優秀な技術の普及

第二のGAFAsになリかねない
・中国に個人情報が出回る？
・GAFAsとの互換性に不安

ファーウェイのスマホには個人情報漏れを出す機能があるッ！

AICH GLOBAL HIGH SCHOOL アジア研究 豊加県立時習館高等学校 JISHUKAN HIGH SCHOOL

8

トピック：発展途上国には一帯一路が魅力的！？

- ・発展途上国にとっては、環境問題などの理想を語るヨーロッパよりも、金を出す中国のほうが魅力的なのかもしれない

AICH GLOBAL HIGH SCHOOL アジア研究 豊加県立時習館高等学校 JISHUKAN HIGH SCHOOL

9



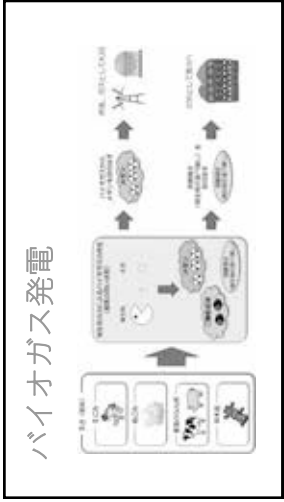
1



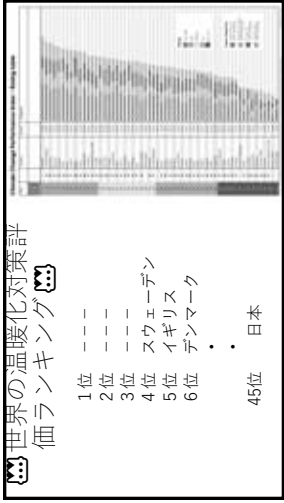
2



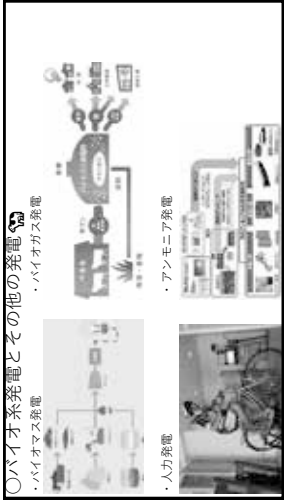
4



7



3



6

今の再生可能エネルギーの問題点

- ・天候に左右されやすい
- ・導入に手間やお金がかかる
- ・施設の整備にコストがかかる
- ・日本の地形上難しい

日本の電力を支えることは難しい

9

～バイオガス発電のメリット～

- ・家畜の糞尿から出るメタンガスを削減
- ・ゴミの量が減る
- ・二酸化炭素をほとんど排出しない

牛発電が未来を担う?!

実用化が実現!!

8

カテゴリ「インド経済」

「表面上のインドの経済発展と 好転しない現状」



ARCH GLOBAL HIGH SCHOOL アーチ高校
愛知県立清洲高等学校
BUTSUKAN HIGH SCHOOL

1

Q.なぜインドでIT産業が発展したのか?
A.「2000年問題」により欧米でIT人材が必要になったため。

Q.なぜインドの人々に?

A.・人件費が安い

・英語が話せる

・若い理系人材が多い(コンピュータの知識のある)など

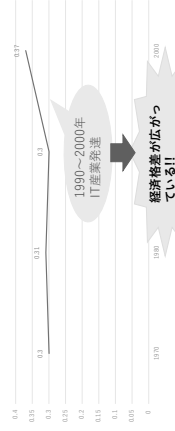
⇒インドは豊かな国家になっているように見える

しかし、国民一人一人に注目すると...



2

インド所得 ジニ係数



4

都市部
→高所得層が多いので教育を受けやすい
実際に上級中等教育を修了している世帯主の割合が10～20%

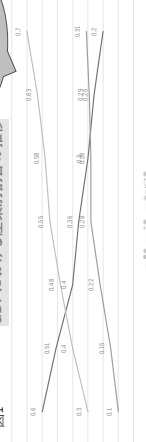
農村部
→低所得層が多く教育を受けにくい
上級中等教育を修了している世帯主の割合は2～5%

↑
インドの所得格差の原因の一つは『**教育**』にある

5

～職業の種類～

図1 GDPにおける産業別割合の推移

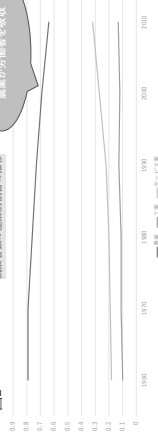


農業のGDPが低い

7

図2

図2 国民平均の所得格差の推移



→教育水準の低さが原因

8

インドの所得

平均年収

約180万円(約116万ルピー)

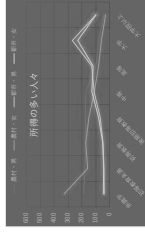
ソフトウェア開発エンジニア平均年収

300万～600万円(約193万～388万ルピー)

※年収1000万円(約646万ルピー)を超える人も少なくない!!



支出階層別教育



6

まとめ

・インドで生まれる格差の要因
⇒十分な教育を受けられるかどうか、と考えられる。

原因としては...

1. 所得による格差

2. 性別による格差

3. 生活環境による格差

⇒就職が困難!!

現状を変えるためには、教育水準を上げるべきと考えた。

また、海外で働くための選抜整備をインド政府に期待したい。

9

「国際探究」グループ研究報告書 提出用

所属	1 班 別荘
研究テーマ	女性も生きたい社会がこれ
キーワード	家庭
	関連するSDG 5

【序論】ジェンダー平等を実現するために、女性も生きたい社会がこれが必要だと考えた。家庭面に着目して男女間の意識の違いを調べると、男女が協力し合える社会を目指す

【研究方法】論文、アンケート（晴智館高校2年生）、インターネット

【本論】1. 日本の家事に関する男女の差
 ・「男は仕事、女は家庭」という性別役割意識は改善傾向にある。
 実際は若い世代において「仕事」と「家庭生活」をともに優先したいという男性が多くなっている。しかし、現実の優先度は「仕事」を優先しているという人が約半分以上を占めている。
 ⇒意識は改善傾向にあるが、実際に行動できていない

・日本、70%以上の労働者の1週間の家事時間に2.2、アメリカやオーストラリアは男女共に5〜10時間未満であるのに対し、日本は男性が5時間未満が割と女性に6割の人が20時間以上である。
 ⇒同じ70%以上でも日本は男女差が大きい。日本の仕事の多さが、男性の家事参加を妨げているのではない。

2. 夫婦で協力して家事を行うには
 男性だけでなく、女性だけでなく家事を行うべきではない。夫婦で協力して家事を行うのが「ジェンダー平等」に必要だと考えた。

このことを提案する

＜Home School＞（家事教室）
 月に1回、掃除、料理、洗濯など毎日違うテーマで行う
 夫婦で共に参加してもらう

SNSで教室の様子を一部配信＆家事のコツなどを定期的に配信
 #Home School を使って感想や要望を募集

＜目的＞夫婦で協力して家事を行うために、家事に能力を伸ばす機会をつくる
 ＜メリット＞実際にやる機会をつくる→夫婦が一緒に実践できる
 家事について考えを共有できる

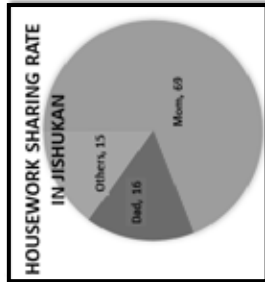
＜課題＞家事に興味のない人に参加してもらう必要がある
 【結論】家事に能力を伸ばす機会をつくることで意識が上がり、実際に行動へと移すことができる。
 身近なところから意識を高め、増やすことで男女関係は親も平等に暮らせる社会に近づける。

【参考文献】
https://www.city.toyohashi.lg.jp/seisaku/60242/pal_moushi023.pdf
 調査の経緯
 2015年11月～2016年1月 調査期間
 市井 晴子 家事と仕事に関する意識の調査
https://www.city.toyohashi.lg.jp/seisaku/60242/pal_moushi023.pdf
 市井 晴子 家事と仕事に関する意識の調査

Welcome to our

"Home School"

GROUP 1



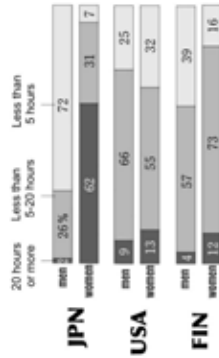
The results of 145 students



MEN'S FULL-TIME JOB

But men in other countries are doing more housework

1 week housework time of full-time workers



Suggestion

To do housework as a couple

Home School

It is held once a month

You can learn about housework

Cleaning

Cooking

Doing the Laundry



#Home School

Conclusion

- Creating opportunities helps men take action
- If we can change the situation, we will be able to make a livable society for all

Advantage

- Can create opportunity
- to do housework
- to think about housework

Problem

- Participants are already interested in housework

Reference

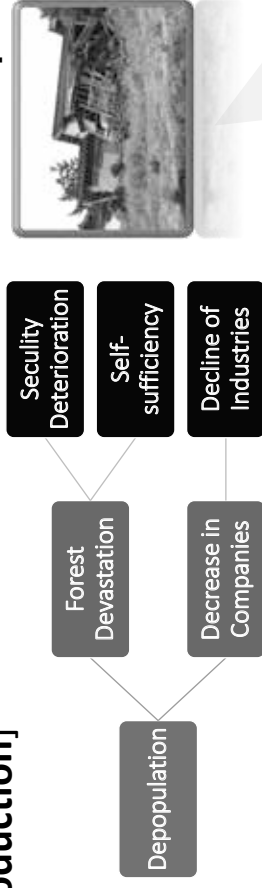
http://www.city.toyohashi.lg.jp/seisaku/60242/pal_moushi023.pdf
https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/index.html
<https://www.rnh.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20151201/5.pdf>
 鎌倉田聡子 エンターと仕事-欧米諸国との比較から見るこれからの働き方-
 永井晴子 家事と仕事をめぐる夫婦の関係
 村田ひろ子/家族学 家庭生活の満足度は、家事の分担率次第?

期号	16	班	期号
研究テーマ	住み続けられる地域づくりをするためには多様な課題を地域で活用できる地域活性化の方法を模索すること。		
キーワード	地域活性化		
1. 序論	私たちの住む愛知県東三河地方には過疎化により生活に不自由な地域があることを知った。そこで、それらを解決するために日本国内外の様々な地域での事例を調べ、多様な課題を過疎地域で活用できる地域活性化の方法を提唱したい。		
2. 方法	書籍、論文、インターネット、新聞		
3. 結果、考察	① 過疎化の現状と課題 産業競争力の低下 山林荒廃で治安悪化 食料自給率の低下 ② 諸課題を解決するための取り組み ＜1. 生活スタイル＞ 都市の人々とのマッチング AI農業と何か ・ボランティア ・企業進出 ↳ 過疎地域に最適な仕事があること ・アットホーム ・資源の保存 を説明 ↳ QOLの向上 AI農業の現状 ↳ 住みたいと思うまちになる ↳ 使用例やどのように行われているかを調べる ＜2. 農業＞ ＜3. 地域医療＞ 現状：無医地区数633地区 無医地区人口224万人 ↳ ふるさと納税 → 病院や救急搬送に時間がかかる ↳ 地域での見守りや緊急時対応金を和め 対策：入居地域医療拠点病院群 7つあり「関係人口を増やす、ドクター・NPO及び防衛ヘリ ↳ ニー7な売り込み ↳ 事例を調べる中で見つけた奇想天外な地域PRを紹介... → インタビュー 無医地区医療を... 地域PRを紹介... 可能性を作る。		
4. 結論	今の東三河に必要な地域医療「地域PR」だと考える。 このように他地域でも同様に対応できる。		
5. 参考文献	朝日新聞 (6月21日朝刊) 内閣官房、内閣府 https://www.chihou.go.jp/sousei AI農業への道		

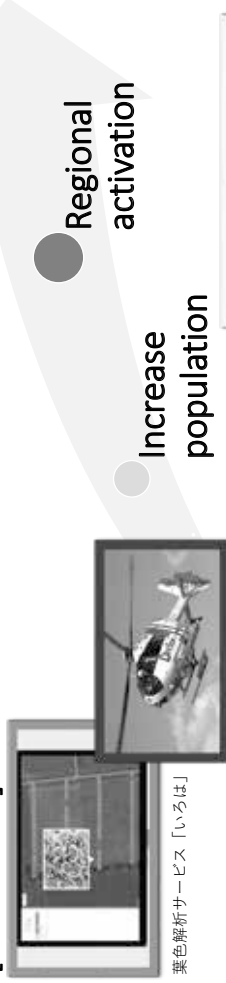
Make Our Community!

Group 16

[Introduction]



[Solutions]



Regional activation

Increase population

1. Improving quality of life

- Volunteer, expanding business

2. AI Agriculture

- Agriculture using IoT
- Example of active AI

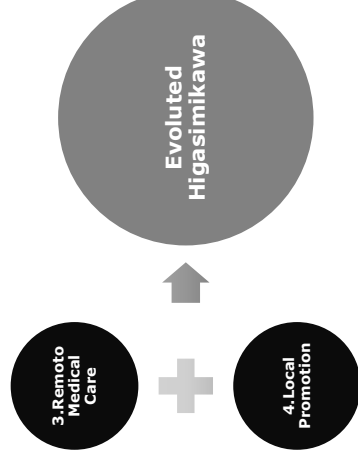
3. Remote Medical Care

- Regional cooperation in medical care

4. Local Promotion

- "Furusato Nozei" donation program

[Conclusion]



[References]

Asahi newspaper (2021.6.27) 内閣官房、内閣府 <http://www.chihou.go.jp/sousei> AI農業への道

期号	22	班	第14
研究テーマ	サンゴの保護		
キーワード	サンゴ	環境	14

サンゴ礁は全海洋のたった0.2%でありながら、海洋生物の1/4~1/3の種が生息している。しかし国内最大のサンゴ礁である石垣島と西表島の間に広がる石西礁湖において2016年にはサンゴの50%が白化により死滅していることが分かっている。

まずサンゴの海洋の環境や観光業への役割について紹介する。

- ① 海の生物50万種のうち1/4~1/3はサンゴ礁に住んでいる
- ② サンゴに住む褐虫藻が光合成を行い、水中の二酸化炭素の濃度を下げる
- ③ サンゴの外観は観光資源として有用である

これらの役割から、サンゴは人々に漁業や観光により経済的な効果をもたらしていることが分かる。その一方で、人々がサンゴの生存を脅かしていることが、その原因として次のことが挙げられる。

- ① 生活排水を直接河川や海に流すことによるサンゴが棲む海の水質汚濁
- ② 国土開発による海洋への流出、サンゴへの堆積
- ③ 国土人間の活動や地球温暖化による水温上昇
- ④ サンゴを食す天敵のオニヒトデの大量発生

このようにサンゴへの影響の多くは人間が原因であり、人々の行動を見つめ直す必要があることが分かる。

具体的にはサンゴ礁への保全活動として以下に分けられる。

- ① 意識向上のための活動
 - ・サンゴ礁保全のための研修会やタレント業者や有識者との学習会、全国事例の視察
 - ・全国現状を把握する活動
 - ・リーフチェックや赤土の流入等陸域からの負荷の監視、漁場の監視
- ② 保全活動
 - ・オニヒトデの駆除やサンゴの移植、ウミガキの産卵場保護
 - ・ビーチクリーン、マングローブの保全
- ③ 普及啓発活動
 - ・活動の広報や環境・体験学習の実施、地域や一般市民との連携

参考にした文献は、水産庁「サンゴ礁の動向と現状」、三菱商事「サンゴ礁保全プロジェクト」、気候変動適応情報プラットフォーム「千年サンゴ」

「千年サンゴ」、上村真仁「サンゴ礁保全を核とした地域づくりの展開」(論文)

Group 22



Coral Protection

Introduction

Coral reefs account for 0.2% of the world's ocean floor. They have a lot of following advantages.

- ・ habitat for 30% of sea creatures
- ・ absorbing CO₂
- ・ natural breakwater
- ・ tourism resources

Coral reefs bring financial benefits to people!
We should protect corals!



Crown-of-thorns starfish (Onithitode)

Results and Discussion

Half of the coral in Sekisei Lagoon died in 2016.

causes of coral death

- ・ domestic wastewater
- ・ land development
- ・ rise in the seawater temperature
- ・ outbreak of Crown-of-thorns starfish
- ↳ We have bad effects on corals!

※1

ex. workshops about coral



Conclusion

We have to do the following:

- ・ activities to raise awareness (※1)
- ・ activities to understand the situation
- ・ conservation activities
- ・ public relations (※2)

※2

Know about coral

Understand coral

Take action!

ex. active learning, cooperation with the general public

References

水産庁「サンゴ礁の動向と現状」

(https://www.ifa.maff.go.jp/j/kakaku/tametekai/kaisei/moba/sango_genjou/)

三菱商事「サンゴ礁保全プロジェクト」

(<https://www.mitsubishi-corp.com/ja/oa/library/coral/pdf/pr2012-03-all.pdf>)

気候変動適応情報プラットフォーム「千年サンゴ」

(https://adaptation-platform.nies.go.jp/articles/case_study/vol4_tokushima.html)

上村真仁「サンゴ礁保全を核とした地域づくりの展開」

期号	32	班	
期号	学校における男女平等とステレオタイプ		
テーマ	国際探究		

1. 序論

現在、文理選択において、女子が文系を選択する人の割合が低く、理系を選択する人の割合が高い。そのために文系の男子の中には肩身の狭い思いをしている人がいるのではないかと感じる。自分のやりたいことを「女性に数学が苦手」などの固定観念に縛られずに行うにはどうすればよい材料をものに調べた。

2. 研究方法

インターネット、書籍

3. 結果・考察

① 生徒自身が学習に使う教科書に見られるジェンダーバイアス → 偏見・行動規範の形成

・物語の登場人物の性別

・約7割が男性、約2割が女性、約1割が不明

・人種・年代・国籍

・「おたく」「おたく」「おたく」

・男性 → 102種類、女性 → 67種類

② 企業における女性の参画

・管理職・職業従事者における女性の割合 → 14.9%

・男性雇用者の割合 (15~64歳) → 男性 → 83.8%、女性 → 70.6% (令和1年)

・男女賃金格差の割合 → 男性 → 12.65%、女性 → 81.6% (令和2年)

③ マスコミが交感日記を回す

・「女性に数学が苦手」は世間的にあり、いくつかの研究から帰属意識を持つようになり、ステレオタイプの影響を縮小できる可能性がある。

4. 結論、展望

学校でジェンダーニュートラル(性別に中立)な表現を使い、マスコミが交感日記を回すことで、学校内での男女のステレオタイプがなくなる程度緩和されるだろう。また、社会全体で企業における女性の参画が進むことで、社会全体の男女平等が促進され、それに伴い、学校内での男女のステレオタイプの緩和も促進されます。

5. 引用・参考文献

・ <https://teachforjapan.org>

・ <https://www.gender.go.jp>

・ 「ステレオタイプの科学」 ノード・スタイル 部：藤原朝子

Gender equality and stereotype in schools

Group32



Introduce

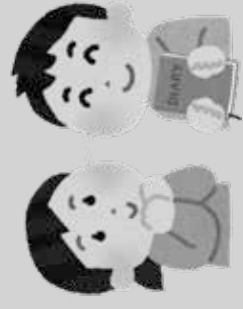
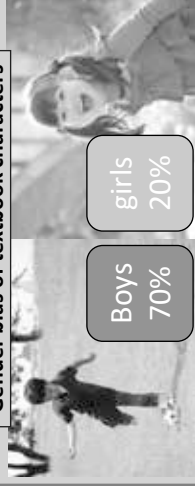
Now, stereotypes narrow down the range of humanities selection.



Data

① gender bias in textbooks ② exchange diary

Gender bias of textbook characters



③ corporate women's participation



Percentage of woman in management positions(R2)



Child-care leave rate(R2)

Daddy 12.65%

Mommy 81.6%

Female employment rate(R2)



82.5%(2018)

Conclusion

If children learn the idea of equality in their school days, gender stereotypes will be eased in society when they grow up.

Suggestion

Use gender-neutral expressions at school. & Run an exchange diary.

References

- ・ <https://teachforjapan.org>
- ・ 01【案】リソース(R2年度雇用均等基本調査)(mhlw.go.jp)
- ・ 「ステレオタイプの科学」 ノード・スタイル 訳：藤原朝子

令和3年度 愛知県立時習館高等学校 3年文型「グローバル社会探究」 個人研究概要報告書					
発表番号	研究名	海外の貧困児童への食糧支援における子どもの食生活の可能性について			
生徒番号		～食事にとどまらない支援を目指して～			
1 背景と目的					
子どもは貧困、途上国を問わず、世界的な問題である。その中でも私が特に深刻だと考えているのは、貧困児童の食糧問題である。ユニセフの「世界子ども白書2019」によると、世界の5歳未満の子どもうち、3人に1人は栄養不足による发育問題を抱え、2人に1人以上が隠れ飢餓と呼ばれる。微量栄養素が不足した状態にある。このような子ども時代栄養不良による問題は子どもの認知能力や健康状態に悪影響を及ぼし、後年における収入の低下や健康状態の低迷と死亡リスクの上昇を招いてしまうため、結果として貧困の連鎖から抜け出せなくなってしまうのだ。私はこのような貧困児童の食糧問題を解決する方法として、近年日本でも注目されている「子ども食堂」に焦点を当てた。海外の貧困児童に向けて子ども食堂を導入することで、子どもたちの栄養状態が改善され、また従来の食糧支援にはない、子どもたちの社会性を身につける場としての役割も期待出来ると考えた。本研究の目的は、子ども食堂を海外に導入することの有用性を考えることである。					
2 観点と方法					
本研究のリサーチエグジキュションは、「子ども食堂による食糧支援は、その他の支援方法に比べてどのような点で有用なのか」である。研究に用いた方法は、参考文献にある文献、ユニセフなどが公表している統計資料の主に2つを用いて行った。					
3 結果と考察					
まず、貧困児童の食糧支援において、子ども食堂とその他の支援の違いを明らかにした。その他の支援方法は主に3つ取り上げた。1つ目は国連WFPが行っている「学校給食プログラム」だ。この方法は、学校で子どもたちの学びの機会を広げ、給食で栄養のある食事を提供する手法だ。2つ目は、栄養不良に陥っている子どもたちの親に栄養や健康に関する知識を伝えて家庭の衛生環境の改善を後押しする方法だ。3つ目は、子どもの健康検査と栄養治療だ。一方で、子ども食堂はどのような支援方法なのか。子ども食堂は、子どもが一人でも行ける無料または定額の食堂、と定義されている。また栄養師の高い食事を提供するだけでなく、社会性を身につける場としての役割もあるとされる。実際に子ども食堂で行われた実験は、子どもたちは食事を通して時間を守ることやマナーを学んでいた。また、年長者が年少者にルールを教えることで、年少者が年長者を見取うことを覚え、社会性を身につけていったということが明らかにしている。以上のことから、子ども食堂とその他の支援のちがいは、社会性を身につける場になるかどうかであると考えられる。					
4 結論と今後の展望					
子ども食堂が社会性を身につける場となることは、子どもにどのような効果をもたらすのか。私は大きく2つあると考えた。1つ目は子どもが将来自立するときに役立つことだ。子ども時代に身につけた習慣は大人になったときの生活に大きな影響を及ぼすためである。2つ目はそのような場は子どもたちの精神安定に効果的だということだ。インドのNGO施設で行われた調査によると、ストリートチルドレンや児童労働経験者は自分の将来に關して後ろ向きになりがちだという。一方で、生活環境の安全や長期的で安定した友人の有無が青年期の心理安定に及ぼす影響が大きいことも明らかにしている。したがって、子どもたちが子ども食堂で、同年代の仲間と社会性を身につける過程で友人関係を築いていくことで、将来に対して前向きになることができると考えられる。以上のことから、海外で子ども食堂を導入することは、栄養のある食事を提供できるだけでなく、社会性を身につけるという面でも有用であると考ええる。					
5 引用・参考文献					
佐藤由美子、子どもの社会性を育む場としての「子ども食堂の可能性」 伊藤文香、幼少期に親元を離れた子どもたちの社会参加へのプロセス ユニセフ、世界子ども白書2019 NPO法人全国子ども食堂支援センター・ホームベージ 世界の食料安全保障と栄養の現状2019報告					

令和3年度 愛知県立時習館高等学校 3年文型「グローバル社会探究」 個人研究概要報告書					
発表番号	研究名	誦誦中傷を防ぐための情報教育について			
生徒番号		～インターネット機器の利用状況と加害者の心理プロセスから～			
1 背景と目的					
最近、誦誦中傷という言葉は新聞やテレビによく耳にする。特にネットのSNS機能を通して起こる誦誦中傷の被害が原因で、多くの人が傷つけられ人生が一変した人もいる。この状況を改善するため、私は情報教育に着目した。情報教育とは、情報についての知識や正しい活用方法を学ぶものだ。ネット機器が広く普及し、連絡手段として不可欠になっている現代の社会において、欠かせないものと言える。ここで、誦誦中傷とは根拠のない悪口で相手を傷つけることであり、本研究ではネットを通してものをさす。法務省によると、誦誦中傷の相談件数は増加傾向にあり、令和元年度の相談件数は9年前と比べて約4倍に増加している。また、この問題が増大している理由の一つとして、匿名性が挙げられる。匿名性はプライバシーを保障することができるというメリットがある一方で、誦誦中傷を助長する原因にもなっている。このような現状を受けて、情報教育の見直しと再考察は必要なのではないかと考えた。現代の社会に見合った情報教育を導き出すことを目標に、本研究を進めていく。					
2 観点と方法					
本校の生徒約100人にアンケートを実施し、ネット機器の利用状況と誦誦中傷の関連性を見出す。合わせて、複数の論文と文献から誦誦中傷の加害行動に至るまでの心理プロセスを調べ、新たな情報教育について考察する。					
3 結果と考察					
アンケートでは、ネット機器の一日の平均利用時間、最もよく使うアプリ、誦誦中傷を見たことがあるか、あるならばどのアプリで見たか、という質問をした。誦誦中傷を見たことがあるかという質問では、利用時間が長いほど見たことがあると答えた人の割合が高かった。また、全体を通して誦誦中傷はYouTubeでの目撃が多く、利用時間が長いほど最もよく使うアプリがYouTubeと答えた人の割合が高かった。これらから、ネット機器の利用時間と誦誦中傷を目にする回数には比例関係があり、それは誦誦中傷への慣れを拡大させているのではないかと考えた。次に①の加害経験のある学生を対象とした調査から、学校内のストレスがネットの過剰利用につながるという過程が確認された。多くの学生がスマホを所持する中で、現実逃避のためにネットを利用する人が多いと考える。また②から、情報社会が進みネット被害者が高まっていることもわかった。SNS上で誦誦中傷をされ傷ついたとしても、また誦誦中傷を実際に見たとしても、解決しようと考えている人が減っていると考えられる。以上から誦誦中傷に対してネットの過剰利用により許容的認知が拡大し、ネット被害者により問題意識が低くなっていることがわかった。					
4 結論と今後の展望					
研究結果から、私は誦誦中傷への許容的認知を減らすことと、ネットの過剰利用を防ぐことを目的とした情報教育が必要だと考える。SNS上の問題を罰する法整備も進められているが、前述のように誦誦中傷には匿名性があり、また被害者が高まっていることから、根本的に誦誦中傷を減らすためには情報教育が必要だ。具体的には、ネットの過剰利用に伴う健康被害や正しい利用方法を教え、ネットの過剰利用を防ぐ。さらに、これまで実際にあった被害例を示し誦誦中傷の恐ろしさやSNSを通して発言の影響力の大きさを伝え、自分の発言に責任を持った行動を心がけることを教える。本研究を通して、なぜこれほど誦誦中傷が広がったのかという疑問が浮かんだ。また、加害者の心理プロセスから見ると誦誦中傷を減らす方法を考えたが、深く調べることができなかった。私は大学で教育心理学を学びたいと考えているので、この問題について大学での学びをもとにさらに突き詰めていきたい。					
5 引用・参考文献					
① ネットいじめの加害行動に至る心理プロセス 筑波大学 ② インターネット利用における不快・恐怖体験に関する調査研究 弘前大学 令和元年度インターネットの違法・有害情報対応相談業務等請負業務報告書 インターネット上の誦誦中傷はなぜ起こる？なくならない理由と対策について解説あまた法律事務所 文部科学省「教育の情報化に関する手引」検討案第4章情報教育					

令和3年度 愛知県立時習館高等学校 3年文型「グローバル社会探究」 個人研究概要報告書			
発表番号		研究名	ディズニー映画が与えた異文化理解に関する影響について
生徒番号			～アニメ版『アラジン』と実写版『アラジン』の考察から～
1 背景と目的			
ウォルト・ディズニー・カンパニー(以下、ディズニー社とする。)が提供するエンターテインメントは今や様々なバックグラウンドを持つ老若男女を惹きつける。その中でも近年のディズニー映画の成功は著しいものである。しかしディズニー社の根幹にあるものはアメリカ至上主義的考えであり、自国の普遍性を他に押し付けているのではないかと批判されてきた。そこで、ディズニー映画が題材とした地域やキャラクターに投影した男女性像がその当事者の生き方を窮屈にさせているのではないかと問題を考えて。この問題の内幕、ディズニー社の対応を考えると、人々が自分自身や文化がアメリカ的観点によって作られてきた固定観念で縛る、縛られて生きることから脱却し、他者を適切に解釈して認め合うようになることを目的とする。			
2 観点と方法			
ディズニー社は1992年と2019年の映画『アラジン』を通してアメリカにとどっての異文化、他者どう描いたのかを映画自体の考察、文献調査で明らかにする。			
3 結果と考察			
まず舞台の地から考える。原作『千夜一夜物語』よりイラクのバグダードが想定されるが、アニメ版ではインド、トルコ、イランを混ぜており一概にアラブとは言えない。これは80年代のイラン・イラク戦争でアメリカはイラクを支援し、その政治的背景を考慮したと思われるが、ディズニーが「アラビア」として提示した世界がインドなどを指すことは誤ったイメージを与えただろう。更に劇中歌では、その地を「barbaric(野蛮な)」と表しており、批判の対象となった。実写版では舞台をシロクロードとし、多様な人種や文化を正当化した。次にキャラクターの設定である。アニメ版ではヒロインで16歳のジャスミンは、児童婚を連想させる、自分の父親と同年齢ほどの男性との結婚を迫られるが、彼女は結婚相手を自分で選ぶことを望む。この保守的な態度は80年代のレーガンズムを受けた保守的フェミニズムの現れとも言われる。実写版での彼女は女王になると望み、達成する。更に彼女が歌う「Fearless」には「better seen and not heard」とあり、行動ではなく見た目で評価されるルッキズムの現状にも言及する。女性の性的搾取に反対し、性別に囚われた考えから脱しようとする第4波フェミニズムを反映している。			
4 結論と今後の展望			
アニメ版と実写版を比較し、その27年間でハリウッドの流れを汲み、時代に配慮した作品へと変化した。先に述べたイスラーム圏に対する偏見の払拭、フェミニズム、ルッキズムだけでなくホワイトウォッシュに反抗した配役、バックグラウンドの多様なキャスト、とあらゆる努力がみられた。ただ、映画として成り立たせる中でフィクション部分を否定し、人権団体への配慮か、過激なまでの現実路線に走ることはおとぎ話の特性を失わせた。アニメ版が「アメリカ人のアメリカ人によるアメリカ人のためのアラジン」に感じられたが、配慮を重ねた実写版には違和感を覚えた。映画などエンターテインメントに「作られたもの」として守られ、発展されていくにあたって我々に求められているのはフィクションをフィクションとして楽しむリテラシーではないだろうか。ディズニーで学んでいく子供たちや、固定観念に影響されやすい人達には啓蒙を併ってメディアを共有すべきである。			
5 引用・参考文献			
上瀬由美子・佐々木優子(2016). デ「バニ」アニメ映画にみるジェンダー表現の変容, 立正大学心理学研究年報(7), 13-23 李修京・高橋理美(2011). デ「バニ」映画のアラビヤ物語に関する考察, 東京学芸大学紀要人文社会科学系, 1, 42, 87-122 萩上チキ(2014). ディズニープリンセスと幸せの法則, 星海社 有賀夏紀(2010). 7/11・7/12に公開の現在一第3弾アラジンなどの、アラビヤ・ジェンダー史研究入門, 289-317, 青木書店 森本翔子(2015). デ「バニ」長編アニメーション作品におけるアラビヤ像, 表現文化 (9), 114-139			

令和3年度 愛知県立時習館高等学校 3年文型「グローバル社会探究」 個人研究概要報告書			
発表番号		研究名	学校教育における動物介在活動について
生徒番号			～学生の自己肯定感の向上のために～
1 背景と目的			
最近、「日本人の自己肯定感は諸外国に比べて低い」という報道をよく耳にする。実際に、内閣府(2019)によると「自分自身に満足しているか。」という質問に対して、肯定的な返答をした者が、アメリカ、イギリス、フランスなどが80%を超えているのに対し、日本では45.1%と非常に低い結果を示しており、自己肯定感を高めることは、教育政策上の課題ともなっている。 では、自己肯定感とはどのようなに得られるのだろうか。そもそも自己肯定感とは、「ありのままの自分を認め、自己の否定的な側面を含めて自分が自分であっても大丈夫という感覚」のことだ。これは主に家族や友人、教師など(特に親)との関わりの中で形成される。家庭内での影響が大きいといえるが、私は、これを学校教育活動の中で少しでも高められないかと考えた。 家庭や学校での「人」の行動を変化させるのは難しいと考えられるため、第三者である動物との関わりの中で、自己肯定感を少しでも上げられる方法を探る。			
2 観点と方法			
動物介在活動(AAA：動物とふれあうこと)による情緒的な安定、レクリエーション・001の向上等を主な目的としたふれあい活動)を学校に導入することにより、学生の自己肯定感が向上するの。また、そのための方法を文献・論文を元に考察する。			
3 結果と考察			
まず、AAAは、アニマルセラピー(動物を使ったセラピー手法)の一環である。このアニマルセラピーの効果として、「自尊心・有用感・達成感・責任感などの肯定的感情、心理的自立を促す」「親密な感情、無条件の許容、他者に受け入れられている感じの促進」がある(中川, 2008)。このことから、AAAを学校教育に取り入れることは、学生の自己肯定感の向上に効果があると考えられる。 ではどのように教育にAAAを取り入れるのか。日本では、約9割の小学校で小動物を飼育している。しかし、適切な飼育が行われていない、もしくはその効果を十分引き出せていない学校も多い。そのため、AAAに精通する人が、施設等で適切に飼育し、学校に向く形でAAAを行う必要があると考える。 また、中川によると「自分への肯定感・自尊心を培う」効果は、特定の動物をある期間飼育して、動物への愛着を培った場合に得られるとある。したがって、学生は、継続的に同じ動物と触れ合い、世話をする経験が必要となる。そのために、授業の一環としてAAAを行うなど、時間を確保してAAAを行うべきだと考えた。			
4 結論と今後の展望			
以上のことから、学生の自己肯定感を高めるために、AAAを、授業の一環として、アニマルセラピストなどに委託する形で、学校教育に取り入れられると良いと考えた。これにより、動物を適切に飼育できる上に、AAAによる効果も最大限引き出すことができる。その上、アニマルセラピーは、自己肯定感を高める他にも生理的、心理的、社会的の3つの側面に対して効果があり、リラックス効果や協調関係を築くなどの様々な良い影響を及ぼすことが期待される。 一方、アニマルセラピストの人件費、子ども動物アレルギー問題など、解決しなければならない様々な問題がある。そして、どの種類の動物を用いるかも非常に重要な問題となるだろう。まずは小規模な学校から、少しずつ導入していき、学生の自己肯定感の向上、そして学校生活がより良いものとなっていくことを願っている。			
5 引用・参考文献			
小学校における動物飼育活用教育の効果とあり方と支援システムについて 中川美穂子 2008 内閣府 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査(平成30年度) https://www.coo.go.jp 子どもの発達と動物との関わりー動物介在教育の展望ー 藤田久美子 2013 子どもの自尊感情・自己肯定感等についての定義及び尺度に関する文献検討 田島賢侍 他 2012 学校での動物飼育の適切な場合が児童の心理的発達に与える影響 中島由佳 他 2010			

参加者No.	6	氏名	カルチャーショックの影響と予防対策
探究テーマ (文章にしない)			
1. はじめに (研究の動機・目的など)			
私がカルチャーショックについて調べようと思ったきっかけは、私が中学2年生の時に、父がアメリカへ出張に行ったことです。その時、父から、「文化や言葉が違う地域や人と一緒に生活するのは心も体も疲れる」ということを聞きました。実際、父は疲れているように見えたり、顔色もあまり良くありませんでした。そこで僕は、「なぜ文化が違う地域や人と生活すると疲れてしまうのか」「その疲労をなくすためにはどうすればいいのか」ということに疑問を感じようになりました。そこで、今回、文化の違いによって起こるカルチャーショックの影響と予防対策について調べました。ここでは、具体的な国家間でどのようなカルチャーショックが起きているのか、カルチャーショックの具体例、過程、影響・予防対策について説明します。			
2. 方法			
・インターネットや本を用いる。 ・カルチャーショックと言っても漠然としているため、具体的な国家は日本とアメリカ、文化の違いについては食文化に限定する。 ・アメリカと日本の食文化の違いについて調べ、文化の違いの要因を探る。 ・カルチャーショックの具体例、過程、影響・予防対策について調べる。			
3. 現時点での結果と考察			
【日本とアメリカの食文化の違い】 日本：自然を重んじ、季節のものをより食べることが多く、素材の味を生かした料理が多い。 →自然豊かであることや仏教の教えなどが影響している。 アメリカ：カロリーが高く、味が濃いことに加え、加工食品や冷凍食品が発達している。 →多民族国家であることや国土面積が広いことなどが影響している。 【カルチャーショックの例】 日本→アメリカ：食事が多い、家でも土足、商品を買う前に食べることがある、チップの習慣がある、ハグやキスが普通、鼻をすすすてはいけない、アメリカ人がとてもフレンドリー など アメリカ→日本：チップの習慣がない、箸が使えない、緊急地震速報に驚く、車のハンドルが右にある、日本人がフレンドリーでない、電車が定時に来る など 【カルチャーショックの過程】 カルチャーショックにはハネムーン期、カルチャーショック期、回復期、適応期がある。 カルチャーショック期を乗り越えれば回復・適応期に向かっていくが、逆カルチャーショックもある。 【カルチャーショックの影響】 主な症状は、混乱、孤立、倦怠感、焦り、不安、うつ病、摂食障害、引きこもり、対人恐怖症など。 その国に対して嫌悪感を抱いたり、批判を初めてしまったりすることもある。 【カルチャーショックの予防対策】 1. 行き先の国について調べる。 2. 自分の価値観で物事を見ないようにすること。 3. 文化の違いを悲観的に捉えないこと。 4. 社会・地域活動に参加し、人脈を作ること 5. 健康的な生活を心がけること。			
4. 現時点でのまとめと今後の展望			
日本とアメリカとの食文化の違いを調べて、食文化形成には、気候や宗教、民族、国土面積などが関係していることが分かった。そして、カルチャーショックはかなり重い症状を発症することもあることに驚いた。カルチャーショックを防ぐためにはまず自分の文化の固定概念に縛られないことが大切だと思った。			
参考文献等			
・オリブマイルとまわし (2020) ～アメリカと日本、食事の違いはここにあった！歴史や食文化を紹介～https://www.olivemile.com/column/2020/04/post-4738.html ・エリク・アラン・ワグネル、江原真一 (編訳) (2020) 「ヨーロッパ・カルチャーショック」 国内ビジネス研究センター - 54～65 ページ ・留学ジャーナル (2020) ～カルチャーショックを受けた時の対処法！海外留学中の具体例を徹底解説～https://www.rysgaku.co.jp/column/71.html ・海外でのカルチャーショック！日本との文化はこう違う！ https://www.google.co.jp/img/mtatsh.jp/boards/7258.mp/			

Impact Culture Shock & Preventive Measures

No.6

What is important to communicate with different cultures?



1 Differences of food culture

- Respect for nature
 - Eat a lot of seasonal foods
 - Use the original taste
 - High in calories
 - Strong taste
 - Frozen and processed food
- Food culture is...
Affected by climate, religion, and land area etc...

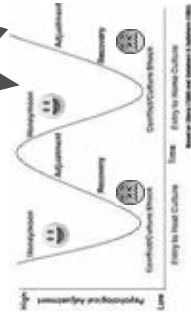
2 Examples of culture shock

- Large amounts of food
- Have a tipping habit
- Living with shoes at home
- Christianity
- Lack tipping habit
- Difficult to use chopsticks
- Earthquake early warning
- Not friendly people

3 Process of culture shock

1. Honeymoon period
2. Culture shock
3. Recovery
4. Adjustment

Reverse culture shock



4 Prevent culture shock

[Impact of culture shock]
What you have believed in is not accepted
⇨ A lot of issues

1. Research destination
2. Do not judge based on your values
3. Do not be pessimistic
4. To join social activities
5. Try to live a healthy life

References ・オリブマイルとまわし (2020) ～アメリカと日本、食事の違いはここにあった！歴史や食文化を紹介～<https://www.olivemile.com/column/2020/04/post-4738.html>
・エリク・アラン・ワグネル、江原真一 (編訳) (2020) 「ヨーロッパ・カルチャーショック」 国内ビジネス研究センター - 54～65 ページ
・留学ジャーナル (2020) ～カルチャーショックを受けた時の対処法！海外留学中の具体例を徹底解説～<https://www.rysgate.co.jp/column/71.html>
・海外でのカルチャーショック！日本との文化はこう違う！ <https://www.google.co.jp/img/mtatsh.jp/boards/7258.mp/>

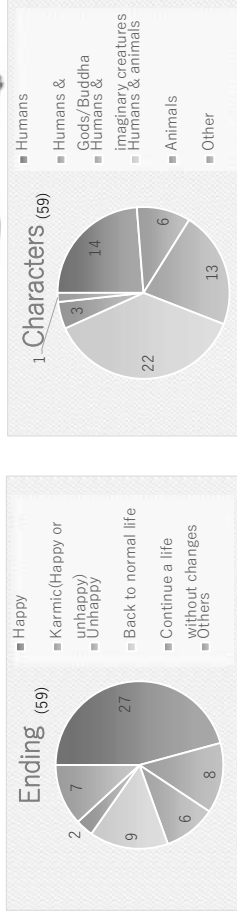
参加者No.	1 2	氏名	
探究テーマ (文章にしない)	日本の昔話		
1. はじめに (研究の動機・目的など) 幼い頃によく読んでいた日本の昔話の本を見つけた。懐かしくなり開いてみると、楽しい話だけではなく怖い話や、何度も読み返してしまような考えさせられる話があったので興味をもった。 日本人のもつ精神や感性を、昔から語り継がれてきた昔話を通して見つけるため。 2. 方法 ○ 59冊の昔話を読み、内容の傾向をつかむ。(終わり方、登場人物) ○ 考察がされている本やインターネットの情報を読む。 3. 現時点での結果と考察 【終わり方】 幸せに暮らす：27話 / 幸せになる者と不幸になる者に分かれる：8話 / 幸せにならない：6話 / 得た物を失い最初の状態に戻る：9話 / そのままの暮らしが続く：2話 / その他：7話 【動物の有無】 人間だけ：14話 / 人間と神様、仏様：6話 / 人間と架空の生き物：13話 / 人間と動物：22話 / 動物だけ：9話 / その他：1話 【具体的な内容】 「むかしむかし、ある所に……」と始まる。人に親切にするように、正直者であるように教えるものが多い。最後に別れが来ることが多い。「見てはいけない部屋」があり、その中には繊細な美を強調するものがある。そして「見るな」という約束を破った結果、すべて失った無の状態に戻る。無欲を善とする物語が多い。残酷な物語も少なくない。神様が色々な姿で出てくる。 【物語のでき方】 家族や村人の間に家の話、村の話として語り伝えられた話があった。中には中国、インド、ドイツなどから取り入れられた話が加わり、さまざまなタイプの物語へと広がっているものもある。 【外国との比較】 主人公：日本はおじいさんとおばあさん、フランスは王子様であることが多い。 背景：日本は美しい自然に囲まれている。北欧は古代北欧の神話的世界を反映している。 宗教と動物：日本には仏教の影響を受けていて、たぬきやきつねがよく出てくる。西アフリカはイスラム教、サバンナではうさぎ、森林地帯では蜘蛛が出てくる。 4. 現時点でのまとめと今後の展望 日本の昔話の中で森や川が綺麗だったたり、そこにいる動物が人間と仲良くしていたりしていることから、自然を大切にしていると分かる。世の中の森羅万象に神様がいてという考えである「八百万の神」が物語の色々なところに溢れている。戒めとなる物語も印象的である。欲張らないこと、人や物に優しくすることを物語から学ぶことが出来るので子供時に昔話に触れるのは大切だと思った。昔話を読むことは、子供を優しい子に育てるのに良いと思う。日本の昔話をこれからの未来にも受け継いでいきたい。また、多くの日本人が大人になってから昔話をもう一度読んで、人生の中で何を大切にして生きていけばよいのかを考えるきっかけにして欲しい。 参考文献等 川内康範(監修)「まんが日本昔ばなし」童音社 / 菊池勲「養生レポート：日本の伝説精神とは～日本昔話から考へる～」 / https://www.mskj.or.jp/report/2980.html / 河合肇雄 (1982)「昔話と日本人の心」岩波書店 2～32ページ / 稲田浩二(編者代表)「世界昔話ハンドブック」三省堂 / 高木昌史「グリム童話と日本童話」三弥井書店 / 日本民話の会「ガイドブック 世界の民話」講談社 / https://www.sanyo-chemical.co.jp/magazine/archives/2478			

Japanese folk tales

No.12

What are folk tales?

Stories handed down from past to present.
Parents read them to children.



There are many stories...

- Starting with this line, "A long time ago..."
- Teaching us to keep being kind and honest.
 - A farewell at the end of stories.

Unique features of Japanese stories

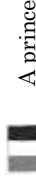
- People are not allowed to see the room.
- Some of the stories are cruel.
- Gods appear in various forms.



《Comparing》

Main character

● An old man & An old woman



Background

● Surrounded by beautiful nature



Others

● Buddhism
Raccoon dogs and foxes



Mythical world

Troll, giant, water spirit, forest spirit

Islam
Savannah: rabbits, forest: spiders



Stories told in families & villages

+

Stories adopted from foreign ones (China, India, Germany)

↓

A lot of Japanese old tales



Japanese people have treasured nature since ancient times.

We should hand down stories to the next generation.



参考文献 川内康範(監修)「まんが日本昔ばなし」童音社 菊池勲「養生レポート 日本」の伝説精神とは～日本昔話から考へる～
<https://www.mskj.or.jp/report/2980.html> 河合肇雄 (1982)「昔話と日本人の心」岩波書店 2～32ページ
稲田浩二(編者代表)「世界昔話ハンドブック」三省堂 高木昌史「グリム童話と日本童話」三弥井書店
日本民話の会「ガイドブック 世界の民話」講談社

参加者No.	23	氏名
研究テーマ (文責にしない)	最新型伝統芸能 ー2年間の研究を通して私が伝えたいことー	
1. はじめに（研究の動機・目的など） 少子高齢化や高齢者不足等の問題により、伝統芸能が途絶えてしまうケースが増えている。そこで、様々な解決策を模索・提案することや、この研究を通して少しでも多くの人に伝統芸能の魅力を知ってもらうことが、今の私にできる伝統芸能保存活動であり、私の人生を変えてくれた伝統芸能に対する恩返しだと考えている。新型コロナウイルスの影響で大多数の伝統芸能が中止になっている今、“伝統芸能が無い”ことの寂しさを多くの伝統芸能関係者が認識した。そんな今だからこそできることがあると思う。 2. 方法 ・伝統芸能保存会、各種研究機関、企業等関係者に取材する ・伝統芸能に参加する ・過去の実施記録や経験を生かす ・論文、書籍、雑誌、新聞、インターネット、TV等を活用する 3. 現時点での結果と考察 ー伝統芸能を守るー ①積極的保存＝伝統芸能を途絶えさせないための活動 ー少子高齢化や後継者不足などの問題がある中でも、伝統芸能を行い続ける <メリット> ・人間同士のコミュニケーションの中で、継承することができる ・無形のまま価値ある伝統芸能を継承できる <デメリット> ・現代社会に適応させるために、伝統芸能を変化・改革させる必要がある（＝最新型伝統芸能の導入） ②消極的保存＝“伝統芸能が存在していた”という事実を恒久に残すための活動 ー伝統芸能が途絶えたとしても、具体的な資料やデータとして後世に残るようにする <メリット> ・価値ある伝統の姿を、変化させることなく後世に伝えることができる ・途絶えた伝統芸能を再開するときの大きな情報源となる <デメリット> ・人間同士のコミュニケーションの中で、継承することができない ・“途絶える”という事実を受け入れられない＝地元住民のつながりが薄れる ・無形のものを有形に変えて保存する必要がある 4. 2年間のまとめと今後の展望 生きていく中で本当に必要なものとは何だろうか。当然食べなければ死んでしまうが、心が死んでしまえば、生きていても意味が無い。伝統芸能のような地域特有の文化、それこそが私たちの心の最後の拠り所になるのではないだろうか。研究をしていく中で、途絶えてしまった伝統芸能の跡地を見る機会があった。数年前までは熱気で満たされていた神聖な場所が、気づいたら廃墟になっている。地元の人々のアイデンティティーに溢れた大切な場所がなくなってしまう。こんなに虚しいことはあるだろうか。 伝統芸能が途絶えることは、関わりのない人からしたら、ただの他人事でしかないだろう。私はそれを変えた。2年間の研究で伝統芸能のためにできたことは微力しかなかったが、伝統芸能を守りたいという強い気持ちを忘れずに、この研究が机上の空論で終わらないよう、今後も伝統芸能保存活動を続けたい。 そして、伝統芸能保存活動の輪を日本中に広げる第一者になりたい。		
参考文献等（敬称略、順不同） ・金子桂寛「地域伝統芸能の保存と発展の可能性」 ・池内克史（2004）「民俗芸能のデジタルアーカイブとロボットによる動作提示」 ・佐々木重洋（2015）「花祭りの発展的継承と地域文化の多様性保全に向けた社シナリオの創出」 など他6件 ・日本芸術文化振興会（おうちで「体感」日本の伝統芸能！） ・東京町役場 振興課 ・説書所歴史資料館 ・山崎喬二（浜田市観光協会）、今泉龍彦（東京町古戸地区 花祭）など他21名		

The latest traditional performing arts

No.23

3. Passive preservation

Tangible Preservation (old-fashioned)

- Exhibition in museums
- Books / photobooks

Digital Archive (new)

- Keeping records with VR
- Motion capture

[Characteristics]

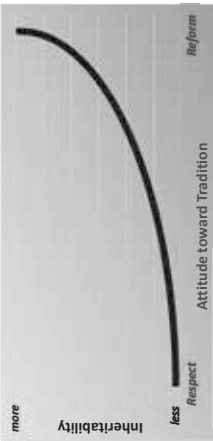
Premised on the Disruption

Inherit Tradition As It Is

Need Tangible Preservation

Useful to Revive If Disrupted

4. My Suggestion



< Hanamatsuri >

・Toei town, Aichi prefecture

Jan.2019



Jan.2022



1. Introduction

*TPA: Traditional Performing Arts

TPA have been passed on for long time.

But...

They are being exposed to risks of extinction.

To improve the situation...

I suggest a new style of TPA.

2. Active preservation

< Iwami Kagura >



Hamada city, Shimane prefecture

[Recent Activities]

Performing Kagura

- In many areas of Japan
- Overseas exhibitions (Over 50 countries)

Holding Events to Experience Kagura

- Appreciation of kagura
- Trying the traditional costumes on

Developing Goods

- Smartphone cases
- Kagura masks

Spreading Information

- Youtube (both in Japanese and in English)

[Characteristics]

Tourism resources

Encourage Preservation

Adapt to Modern Society

Accept Changes

~References~

- Hamada city Tourism Association(Iwami Kagura) - Shinshiro city -Toei town office(Hanamatsuri) -Yoshihito Kaneko, Chikii dentouginau no hazon to hatten
- Chioi Woong, Quantification of Dance Movement by Simultaneous Measurement of Motion Capture and Biophysical Information and dozens of others

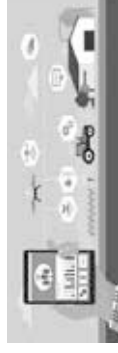
参加者No.	24	氏名
探究テーマ (文章にない)	日本の食料自給率の向上のために	
1. はじめに (研究の動機・目的など) 食料自給率は長年問題視されているにも関わらず、あまり解決されていない。それはなぜなのか疑問に思っている、研究したいと思った。また、その中で解決に繋げることができているものを見つけていきたい。 2. 方法 インターネット、文献 3. 現時点での結果と考察 【原因】 ① 食生活の変化 → 食の欧米化、特に穀物の輸入の増加 ② 農業の衰退 → 農業従事者の高齢化、人材不足 ③ 国土面積の広さ → アメリカやオーストラリアなど、食料自給率が100%を超えている国では、日本の100倍近い国土をもつ ④ 工業の発展 → 工業に力を入れてきたため、食料需要への対応が間に合わなくなった 【外国での対策】 (EU 全体) ・ 共通農業政策 (価格維持) (イギリス) ・ 選択的拡大計画 "Food from Britain" (ドイツ) ・ 環境保護 ・ 積極的な農地の整備 【解決策】 『スマート農業』の導入 スマート農業：ロボット、ICTを活用して、省力化・精密化・高品質生産を実現することが目的 機械を操ることで、手間が減り、少ない人数でもたくさんの農作物を育てることができる。また、機械によって手軽に農業に参加することができれば、若い世代の農家も増えるのではないかと思う。 4. 現時点でのまとめと今後の展望 イギリスもドイツも、食料自給率を自国で何とか解決しようという積極的な姿勢がみられる。このことが、輸入に頼っている日本との差なのかと思った。日本は国土が狭いうえ、森林が7割を占めるので、いかに効率的に作業ができるかが大きな鍵だと思う。よって、私は機械の積極的な導入が解決のための一歩となると考える。今後は、どうスマート農業の認知度を上げていけば良いのか考えていきたい。 参考文献等 農林水産省 HP 食料自給率がわかる事典／生源寺眞一、深光富士男 食料自給率の経済分析／永田智章 食料自給率を考える／山崎亮一 食べ物市場・食料問題大事典 3巻 日本の食料問題／大江正章		

Let's do Smart Farming!!

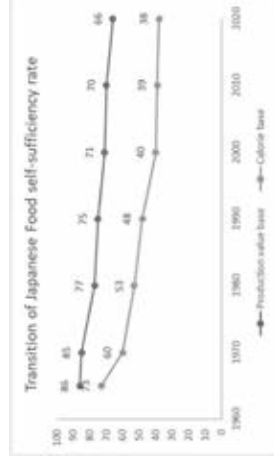
No.24

★What is “Smart Farming”?

⇒ It's an agriculture which uses robots, AI, IoT, etc. and achieves labor saving, precision, and high-quality production.



Current status of Japan



Causes

changing eating habits

land area

Industrial development

positive effect?

Smart Farming overseas

The U.S.: “AgTech”



The Netherlands: “agriport7”



- Spread pesticides appropriately
- Analyze the condition of agricultural land

- Thorough date management
- Keep the ideal environment for crops

Problems

- The machines are expensive
- Difficult for most elderly people

Drones!!!

but

Good points

- It's easy for young people to take up agriculture !!
- Control larger area by oneself !!

資料 6

令和3年度「AGH意識調査」結果

国際的素養（8つの要素[A～H]と質問事項[①～②9]） 数字は8段階評価で、大きい方が高いことを示す	1年		2年		3年	
	6月	2月	6月	2月	6月	11月
A 論理的・批判的思考力	5.3	5.6	5.1	5.5	5.6	5.9
①法則を見出したり、比較したり、関連づけながら体系的に考える。	5.1	5.5	4.8	5.2	5.4	5.7
②一つではなく複数の情報源を元にいろいろな視点・立場から考えるようにしている。	5.7	5.9	5.4	5.8	5.8	6.1
③日頃から筋道を立てて考えを整理する。	5.3	5.5	5.0	5.2	5.5	5.8
④相手の話を聞きながら自分の考えや質問をまとめることができる。	5.2	5.6	5.2	5.6	5.5	5.7
⑤ものごとの背景や理由、影響等について多面的に考える。	5.3	5.6	5.3	5.7	5.6	6.0
B 問題発見・解決力	5.4	5.6	5.3	5.6	5.6	5.9
⑥疑問をもち、いろいろな場面から課題を見つけることができる。	5.2	5.5	5.1	5.6	5.5	5.8
⑦課題に気づいたり、見つけたりした時は、なんとか対処しようとする。	5.6	5.6	5.4	5.6	5.7	6.0
⑧課題に取り組む時は、「何が問題であるか」を明確に把握する。	5.6	5.9	5.4	5.8	5.8	6.1
⑨解答の正誤がはっきりしない課題に対しても解決策を見つけようとする。	5.1	5.5	5.1	5.3	5.5	5.8
C 異文化理解力	6.0	6.0	6.0	6.3	6.3	6.7
⑩自分が当然だと思うこととは異なる考え方や習慣に興味・関心がある。	5.8	5.9	5.8	6.2	6.2	6.6
⑪自分と直接関わりがないような他人のこと、他の国（地域）のことでも、関わりたいと思う。	5.4	5.5	5.7	5.8	6.0	6.4
⑫自分とは異なる国（グループ）の人々の考え方を認めることができる。	6.1	6.2	6.1	6.3	6.2	6.6
⑬自分とは異なる国（グループ）の人々と関わることは価値があると思う。	6.7	6.5	6.5	6.7	6.7	7.1
D プレゼンテーション能力（表現力）	4.9	5.5	5.0	5.5	5.3	5.5
⑭わかりやすく説明したり、効果的に表現したりすることを意識して、コンピュータやプレゼンテーションソフトを活用できる。	4.6	5.5	4.9	5.5	5.1	5.4
⑮自分の意見や立場を相手にわかってもらえるように表現したり発表したりすることができる。	5.0	5.5	5.1	5.6	5.3	5.6
⑯相手の意見や立場を取り入れて表現したり発表したりすることができる。	5.0	5.4	5.0	5.3	5.4	5.6
E コミュニケーション能力	5.1	5.3	5.1	5.3	5.4	5.6
⑰自分の意見や立場を受け入れてもらえるように主張できる。	5.2	5.4	5.3	5.4	5.5	5.7
⑱相手の伝えたい気持ちや意見を引き出して聞くことができる。	5.1	5.3	5.0	5.3	5.3	5.5
⑲コミュニケーションがうまくいかない時は、新しい方法を取り入れるなど、工夫することができる。	5.0	5.1	5.1	5.2	5.3	5.6

F 英語によるコミュニケーション能力	3.8	4.3	4.5	4.6	4.9	5.1
⑳日常的な場面で、自分から相手に話したり（書いたり）して、自分の意思・意見を伝えることが、英語でできる。	4.1	4.4	4.8	4.9	5.2	5.3
㉑日常的な場面で、相手の意思・意見を踏まえて話したり（書いたり）することが、英語でできる。	4.0	4.5	4.7	4.8	5.0	5.1
㉒専門的な内容（例『アジア探究』）について、話し合う（書く）場面で、自分から相手に対して自分の意思・意見を伝えたりすることが、英語でできる。	3.6	4.1	4.2	4.4	4.7	4.9
㉓専門的な内容（例『アジア探究』）について話し合う（書く）場面で、相手の意思・意見を踏まえて話したり（書いたり）することが、英語でできる。	3.5	4.0	4.2	4.3	4.7	4.9
G グローバル課題への関心	5.9	6.0	5.9	6.2	6.3	6.5
㉔世界のいろいろな課題（問題）に対して興味・関心がある。	5.8	5.9	5.8	6.0	6.2	6.5
㉕グローバル課題（問題）に関心をもつことは、自分の将来や進路を考える上で重要である。	6.1	6.1	5.9	6.3	6.3	6.6
㉖世界や社会に対して自分が貢献できることを考え、行っていきたいと思う。	5.9	5.9	6.0	6.4	6.3	6.5
H 自国の伝統や文化に対する理解力	5.3	5.3	5.3	5.5	5.8	6.2
㉗自国の伝統や文化に対して興味・関心がある。	5.7	5.6	5.6	5.9	6.1	6.5
㉘自国の伝統や文化の良さや問題点をわかっている。	5.5	5.5	5.4	5.5	5.9	6.2
㉙自国の伝統や文化を世界（外国人）に発信する（伝える）ことができる。	4.8	4.8	5.0	5.0	5.4	5.8
I 将来留学することや、仕事で国際的に活躍したいという意欲	5.1	5.0	5.2	5.4	5.8	6.0

* 「I」に挙げた設問は、「8つの要素」には含まれない。

* 「AGH意識調査」は、SGH指定時に運営指導委員会の助言のもと、名城大学附属高等学校のSGTを参考に作成したものである。

（参考）令和3年度 学校評価アンケートの結果

* 5段階評価の平均、（ ）内は昨年度の同一母集団の数値

○本校がSSHであり、AGHであることは、生徒にとって有益である。

1年生 4.3 2年生 4.0 (4.2) 3年生 4.1 (4.1) 教職員 3.9 (4.1)

○本校がAGHであることは、生徒にとって有益である。

保護者 4.2 (4.2) 中学校 4.0 (4.1)

○本校がAGHであることは、周辺の中学校にとって有益である。

中学校 3.3 (3.4)

○本校のSSH・AGH事業は、生徒にとって有益である。

1年生 4.3 2年生 4.0 (4.1) 3年生 4.1 (4.1)

○本校は、AGH事業について積極的に広報している。

保護者 3.8 (3.8) 中学校 3.1 (3.4)

○本校のSSH・AGH事業（探究活動の指導を含む）は、教員の能力向上に有益である。

教職員 3.7 (4.0)

○本校の教育活動には、国際交流など他校にはない特色や魅力がある。

1年生 4.1 2年生 3.8 (4.2) 3年生 4.2 (4.2) 中学校 4.4 (4.5)

○本校の国際交流事業は、生徒にとって有益である。 保護者 4.3 (4.3)

○本校は、国際理解を深める教育を推進している。 教職員 4.3 (4.5)

令和2年度指定あいちグローバルハイスクール研究開発
実施報告書・第2年次

発 行	令和4年3月
発行者	愛知県立時習館高等学校 校長 森島 日出夫
住 所	〒441-8064 愛知県豊橋市富本町
電 話	(0532) 45-3171
FAX	(0532) 47-7544

申